

# 柏崎市の遺跡23

—新潟県柏崎市内遺跡 平成24年度前半期試掘調査等報告書—

2014

柏崎市教育委員会

# 柏崎市の遺跡23

— 新潟県柏崎市内遺跡 平成24年度前半期発掘調査報告書 —

2014

柏崎市教育委員会



# 序

柏崎市内遺跡発掘調査事業では、国県の補助金を得て、おもに試掘調査・確認調査を実施しています。これは、遺跡の範囲と推定される区域に何らかの土木工事等が計画された場合、遺跡の有無や内容など、遺跡の保護に関して必要なデータを得るために行っているものです。第23期となる平成25年度も17件の試掘調査等を実施しました。また、現場の調査業務のほかにも、平成24年度（第22期）に実施した18件の調査について整理業務を継続しました。本書では、おもに平成24年度前半期の実施となった10件の調査に1件の工事立会を加えた11件（9遺跡等）の調査報告を収録しています。後半期に実施した調査では、3か所で新たな遺跡が発見され、2か所で遺跡範囲の拡大が確認されていますが、これらについては別書にて報告することといたします。

近年は各種工事の増加に伴い、以前に比べると調査件数も多くなっています。遺跡の保護に関わる本事業のニーズは高まっているといえるでしょう。試掘調査等であることから、それぞれの調査は小規模なものがほとんどですが、得られた資料の蓄積が、各地域における歴史の理解へつながっていくことができれば幸いです。

最後に、埋蔵文化財の保護に御理解と御協力をいただいた各土木工事等の事業主体者及び関係各位、日頃から本事業に格別なる御助力と御配慮をいただいている新潟県教育委員会、そして調査に参加されました調査員・補助員の皆様に対し、深く感謝と御礼を申し上げます。

平成26年3月

柏崎市教育委員会

教育長 大倉政洋

## 例　　言

1. 本報告書は、新潟県柏崎市における各種の土木工事等に伴って実施した試掘調査・確認調査等の記録である。
2. 本報告書は、柏崎市教育委員会が主体となり、国・県の補助金を得て平成3年度から実施している「柏崎市内遺跡発掘調査等事業」により作成した。平成25年度は第23年次(第23期)であることから、本報告書は『柏崎市の遺跡23』とした。
3. 第23期で刊行する本報告書は、平成24年度のおもに前半期に実施した、合計11件の試掘調査等の報告を所収する。試掘調査等の内訳は、周知の埋蔵文化財包蔵地における確認調査2件、6地区における試掘調査8件、遺跡隣接地における工事立会1件である。対象となった遺跡・地区は9か所である。
4. 各調査の現場業務は、教育総務課(遺跡考古館)職員及び柏崎市遺跡考古館のスタッフを調査員・調査補助員として実施した。

整理・報告書作成業務は、平成25年12月までは柏崎市遺跡考古館(柏崎市小倉町)・同館西山整理室(柏崎市西山町西山)、平成26年1月からは埋蔵文化財事務所(柏崎市西山町坂田)において、職員(学芸員)を中心に行った。

5. 調査によって出土した遺物の注記は、各遺跡・地区等の略称の他、試掘坑名、層序等を併記した。
6. 本事業で出土した遺物並びに調査や整理業務の過程で作成した図面・記録類は、すべて一括して柏崎市教育委員会(埋蔵文化財事務所)が保管・管理している。
7. 本報告書の執筆は、次のとおりの分担執筆とし、編集は伊藤が行った。

第II章(第1節を除く)・第VI章・第VII章……………平吹 精

第III章……………中島義人

その他……………伊藤啓雄

8. 本書掲載の図面類の方針は全て真北である。磁北は真北から西偏約7度である。

9. 発掘調査から本書作成に至るまで、それぞれの事業主体者及び関係者等から様々な御協力と御理解を賜った。記して厚く御礼を申し上げる次第である。

相羽重徳 株式会社ウオロク 株式会社明和 ソフトバンクモバイル株式会社

北鶴石コミュニティ振興協議会 中通コミュニティ振興協議会 別俣コミュニティ振興  
協議会 新潟県(柏崎地域振興局) 新潟県教育委員会 柏崎市

(順不同・敬称略)

## 目 次

I	序 説	1
II	高田北部地区（第1次）	5
III	内郷地区（第2次）	13
IV	別俣地区（第3・4次）	16
V	藤井城跡（第5次）	25
VI	飯・中田地区（第1・2次）	28
VII	上沢田遺跡 隣接地	38
VIII	野田地区（第1次）	41
IX	桜木町遺跡（第2次）	45
X	長崎新田地区等	53
XI	総 括	58
〈引用・参考文献〉		58
〈報告書抄録〉		卷末

## 図版目次

図版1	高田北部地区（第1次）	1
図版2	高田北部地区（第1次）	2
図版3	高田北部地区（第1次）	3
図版4	高田北部地区（第1次）	4
図版5	高田北部地区（第1次）	5
図版6	高田北部地区（第1次）	6
図版7	内郷地区（第2次）	
図版8	別俣地区（第3・4次）	1
図版9	別俣地区（第3・4次）	2
図版10	別俣地区（第3・4次）	3
図版11	別俣地区（第3・4次）	4
図版12	別俣地区（第3・4次）	5
図版13	藤井城跡（第5次）	1
図版14	藤井城跡（第5次）	2
図版15	鶴・中田地区（第1次）	1
図版16	鶴・中田地区（第1次）	2
図版17	鶴・中田地区（第2次）	1
図版18	鶴・中田地区（第2次）	2
図版19	鶴・中田地区（第2次）	3
図版20	鶴・中田地区（第2次）	4
図版21	上沢田遺跡・隣接地	1
図版22	上沢田遺跡・隣接地	2
図版23	野田地区（第1次）	1
図版24	野田地区（第1次）	2
図版25	桜木町遺跡（第2次）	1
図版26	桜木町遺跡（第2次）	2
図版27	桜木町遺跡（第2次）	3
図版28	桜木町遺跡（第2次）	4
図版29	桜木町遺跡（第2次）	5
図版30	桜木町遺跡（第2次）	6
図版31	長崎新田地区等	1
図版32	長崎新田地区等	2
図版33	長崎新田地区等	3

## 挿図目次

第1図	平成24年度柏崎市埋蔵文化財調査（現場業務）工程図	/2
第2図	平成24年度埋蔵文化財試掘調査等位置図	/4
第3図	高田北部地区試掘調査 対象区位置図	/7
第4図	高田北部地区試掘調査 トレンチ配置図	/8
第5図	高田北部第1次試掘調査 基本層序柱状模式図①	/10
第6図	高田北部第1次試掘調査 基本層序柱状模式図②	/11
第7図	内郷地区第2次試掘調査の範囲と周辺の地形・遺跡	/14
第8図	内郷地区第2次試掘調査 トレンチ配置図・基本層序柱状模式図	/15

第9図	別俣地区試掘調査 位置図	/17
第10図	別俣地区試掘調査 試掘坑配置図	/18・19
第11図	別俣地区第3・4次試掘調査 基本層序柱状模式図	/23
第12図	藤井城跡第5次確認調査 位置図	/27
第13図	藤井城跡第5次確認調査 試掘坑位置図	/27
第14図	藤井城跡第5次確認調査 基本層序柱状模式図	/27
第15図	鶴・中田地区第1次・第2次試掘調査 対象区位置図	/29
第16図	鶴・中田地区第1次試掘調査 トレンチ配置図	/31
第17図	鶴・中田地区第1次試掘調査 対象区基本層序柱状模式図	/32
第18図	鶴・中田地区第2次試掘調査 トレンチ配置図	/35
第19図	鶴・中田地区第2次試掘調査 対象区基本層序柱状模式図	/37
第20図	上沢田遺跡隣接地工事立会の位置と周辺の遺跡	/39
第21図	上沢田遺跡隣接地工事立会 概要図	/39
第22図	上沢田遺跡隣接地工事立会 基本層序柱状模式図	/40
第23図	野田地区第1次試掘調査 対象区位置図	/42
第24図	野田地区第1次試掘調査 トレンチ配置図	/43
第25図	野田地区第1次試掘調査 対象区基本層序柱状模式図	/44
第26図	桜木町遺跡第2次確認調査 位置図	/46
第27図	桜木町遺跡第2次確認調査 試掘坑配置図	/47
第28図	桜木町遺跡第2次確認調査 基本層序柱状模式図	/49
第29図	桜木町遺跡出土・採集遺物	/50
第30図	長崎新田地区等試掘調査 対象区域	/55
第31図	長崎新田地区等試掘調査 試掘坑配置図	/55
第32図	長崎新田地区等試掘調査 基本層序柱状模式図	/57
第33図	長崎新田地区等試掘調査 出土・採集遺物	/57

## 挿表目次

第1表	柏崎市内遺跡発掘調査等事業 調査体制	/2
第2表	高田北部地区第1次試掘調査 トレンチ一覧表	/9
第3表	別俣地区第3・4次試掘調査 試掘坑一覧表	/21
第4表	桜木町遺跡第2次確認調査 試掘坑一覧表	/51
第5表	長崎新田地区等試掘調査 試掘坑一覧表	/54

# I 序 説

## 1 平成24年度 柏崎市の埋蔵文化財業務

柏崎市教育委員会（以下、「教育委員会」は「教委」とする）では、第22期となる平成24年度も国県の補助金を得て試掘調査等を実施し、第23期となる平成25年度に整理業務を継続した。そして、おもに平成24年度前半期に実施した試掘調査等については、本書にて報告を行い、後半期については別書にて報告する。以下では、平成24年度の業務概要のほか、おもな調査業務について概観する。

**業務概要** まず、平成24年度における当市教委では、文化財保護法第93条の届出12件、第94条の通知20件を受理した。また、土木工事等に係る埋蔵文化財の所在確認も53件の依頼があった。実施した調査（現場業務）としては、本發掘調査3件、試掘調査・確認調査18件、工事立会13件である。また、複数事業の整理業務も進めており、5冊の報告書（『音無瀬I』・『天皇峰』・『柏崎市の遺跡別冊I』・『柏崎市の遺跡22』・『音無瀬II』）を刊行している〔柏崎市教委2012・同2013a・同2013b・同2013c・同2013d〕。その他、7月14日～8月26日には、柏崎市立博物館を会場に、ミニ展示「上条城夏の陣2012－焼き物でつづる上条城の歴史－」を開催した。

**試掘調査・確認調査** 各種の開発事業等について、施工区域内における遺跡の有無を確認するための試掘調査、範囲・性格・内容等の概要等を把握するための確認調査を実施した。平成24年度に実施した試掘調査・確認調査を原因事業別にみると、県営は場整備事業7件（高田北部地区2件・善根遺跡群・内郷地区2件・別侯地区2件）、県営農道整備事業1件（劍下川原遺跡）、県道改良事業1件（長嶺バイパス関連地区）、県営河川改修事業4件（鏡地区・中田地区・野田地区・長崎新田地区等）、市道改良事業2件（琵琶島城跡・丘江遺跡）、民間等事業3件（藤井城跡・桜木町遺跡・野田正免遺跡）となる。

なお、整理業務において、平成23年度に実施した11件の試掘調査・確認調査の報告書（『柏崎市の遺跡22』）を作成した〔柏崎市教委2013c〕。平成22年度が6件であったことを考えれば、近年の調査件数は増加傾向にあることがわかる。

**工事立会** 調査対象範囲が狭小な場合や工事による遺跡への影響が軽微である場合などにおいて実施した。平成24年度に実施した工事立会を原因事業別にみると、国営農業水利ダム関連事業2件（高原田遺跡・宮原A遺跡）、県営かんがい排水事業1件（椎田町遺跡等）、市用水路事業1件（宮原B遺跡）、市道改良事業2件（藤井城跡・畔屋地区）、市防災広場整備事業1件（東本町地区）、民間事業6件（上沢田遺跡・古町遺跡・北条城跡・琵琶島城跡・北田遺跡・上原遺跡）となる。遺跡への影響が軽微な事例が多かったが、藤井城跡・東本町地区・上沢田遺跡では、若干の遺物が確認されている。上沢田遺跡については、本書にて報告したい（第VII章）。

**本発掘調査** 現場業務としては、記録保存のための調査として、長嶺前田遺跡・黒部古屋敷遺跡・坂田遺跡の3件を実施している。前2遺跡は県道改築事業、坂田遺跡は市道改良事業を原因とする〔柏崎市教委2014a・同2014b〕。整理業務については、前述のとおり複数の事業を進めており、報告書は5冊を刊行することができた。

調査地名	所在地	調査期間	4月	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	文化財総括	調査率	備考
<b>平成24年度調査</b>																	
長崎市田代町	西山町・長崎・丸山	熱海森古													0件	0件分	
長崎市佐世保町	西山町・黒瀬	熱海森古													15件		
長崎市清野町	西山町・対馬	熱海森古													15件		
<b>平成25年度調査</b>																	
長崎市北松原町 (第1回)	勝原・横山	熱海森古埋蔵	■												25,000	N	
長崎市北松原町 (第2回)	勝原・横山・上方	熱海森古埋蔵		■											223,000	別表	対馬遺跡
長崎市道賀町 (第1回)	勝原	熱海森古埋蔵			■										58,000	別表	勝原古墳群・勝原山遺跡
内浦地区 (第1回)	西山町・伊毛	熱海森古埋蔵				■									21,400	H	
内浦地区 (第2回)	西山町・伊毛	熱海森古埋蔵					■								71,400	別表	伊毛大森古墳群
別所地区 (第1回)	久米	熱海森古埋蔵					■								33,140	N'	
別所地区 (第2回)	久米	熱海森古埋蔵						■							35,000	N'	
東丁子遺跡・御所地 (第1回)	勝原	熱海森古埋蔵						■							2,400	別表	
長崎市ハイバニア園地区 (第4回)	西山町・長崎	熱海森古							■						250	別表	
島・中田原地区 (第1回)	勝原	熱海河川改修								■					4,450	V1	
島・中田原地区 (第2回)	中田原	熱海河川改修								■					6,617	V1	
野間地区 (第1回)	野間	熱海河川改修								■					1,500	V8	
長崎市御所地区	長崎・新田・吉能新田	熱海河川改修								■					6,020	X	
經肥島崎地区 (第4回)	経肥島・丁目	中浦森古								■					630	別表	
丘之邊町 (第1回)	丘之邊町	中浦森古								■					900	別表	
經肥島崎地区 (第2回)	経肥島	石狩移転								■					10	Y	
佐木崎町 (第2回)	佐木町	吉浦移転								■					12,000	K	
野間正光遺跡	野間	熱海電線接続								■					36	別表	
<b>土木工事</b>																	
浜脇用潤	友谷	熱海ボーリング調査									■				0.02		
官営A遺跡	友谷	熱海ボーリング調査									■				0.02		
種子町遺跡・戸口遺跡・佐佐木跡	吉井	熱海山ふぶき水										■			554		
官営B遺跡	友谷	用原水										■			100		
芦津城跡 (第6回)	藤井	中浦森古										■			1,800		
野間地区	坪尾	中浦森古										■			540		
東久茂町	東久茂町	中浦河川改修										■			56		
上長崎遺跡・洞窟地	西山町・対馬	熱海花び詠調査										■			26	V8	
吉井遺跡・磯原地	吉井	熱海河川改修										■			720		
北島城跡	北島	熱海セビアアンチナ										■			11		
辻田島崎跡	吉浦町	個人住宅										■			91		
北島遺跡	吉浦	個人住宅										■			88		
上原跡	上原	個人住宅										■			1,273		

第1図 平成24年度柏崎市埋蔵文化財調査(現場業務)工程図

調査主体		柏崎市教育委員会 教育長 大倉政洋 (担当:教育秘課 埋蔵文化財係)																			
年度	業務	平成24年度 現場業務・整理業務							平成25年度 整理業務												
総括	本間敏博 (教育部長)																				
監理	猪俣哲夫 (課長)																				
庶務	小池繁生 (課長代理兼係長)																				
調査担当	高橋真美 (非常勤職員) ~9月 重住知夏 (非常勤職員) 10月~																				
調査員	山崎忠良 (新潟県教育庁 文化行政課 主任調査員) 平吹 靖 (主査・学芸員) 伊藤啓雄 (主査・学芸員) 中島義人 (主査・学芸員)																				
調査補助員	阪田友子 (埋蔵文化財調査員) 鶴間香代子 (埋蔵文化財調査員) 丸山道子 (埋蔵文化財調査員)																				
整理補助員	池田文江・大野博子・片山和子・小林 薫・月橋香奈子・萩野しげ子・岸山サチ子・吉浦啓子 (50音順)																				
整理補助員	大野博子・片山和子・小林 薫・月橋香奈子・萩野しげ子 (50音順)																				

※ 調査補助員、整理補助員はパート職員

第1表 柏崎市内遺跡発掘調査等事業 調査体制

## 2 調査体制

平成 24 年度の現場業務から、平成 25 年度の報告書刊行に至る整理業務までの調査体制は、第 1 表のとおりである。

## 3 柏崎平野と試掘調査等の位置

### 1) 柏崎平野概観

新潟県の中央部は中越地方と呼ばれている。中越は、標高 1,500 m 級以上の連山が続く東側と、河川や海岸に沿って発達した段丘・平野がみられる西側に区分されるが [小林ほか 2008]、柏崎平野は西側の一部といえる。柏崎平野は、鯖石川と鶴川を主要河川として形成された臨海沖積平野であり、各河川は個々に独立した水系を持っている。そして、信濃川水系の越後平野や関川水系による頸城平野とは丘陵や山塊による分水嶺によって隔されており、ひとつの独立した平野を形成している。

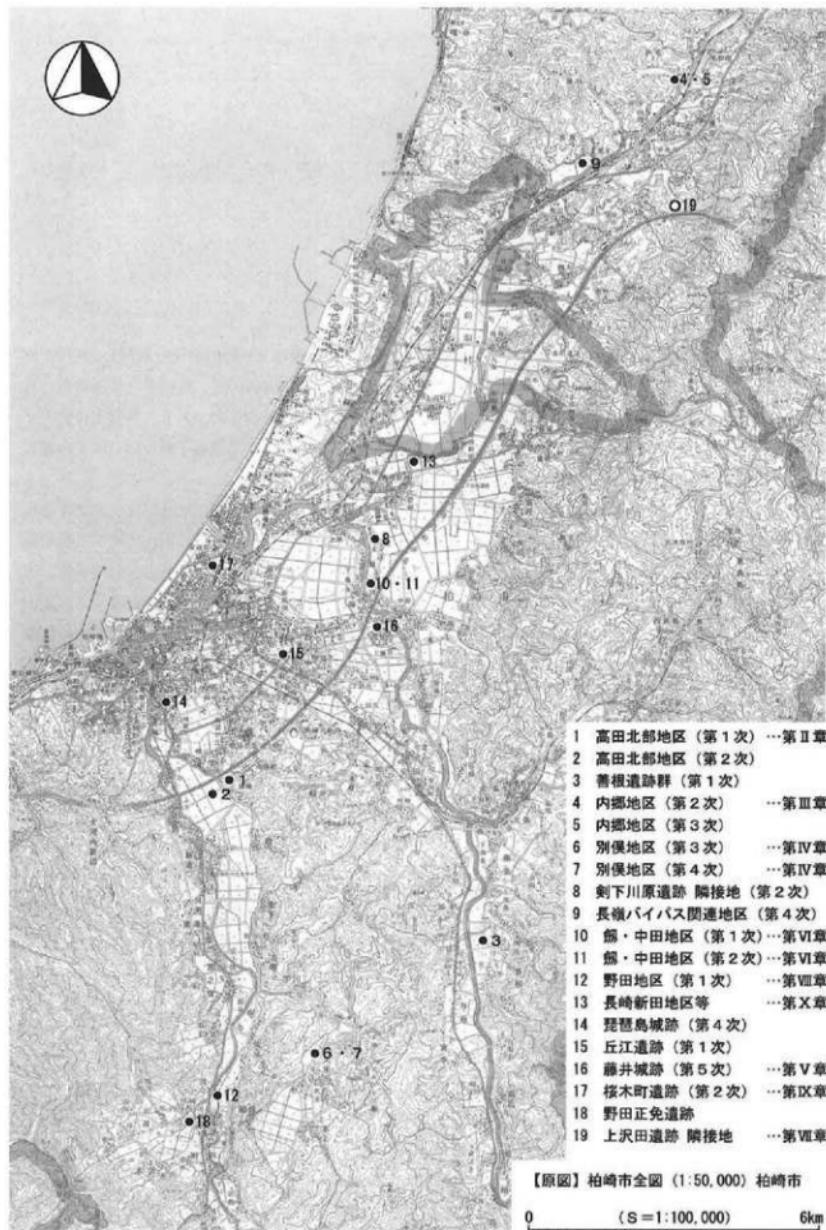
柏崎平野を取り巻く丘陵・山塊は、東頸城丘陵の一部である。柏崎平野一帯の丘陵地形は、北流する鶴川・鯖石川によって西部・中央部・北～東部に 3 分され、それぞれ米山・黒姫山・八石山の刈羽三山を頂点とする。西部は、米山を頂点とした傾斜の強い山塊であり、現在も隆起を続けているとされている。これら山塊・丘陵地形の広がりは海岸にまで達し、米山海岸と称される国定公園の景勝地を形成する。米山海岸の景観は、沿岸部に低位・中位・高位の各段丘による断崖が顕著であり、沖積地は少なく、海辺は漂石海岸で砂浜もほとんどみられないことが特徴となっている。中央部は、黒姫山を頂点に北へ緩やかに高度を下げ、沖積地に接する一帯には広い中位段丘を形成するとともに、その北側には湿地性の強い沖積地が広がっている。北～東部は、北東方向の背斜軸に沿って、西山丘陵・曾地丘陵・八石山丘陵が北から規則的に並び、向斜軸に沿って別山川・長鳥川といった鯖石川の支流が南西に流れ出る。

平野の地形は、中・上部更新統～完新統からなる段丘、多くが地下に埋没した上部更新統からなる古(旧期)砂丘のはか、更新統の最上部～完新統からなる河道・旧河道・自然堤防・後背湿地・新砂丘などに区分される [柏崎平野団体研究グループ 1979]。日本海に洗われる北西部は海岸に沿って荒浜砂丘・柏崎砂丘が横たわり、現在では柏崎の市街地がこれを覆っている。平野部をなす沖積地は、砂丘後背地として湿地性が強く、鶴川・鯖石川の蛇行により、各所に幾筋もの自然堤防が形成されている。

なお、柏崎平野には、柏崎市のほかに刈羽郡西山町・同郡刈羽村・同郡高柳町が所在したが、平成 17 年 5 月に西山町・高柳町が柏崎市に合併したため、現在は別山川流域の一部に刈羽村域がある以外は、柏崎市域が大半を占めている状況である。

### 2) 平成 24 年度試掘調査等の位置

平成 24 年度に試掘調査等を実施した地点は、第 2 図のとおりである。河川の流域別にみると、鶴川上～中流域 (野田正免遺跡・野田地区・別俣地区)、同中～下流域 (高田北部地区・琵琶島城跡・東本町地区)、鯖石川中流域 (善根遺跡群)、同下流域及び周辺 (藤井城跡・中田地区・鏡地区・劍下川原遺跡・桜木町遺跡・長崎新田地区等・丘江遺跡)、別山川上～中流域 (内郷地区・上沢田遺跡・長嶺バイパス関連地区) となる。本書で報告する遺跡等の位置や環境については、各章を参照されたい。



第2図 平成24年度埋蔵文化財試掘調査等位置図

## II 高田北部地区（第1次）

- 経営体育成基盤整備事業（面的集約型）高田北部地区に係る試掘調査 -

### 1 調査に至る経緯

柏崎市藤橋・横山周辺の高田北部地区は、市街地から南へ約4kmの位置にある。地形的には、鶴川中流域右岸に合流する支流軽井川の左岸周辺にあたる。沖積地では、一部に宅地化がみられるが、大半は水田が広がっている。また、周辺には茅原遺跡や前掛遺跡といった古代の遺跡が知られている。

このたび、高田北部地区を調査する原因となったのは、経営体育成基盤整備事業（面的集約型）高田北部地区（以下、「原因事業」とする）で、新潟県柏崎地域振興局（担当：農業振興部 農村整備課）を事業主体とする。平成23年度に事業採択、平成28年度に完了となる計画である。事業地は、西側に第1工区、東側に第2工区があり、面整備工・道路工・用水路工・排水路工などが行われる。第1工区は鶴川右岸の後背地に連なる水田地帯の一部であり、面積は23.1haである。第2工区は軽井川の左岸に面しており、面積は9.5haとなる。

原因事業について、事業主体者との協議を開始したのは、平成23年度からである。8月3日・18日、事業主体者から事業計画について情報の提供があった。そして、現地踏査を要望されたので、市教委が対応することとした。10月26日、第2工区の試掘調査を平成24年度の収穫後に実施することを要望された。本発掘調査が必要となった場合は、平成25年4月以降の実施とする。平成23年度の収穫後、現地踏査を10月4日から行ったが、諸条件により本格的には11月以降となった。12月15日、現地踏査は終了であったが、第1工区で広範囲にわたって古代・中世の遺物が散布する状況が確認されたことから、事業主体者へ中間報告を行った。第1工区では、浅い深度に未周知の遺跡が存在する可能性が高くなつたため、面整備について保護盛土とする設計を目指すこととなつた。

12月21日に延べ7日間の現地踏査が終了し、平成24年1月6日に現地踏査の結果を取りまとめた。遺物が稀薄な第2工区では明らかではなかったが、多くの遺物が採集された第1工区では前述のように未周知の遺跡が想定された。1月10日、この結果をもとに事業主体者と協議した。第1工区では保護盛土の設計とすること、排水路部分の本発掘調査が必要となる可能性があることなどを確認した。

1月18日、第2工区は平成24年度に休耕し、予定どおり着工されることとなつたため、試掘調査は年度当初に実施する旨を事業主体者から依頼された。そのため、第2工区の試掘調査は、平成24年4～5月に早められた。年度が改まった4月3日の協議では、第2工区の試掘調査結果を5月までに報告することとなつた。そして、原因事業全体について、平成24年4月10日付け柏振農第36号で事業主体者から埋蔵文化財の調査が正式に依頼された。同年4月17日付け教総第513号で県教委教育長へ埋蔵文化財発掘調査の報告をし、第2工区を対象とする第1次試掘調査を17～20日に実施した。結果については、5月7日付け教総第523号で県教委教育長へ、同日付け教総第522号で事業主体者へそれぞれ報告した。

なお、平成24年10月には第1工区を対象とした第2次試掘調査を実施しているが、これについては別書にて報告することとしたい。

## 2 試掘調査の概要

### 1) 調査の目的と方法

第1次試掘調査の目的は、藤橋地内の北部に位置する原因事業の第2工区における未周知遺跡の有無を確認することである。先行して平成23年度の秋に現地踏査を実施している。踏査時期は雑草等が残っている状況であったため、踏査範囲は第2工区全体の4割程度に限られた。用地の西側部分で土壌器とみられる土器小片2点のみが採取されている。表面観察となる踏査では遺跡の有無が判断不可能であったため、後日、試掘調査を実施することとなった。

試掘調査対象区域の現況は、概ね水田となる。ただし、ごく一部のみが畠地となり耕作物が残っている状況であったため、この部分については調査対象から除外した。その他の水田は同年度に工事を計画しているために耕作がされていない状況にあり、ほぼ全体が調査対象範囲となった。調査対象面積は約95,000m<sup>2</sup>となる。地形的には二級河川鶴川に合流する小河川・軽井川によって形成された幅300m以下の沖積地に相当する。標高は上流部で約5.0m、下流部で約3.9mとなる。

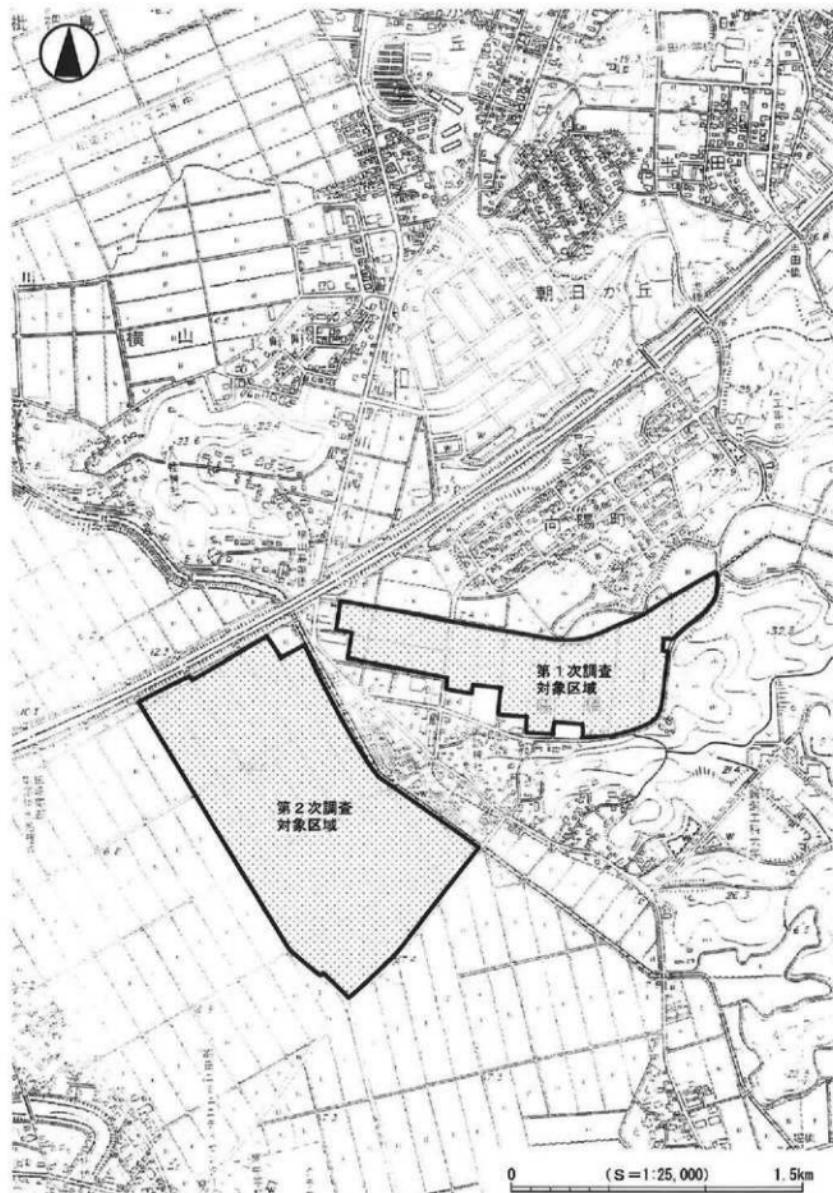
調査の方法としては、水田内の任意の位置に試掘トレンチを設定し、バックホー(0.45m<sup>3</sup>)で発掘した。調査対象区内には幾筋もの水路が存在し、重機の通行の障害となったが、移動方向を予め決定しロスの少ないよう努めた。遺構確認と土層観察のほか、試掘トレンチの位置や各土層の標高についても調査員で測量作業を実施した。

### 2) 調査の経過と試掘坑の概要

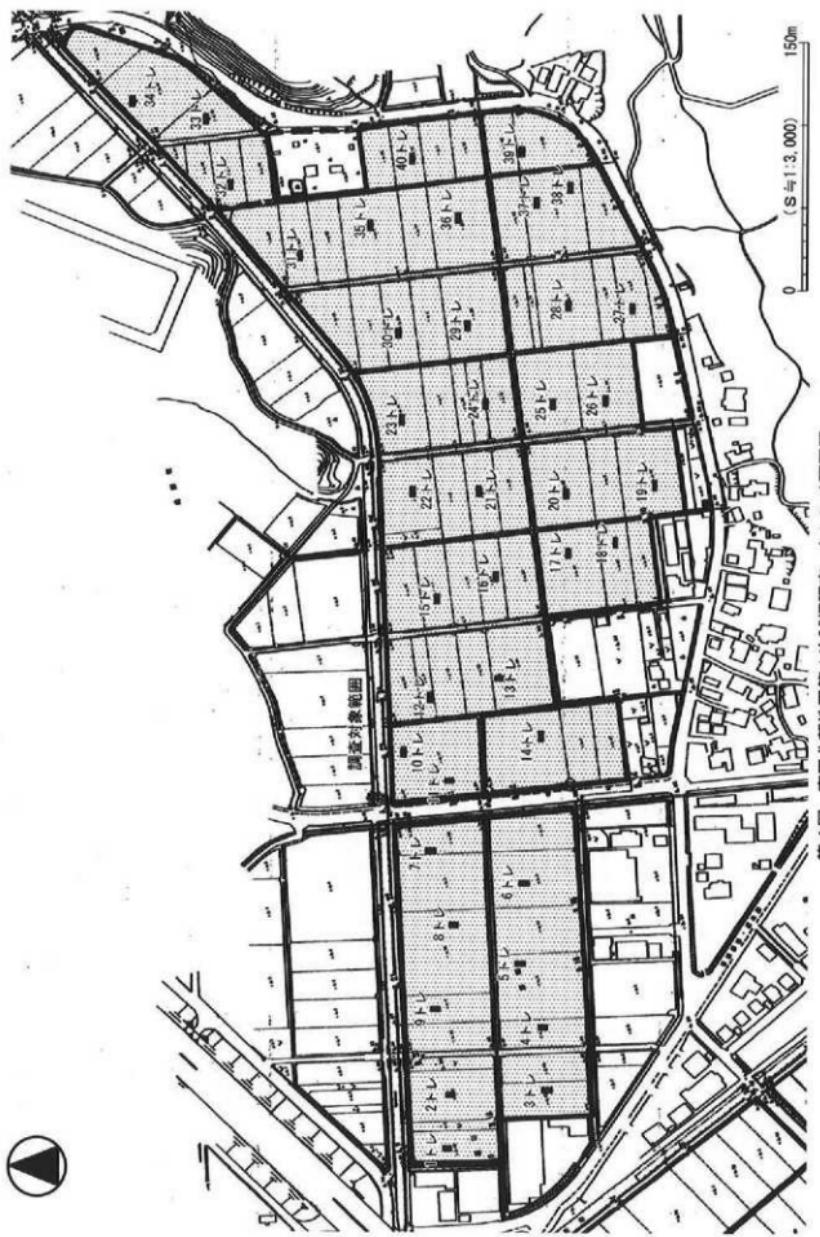
第1次試掘調査は、当初平成24年4月17日から4月20日の計4日間で実施した。調査員は担当職員を含む延べ20名となる。試掘トレンチは合計で40か所となり、面積は約359.8m<sup>2</sup>となる。調査対象区域の面積は約95,000m<sup>2</sup>となり、発掘面積の比率(発掘率)は約0.48%となる。

**4月17日** 初日の天候は、開始当初は曇りであり、昼前は小雨に見舞われたが、午後は曇りに回復した。1~9トレンチを発掘した。調査対象区域の西側から試掘調査を開始した。表土以下には炭化物を含む暗灰褐色粘土(第II層)がみられ、水田を造成する際の盛土整地層と判断されるものであった。1・2トレンチではその下に粘性・締まりのある青灰色粘土(第V層)がみられた。混入物を含まず、柏崎平野に一般的にみられる地山土と判断され、本層上面を遺構確認面として遺構確認を行っていった。5トレンチでは地山土がやや酸化しており、標高約4.2mと最も高い位置から検出されている。3・6トレンチでは地山土の上位に黒褐色腐植土(第III層)の堆積がみられ、7トレンチでは深度約1.1m以下まで厚い堆積が続いていた。この腐植土層は細かく朽ちた木片や大きな木材を含むカクモ層とされるもので、締まりに乏しいものとなる。湧水や崩落が想定され、遺跡が形成されるような環境とは想定されないため、深度1.0m以下まで続く場合はそれ以上の掘削は実施しないものとした。計9つのトレンチから遺構・遺物は検出されなかった。

**4月18日** 調査2日目となる。朝方まで霧雨が降っていたが、調査開始頃から天候が回復していった。調査対象範囲の中央西側部分の調査を実施した。10~20トレンチを設定し、計11か所に試掘トレンチを発掘した。10・12~14トレンチでは概ね青灰色粘土となる地山土が検出されている。15~20トレンチは調査対象範囲のほぼ中央部分となるが、腐植土の堆積が厚く16トレンチを除き掘削深度内に地山土を検出



第3図 高田北部地区試掘調査 対象区位置図



第4図 高田北部地区第1次試掘調査 トレーンチ配置図

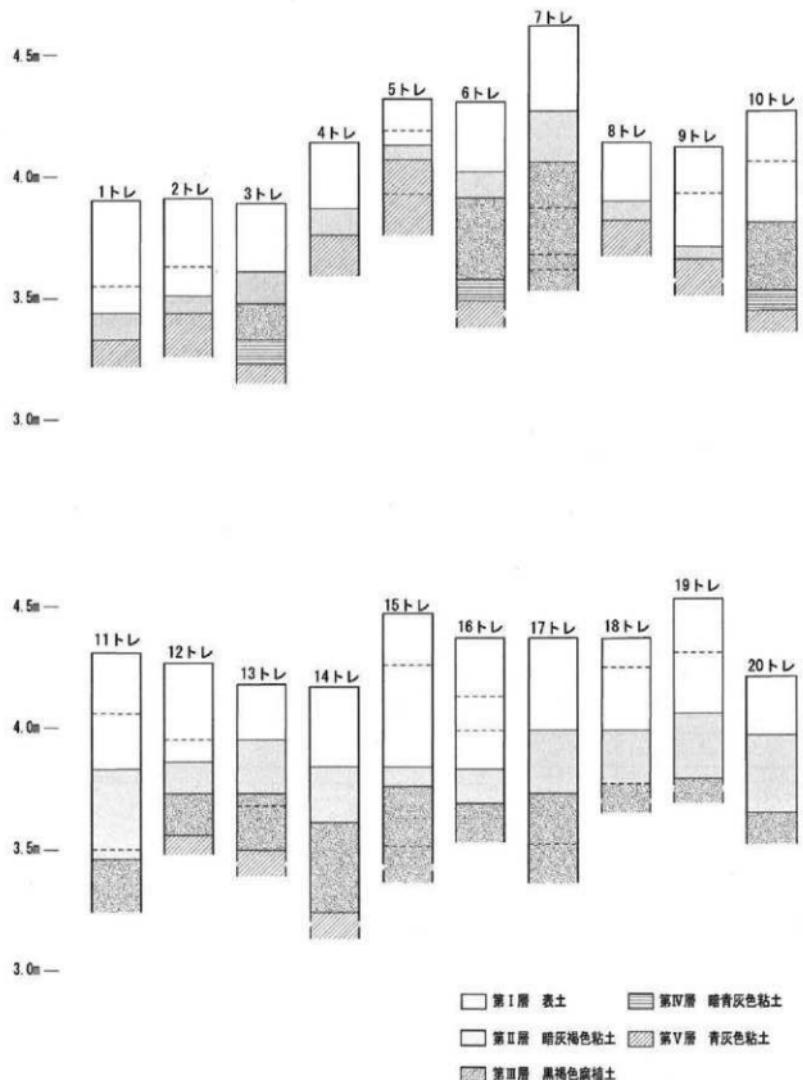
トレンチ番号	延長 (m)	幅 (m)	面積 (m <sup>2</sup> )	土層	確認面標高 (m)	堆積深度 (m)	遺構有無	備考	
								Ⅰa, Ⅰb, Ⅱa, Ⅴ	Ⅲ, Ⅳ, Ⅴ
1	4.7	2.0	9.4	Ia, Ib, IIa, V	3.355	0.680	無		
2	5.1	2.0	10.2	Ia, Ib, IIa, V	3.445	0.650	無		
3	4.3	2.0	8.6	I, II, III, IV, V	3.235	0.750	無		
4	3.9	2.0	7.8	I, II, V	3.760	0.550	無		
5	4.2	2.0	8.4	Ia, Ib, IIa, V	4.070	0.560	無	地山土酸化	
6	4.3	2.0	8.6	I, II, III, IV, V	3.490	0.860	無		
7	4.3	2.0	8.6	I, II, III	-	1.095	無	カクモ層厚く、地山土未検出	
8	4.2	2.0	8.4	I, II, V	3.820	0.465	無		
9	4.2	2.0	8.4	Ia, Ib, IIa, V	3.660	0.540	無		
10	3.7	2.0	7.4	Ia, Ib, III, IV, V	3.450	0.910	無		
11	5.5	2.0	11.0	Ia, Ib, II, III	-	1.075	無	カクモ層厚く、地山土未検出 第Ⅱ層の下部が暗青灰色砂となる	
12	5.0	2.0	10.0	Ia, Ib, II, III, V	3.560	0.790	無	第Ⅲ層東に傾斜する カクモ層に木材混入	
13	4.9	2.0	9.8	I, II, III, V	3.500	0.725	無		
14	4.2	2.0	8.4	I, II, III, V	3.240	0.980	無		
15	4.1	2.0	8.2	Ia, Ib, II, III	-	1.030	無	カクモ層厚く、地山土未検出	
16	4.8	2.0	9.6	Ia, Ib, II, III, V	3.685	0.845	無		
17	4.5	2.0	9.0	I, II, III, IV	-	0.995	無	カクモ層厚く、地山土未検出	
18	4.7	2.0	9.4	Ia, Ib, II, III	-	0.635	無	カクモ層厚く、地山土未検出	
19	4.6	2.0	9.2	Ia, Ib, II, III	-	0.735	無	カクモ層厚く、地山土未検出	
20	4.7	2.0	9.4	I, II, III	-	0.690	無	カクモ層厚く、地山土未検出 カクモ層に木材混入	
21	4.1	2.0	8.2	Ia, Ib, II, III	3.580	0.980	無		
22	4.2	2.0	8.4	I, II, III	3.650	1.070	無		
23	4.7	2.0	9.4	I, II, III, IV, V	3.480	1.115	無	カクモ層に木材混入	
24	4.8	2.0	9.6	Ia, Ib, II, III, IV, V	3.405	0.945	無		
25	4.0	2.0	8.0	I, II, III, V	3.340	0.955	無		
26	3.5	2.0	7.0	I, II, III	-	1.060	無	カクモ層厚く、地山土未検出	
27	4.9	2.0	9.8	I, II, III	-	0.980	無	カクモ層厚く、地山土未検出	
28	5.0	2.0	10.0	I, II, III	-	1.120	無	カクモ層厚く、地山土未検出	
29	5.1	2.0	10.2	I, II, III, IV	3.310	1.140	無	カクモ層厚く、地山土未検出	
30	4.5	2.0	9.0	Ia, Ib, II, III, IV, V	-	1.120	無	カクモ層厚く、地山土未検出 木材混入	
31	4.9	2.0	8.0	I, II, III, IV	-	0.975	無	カクモ層厚く、地山土未検出	
32	4.4	2.0	8.8	Ia, Ib, II, III, IV,	-	1.115	無	カクモ層厚く、地山土未検出	
33	4.9	2.0	9.8	Ia, Ib, II, III	-	1.150	無	カクモ層厚く、地山土未検出 木材混入	
34	5.0	2.0	10.0	Ia, Ib, II, III, IV, V	-	1.140	無	カクモ層厚く、地山土未検出 木材混入	
35	4.0	2.0	8.0	Ia, Ib, II, III	-	0.875	無	カクモ層厚く、地山土未検出	
36	4.2	2.0	8.4	I, II, III	-	0.930	無	カクモ層厚く、地山土未検出	
37	4.2	2.0	8.4	I, II, III	-	0.850	無	カクモ層厚く、地山土未検出	
38	4.2	2.0	8.4	I, II, III, IV	3.320	0.975	無	カクモ層厚く、地山土未検出	
39	5.1	2.0	10.2	I, II, III	-	0.915	無	カクモ層厚く、地山土未検出	
40	5.2	2.0	10.4	Ia, Ib, II, III	-	0.960	無	カクモ層厚く、地山土未検出	
合計			359.8						

第2表 高田北部地区第1次試掘調査 トレンチ一覧表

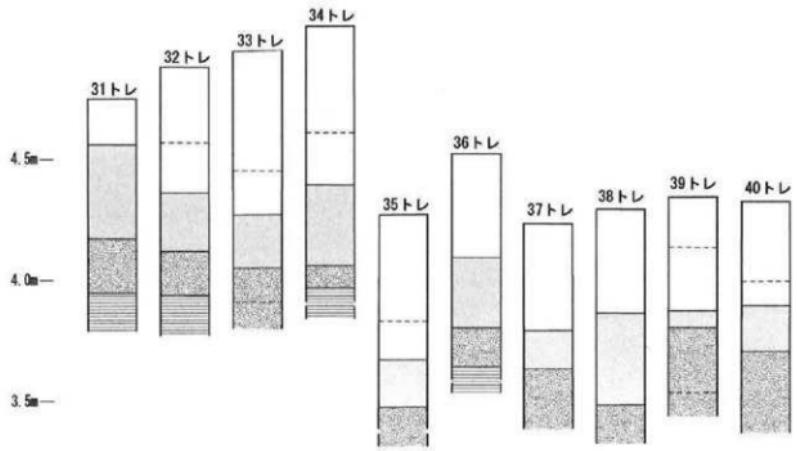
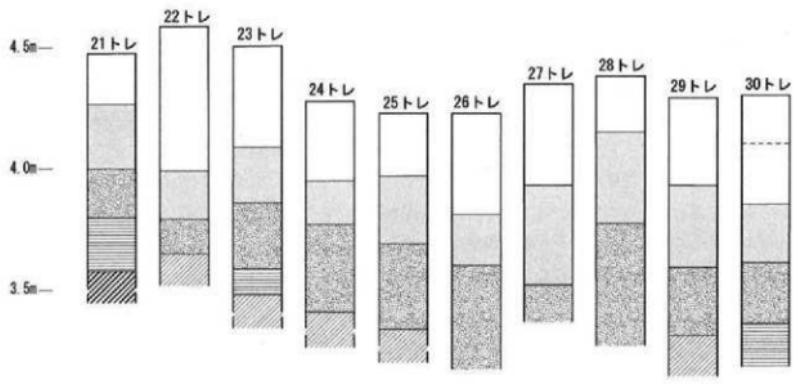
することはできなかった。また、20トレンチは腐植土内に木片が多く含まれ、倒木も埋没していた。このため、付近はかつて湿地林の広がりがあったものと考えられる。11か所のトレンチからは遺構・遺物は検出されていない。

4月19日 一日中晴れ間が続き、順調に作業を進めることができた。

21～31トレンチを設定し、計11か所に試掘トレンチを発掘した。調査対象区の中央からやや東寄りにかけて調査を行った。21～25トレンチでは地山土が検出されており地山土上面で遺構確認を行ったが、遺構や落ち込みは検出されなかった。それ以外のトレンチでは腐植土層が厚く堆積しており、確認面を検出することはできなかった。29～31トレンチでは腐植土と地山土の漸移層(第IV層)がみられたため、



第5図 高田北部第1次試掘調査 基本層序柱状模式図① (S = 1 : 20)



第6図 高田北部第1次試掘調査 基本層序柱状模式図② (S = 1 : 20)

あと數十センチで地山土に達すると推定されるものであった。発掘した11か所の調査トレンチからは、遺構や遺物は確認されていない。

**4月20日** 一日中曇り空が続いたが、気温が上がり暖かい日となった。

調査対象区の東側の調査を行った。32～40トレンチの計9つのトレンチを設定し試掘調査を行った。32～34トレンチは現軽井川の上流側に位置し、調査区内で標高が高い地点となる。土層堆積状況はこれまで発掘した他のトレンチと同様の状況であった。35～40トレンチは調査対象区の南東部に位置し、中位段丘に近い地点となる。深度約50cm以下から腐植土が深く堆積しており、中位段丘を侵食して形成された沖積地の堆積状況を示すものであった。また、腐植土層には木片と木材が多く含まれ、周囲が湿地林であったと考えられる。何れのトレンチも概ね深度1.0m近くまで掘削したが、遺構確認面が検出されたトレンチはなく、遺構・遺物は確認されていない。

### 3) 層序の概要

第1次試掘調査で検出された土層は概ね5層に分類している。

第I層は表土となり、水田耕作に係る土層である。色調から2層（第Ia層、第Ib層）に細分可能な地点もあった。耕作土となる第Ia層は灰色～灰褐色粘質土であり、耕作により攪拌を受けている。第Ib層は暗灰色粘土であり、水田の床土に相当する。第II層は暗灰褐色粘土であり、細かい炭化物を含み暗色を呈する。色調がまだら模様となり盛土・整地層と考えられる。小礫を含む地点もみられた。第11トレンチでは下部が暗青灰色を呈するシルトであった。第III層は黒褐色を呈する腐植土層である。概して堆積が厚く、腐植物の混入度合や色調の違いのある層が幾層か観察された。繰りに乏しく湧水がみられることから細分は行わなかった。いわゆるカクモ層に相当し、軟質の木片や木材を含む。埋没林のように倒木がみられる地点もあった。第IV層は暗青灰色粘土であり、地山土と第III層の漸移層となる粘土層である。第V層は青灰色粘土層となり、炭化物等の混入物を含まない土層である。明るい色調で粘性・締まりは強い。本層は当該地周辺の地山土と判断され、上面で遺構確認を実施している。

## 3 調査のまとめ

今回実施した第1次試掘調査は、県営は場整備となる原因事業の第2工区を調査対象区域としたものである。調査の結果は、調査対象区域内から遺跡の存在は確認されなかった。調査区内の地下の状況は、広域に腐植土層が厚く堆積しており、水田が造成される以前は、長期間にわたり湿地であった状況を示すものであった。腐植土層内からは倒木も発見されており、小河川・軽井川周辺に湿地林が広がっていた古環境がうかがえる。このような状況から、調査地点となる狭い沖積地内は、遺跡の立地が困難な環境であったとらえられる。また、沖積地の大半を試掘したにも関わらず、調査区内からは軽井川の旧河道路は確認されていないため、概ね現在の位置を保っていたものと理解される。

調査地点に隣接する藤橋地区の南東側の中位段丘では、新潟工科大学建設に伴い藤橋東遺跡群が発見されている。また、さらに東側には柏崎フロンティアパーク造成に伴い軽井川南遺跡群が位置する。これらの遺跡群の主体となる古代製鉄遺跡は官営製鉄に関わるものと推定されるが、その周囲に製鉄を管理する施設となる建物群等は未だ発見されていない。今後、段丘の縁辺部や周辺の沖積地において、古代製鉄の運営に関わる遺跡等の新発見が期待される。

### III 内郷地区（第2次）

－中山間地域総合整備事業 西山内郷地区に係る確認調査－

#### 1 調査に至る経緯

西山内郷地区は柏崎市の北部、別山川上流域の地域名称である。別山川の両岸には曾地丘陵と西山丘陵が南南西から北北西に併走し、その間の狭い谷底平野では様々な地形的制約を受けながら水田が営まれている。このような制約を解消して効率的な農業経営を行うことを目的に、中山間地域総合整備事業西山内郷地区が計画された。事業主体者は新潟県（担当：柏崎地域振興局農業振興部農村整備課）である。

当該事業に伴う事業主体者との協議は平成21年度から行った。事業予定地内では周知の埋蔵文化財包蔵地は確認されていなかったが、事業を円滑に遂行するために事前に試掘調査を実施することとなった。第1次試掘調査は、平成23年度に工事を実施する範囲を対象に、平成22年10月から11月にかけて行い、甲戸遺跡・清水田遺跡・伊毛大新田遺跡を発見した〔柏崎市教委2012a〕。

今回報告する第2次調査は、第1次調査で発見した伊毛大新田遺跡の西側にあたり、平成24年度の施工区域の約24,000m<sup>2</sup>を対象として行った。平成24年4月17日付け教総第512号で、新潟県教委教育長へ文化財保護法第99条第1項の規定による埋蔵文化財発掘調査の報告を行い、4月24日から調査に着手した。

#### 2 調査の概要

##### 1) 調査区の概要

今回の調査対象地は柏崎市西山町伊毛字前田地内である。別山川上流域の右岸側に位置し、西山丘陵から伸びる尾根に挟まれた幅100mほどの狭い谷地の中ほどである。調査対象地の約50m東側までが伊毛大新田遺跡の範囲となっている。伊毛は「イモ」と読み、「鉄物師」に通じるとされ、製鉄に関連した地名であるとの意見があるが〔植木1997〕、現在のところ製鉄関連遺跡は発見されていない。しかし、別山川中流域から上流域では、中世前期に営まれた製鉄関連遺跡が点在しているため、未周知の製鉄遺跡が存在することも想定される。

##### 2) 調査の方法

試掘トレチの位置は、水田の現状と周辺の地形などを考慮しながら設定した。調査は法面バケットを装着したバックホーを用い、土質の変化や遺物の出土状況に注意しながら掘り下げた。基底部となる青灰色粘土層を確認することを目的とした。しかし、当地域では「カクモ」と呼ばれる泥炭層が厚く堆積する下位で遺跡が発見されることなく、同様の状況は第1次調査でも確認していた。このため、泥炭層の完掘は基本的に行わないこととした。掘削終了後は、土層の堆積状況と完掘状況の記録を作成したのちに、掘削土により埋め戻しを行った。トレチ名はTP1から番号を付した。

### 3) 基本層序

調査で確認された層序を大きく6層に分類した。第Ⅰ層は水田耕作土などで、表土と床土をまとめ第Ⅰa層、水田をかさ上げした際の盛土を第Ⅰb層とした。第Ⅱ層は明灰色粘土層、第Ⅲ層は灰色粘土層、第Ⅳ層は暗灰色粘土層で、これらは自然堆積層である。第Ⅴ層は、酸化した鉄分を多く含み、縞状に褐色が混じっている。これら3層には炭化物が少量含まれる。第Ⅵ層は暗褐色を呈する泥炭層である。水分を多く含み、しまりが弱いものである。湿地帯の痕跡とみられるものである。第Ⅶ層は青灰色粘土層で、遺構検出面に相当する地山層である。

### 4) 調査の結果

当調査では15か所にトレンチを設定した。トレンチは幅1.6m、長さ3mを基本としたため、総調査面積は72m<sup>2</sup>であり、調査対象面積の0.3%に相当する。調査対象地は南北を丘陵尾根に挟まれた狭い谷底平野で、丘陵裾付近と平地中心部の状況を確認することを目的にトレンチの位置を設定した。

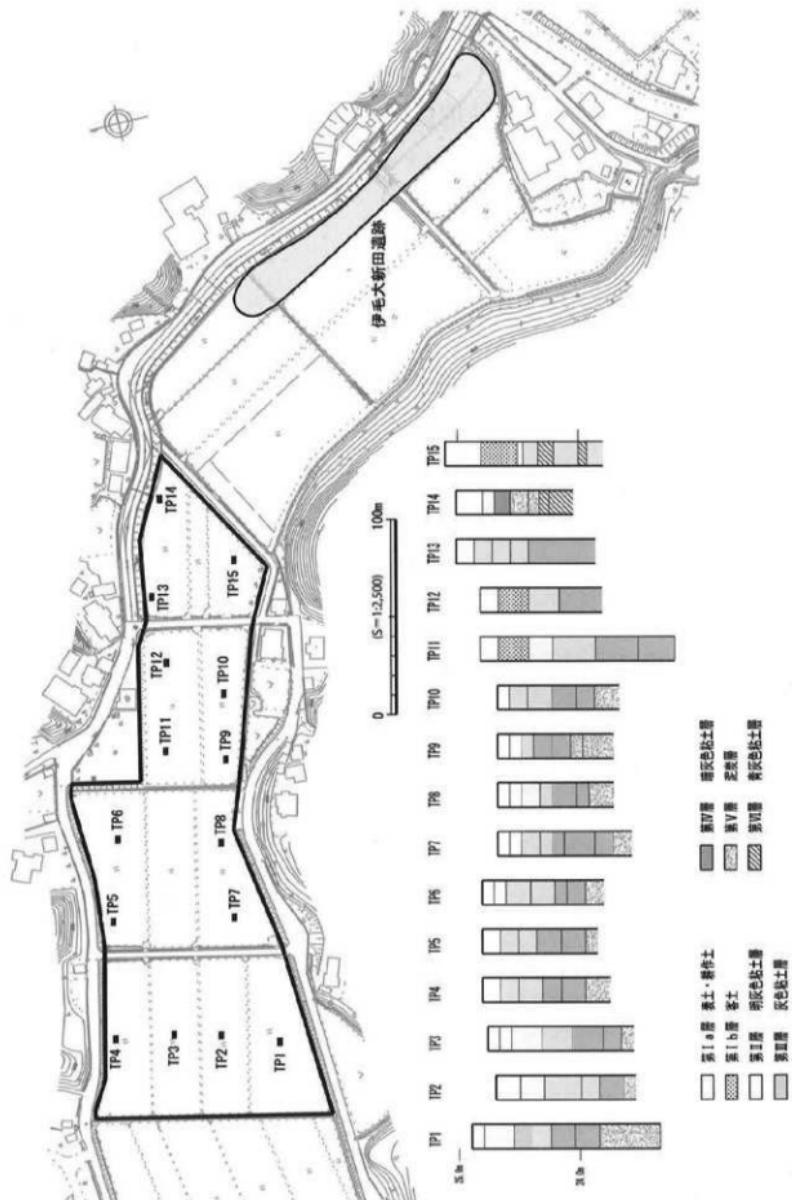
調査の結果としては、いずれのトレンチでも遺構・遺物は検出されなかった。TP1～TP10では、標高23.8m前後で泥炭層が検出され、堆積が厚いものと判断したため、完掘は行わなかった。TP11では地表面から1.6m掘り下げたが、第V層・第VI層とともに検出できなかつたため、掘削を終了した。TP12・TP13でも同様の状況であったため、深掘りは行わなかった。TP14・TP15では、標高24.3m前後で第VI層を検出した。伊毛大新田遺跡へ向かって地山層が上がっていくことが想定された。

## 3まとめ

今回の試掘調査は、平成24年度には場整備が行われる範囲を対象に行った。第1次調査では伊毛大新田遺跡が発見され、さらに製鉄関連遺跡の存在も想定された。このため、対象地全域にトレンチを設定して調査を行ったが、遺構・遺物とともに検出されなかつた。今回の調査対象地の大部分は湿地性の高い谷地で、北側の尾根裾がせり出した微高地に伊毛大新田遺跡が存在したのであろう。



第7図 内郷地区第2次試掘調査の範囲と周辺の地形・遺跡



第8図 内郷地区第2次試掘調査 レンチ配図・基本層序柱状模式図

## IV 別俣地区（第3・4次）

- 中山間地域総合整備事業 別俣地区に係る試掘調査 -

### 1 調査に至る経緯

柏崎市別俣地区は、市街地から南東へ約10kmの位置にある。鶴川の中流域で合流する上条芋川とその支流が形成した盆地状の地形にあり、「別俣郷」と称されている地域である。同地区では、新潟県柏崎地域振興局（担当：農業振興部 農村整備課）を事業主体とする中山間地域総合整備事業 別俣地区（以下、「原因事業」とする）が進められており、ほ場整備や排水路改修が実施されている。

**これまでの調査** 平成22年9月10日付け柏振農第0529号で事業主体者から埋蔵文化財の調査が依頼されており、具体的な協議が進められてきた。その結果、盆地北東部にある久米地区的水田を対象とするほ場整備の施工区域（約10ha）については、試掘調査を実施することとなった。本格的な工事の前に、低地部分（A～C地区）に盛土工が実施されるが、これを対象とする第1次試掘調査を平成22年度に実施した〔柏崎市教委2012 a〕。これ以外の区域の取扱いは保留となっていたが、一部（D地区）で工事が進められることとなった。同年11月10日、事業主体者からこの件について連絡があり、急きょ翌11日に試掘調査（第1次試掘調査の補足）を行うこととなった（調査結果は後述）。そして、ほ場整備第1次工事区域（E・F地区）については、平成23年度に第2次試掘調査を実施した〔柏崎市教委2013 c〕。

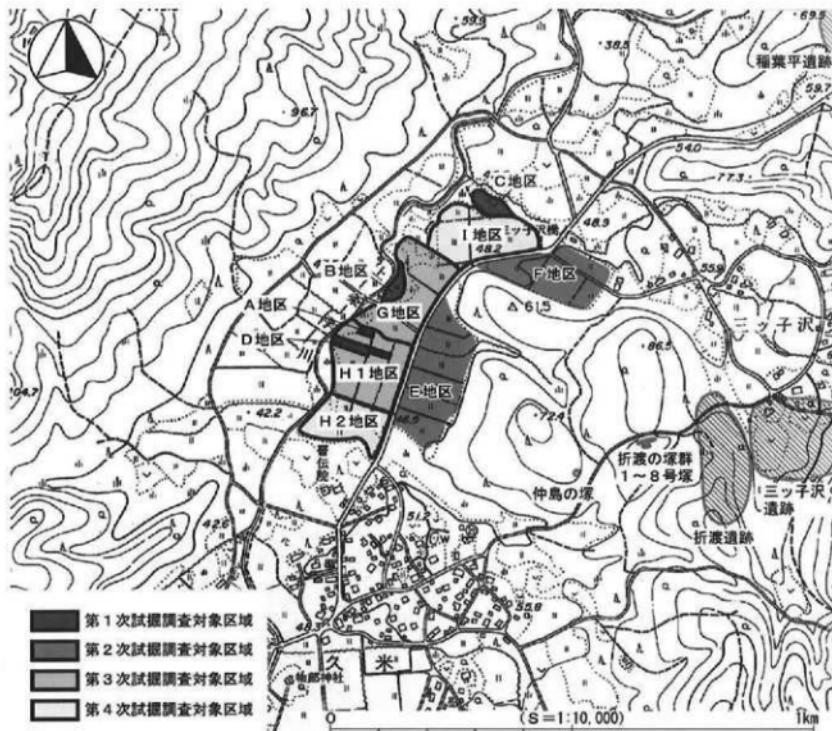
結果的に、補足も含め、第1・2次試掘調査では遺跡の痕跡は確認されなかった。しかし、原因事業の対象区域には、これ以外にも平坦地の広がりがみられるので、遺跡が存在する可能性については明確に否定することができなかった。したがって、引き続き試掘調査は必要と考えられた。

**第3次試掘調査に至る経緯** ほ場整備第2次工事区域（G・H1地区）は、35,140m<sup>2</sup>が対象となる。平成24年4月3日に事業主体者から説明があった。前年度予算の繰越により、工事はすでに発注されており、雪消え後の5月に第3次試掘調査を実施することとなった。

市教委は、平成24年5月7日付け教総第521号で県教委へ文化財保護法第99条の規定による埋蔵文化財発掘調査の報告を行い、同月9日に実施した。調査の結果については、同月11日付け教総第521号の2で県教委へ、同日付け教総第529号で事業主体者へ報告した。

**第4次試掘調査に至る経緯** ほ場整備の最終となる第3次工事区域（H2・I地区）は、26,650m<sup>2</sup>が対象となる。第3次試掘調査の段階において、工事の時期は未定であった。しかし、同年7月20日に事業主体者から説明があり、工事が認可されたので、年度内に第4次試掘調査を実施することについての依頼がなされた。平成24年度10～11月は、別件の試掘調査等も多く依頼されているため、市教委ではスケジュール調整等が必要であったが、何とか対応することとした。同年11月5日、工事が具体化したことから、市教委は事業主体者から改めて説明を受けた。

市教委は、平成24年11月21日付け教総第614号で県教委へ文化財保護法第99条の規定による埋蔵文化財発掘調査の報告を行い、同月28日に実施した。調査の結果については、12月4日付け教総第614号の2で県教委へ、同日付け教総第529号の2で事業主体者へ報告した。



第9図 別俣地区試掘調査 位置図

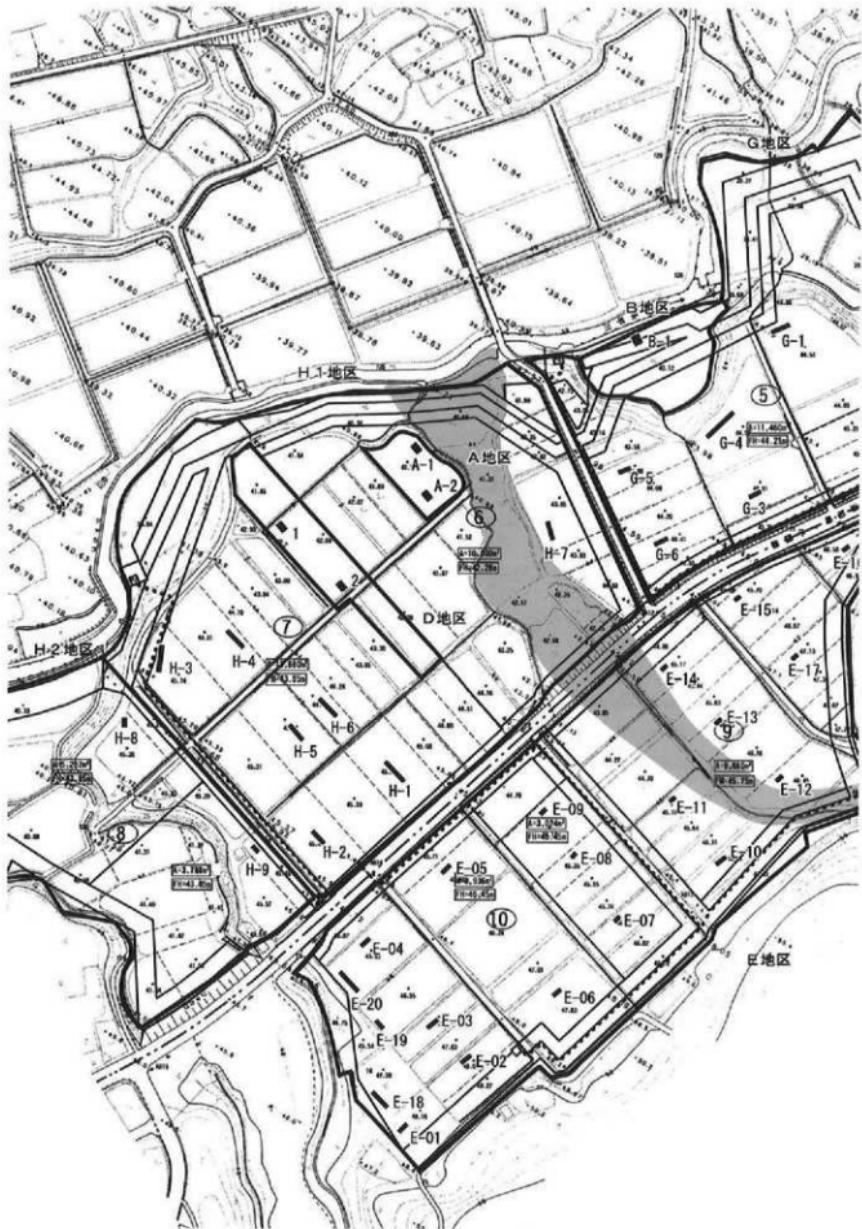
## 2 調査の概要

### 1) 調査の目的と方法

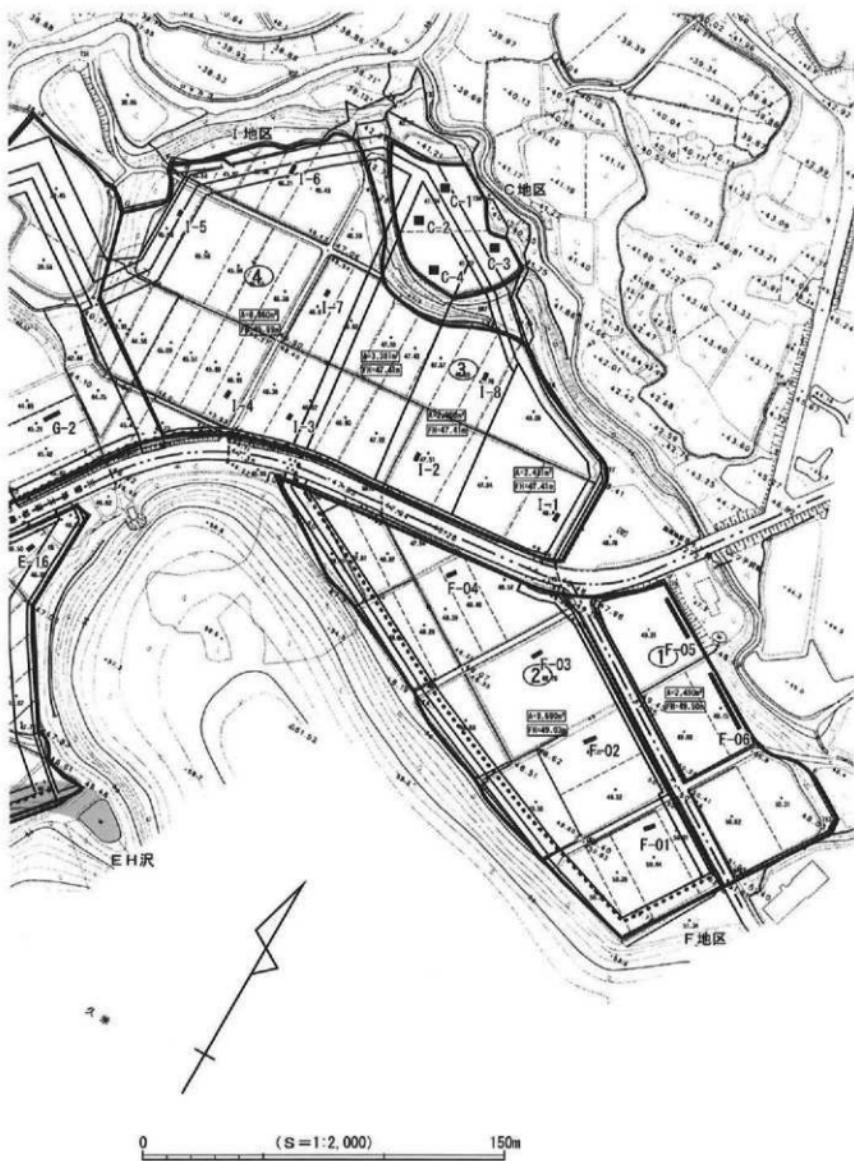
第3次試掘調査では場整備第2次工事区域、第4次試掘調査では場整備第3次工事区域における埋蔵文化財包蔵地の有無を確認することがおもな目的である。平成24年5月2日、周辺も含めた現地確認を行った。盛土から土師器小片や陶磁器片（図版12 q・r・ア～オ）が採集されたが、それ以外にはなく、遺物の分布状況等は明確ではなかった。

第3次試掘調査の対象区域は、面積35,140m<sup>2</sup>である。区域の名称については、第1・2次調査【柏崎市教委2012a・同2013c】からの継続で、G地区・H地区と仮称する。ただし、H地区的うち、第3次試掘調査の対象となる区域をH1地区とした。南西側は平坦面が連続するが、第4次試掘調査の対象となる区域であるため、これをH2地区とした。G地区的面積は11,460m<sup>2</sup>、H1地区は23,680m<sup>2</sup>である。

第4次試掘調査の対象区域は、第3次試掘調査対象区域の北東側と南西側で、面積は26,650m<sup>2</sup>である。



第10図 別俣地区



区域の名称については、北東側を I 地区、南西側を H 2 地区とする。I 地区の面積は 17,580m<sup>2</sup>、H 2 地区は 9,070m<sup>2</sup>である。

試掘坑は任意の位置に設定し、重機（バックホー 0.2m 級 法バケット）で発掘していった。名称は、地区名と算用数字を用いて「G - 1 試掘坑」と呼称することとした。発掘した試掘坑は、原則として記録作業後すぐに埋め戻した。ただし、第 3 次試掘調査では工事による表土の計測にも利用するとのことであったため、調査後の埋め戻しは行わず、そのまま工事側で管理してもらうこととなった。

調査対象区域は、上条芋川の右岸に形成された段丘面にある。東側の E 地区から H 地区へ続く沢（以下、「E H 沢」と仮称する）が、上条芋川へ合流するように H 地区の北東部をおおむね北西へ向って流れているため、調査対象区域は H 地区で 2か所に分断されている。これらのことから、今回はそれぞれ舌状に張り出した段丘に展開した集落跡などを想定し、調査を行うこととした。具体的には、平坦面内部における遺構・遺物を確認するほか、縄文集落では沢や段丘崖の斜面付近に土器捨場や住居跡が設けられる例があるため、その可能性を考慮して斜面付近にも試掘坑を設定した。なお、現況は階段状の水田となっている。同じ水田でも階段の上方側は造成の際に削平を受けている可能性があるため、試掘坑は下方側に設定することとした。

## 2) 第3次調査の概要

調査は、平成 24 年 5 月 9 日の 1 日間で実施した。調査員は担当を含む 3 名である。当日は曇天で、風がやや冷たかった。発掘した試掘坑は、G 地区 6 か所 (84.7m<sup>2</sup>) + H 1 地区 7 か所 (116.6m<sup>2</sup>) = 合計 13 か所 (201.3m<sup>2</sup>) である。調査対象区域 (35,140m<sup>2</sup>) に占める発掘面積は、G 地区 (11,460m<sup>2</sup>) が約 0.7%、H 1 地区 (23,680m<sup>2</sup>) が約 0.5%、全体で約 0.6% となる。

**G - 1 試掘坑** G 地区北端の段丘崖付近に設定した。耕作土層（第 I 層）を除去すると、灰褐色土層となつたが、数 cm 大の黄色土ブロックが多く混じっていたので、盛土層（第 II 層）と判断された。さらに掘り下げるに従い、深度 0.2 ~ 0.3 m で灰色土層となつた。この層以下が自然堆積土層（第 IV 層）とみられる。深度 0.4 m 付近で黄白色粘土層となつたが、これが地山土層（第 VI a 層）と考えられる。遺構・遺物は確認されていない。

**G - 2 試掘坑** 東側（丘陵側）へ移動した。耕作土や床土（第 I 層）を除去すると、深度約 0.2 m で地山土層（第 VI a 層）となつた。遺構・遺物は確認されていない。

**G - 3 試掘坑** 南側へ移動した。耕作土層（第 I 層）・盛土層（第 II 層）を除去すると、0.2 ~ 0.3 m で地山土層（第 VI a 層）となつた。試掘坑の南端において、土坑状の落ち込みがみられた。しかし、盛土層直下からの掘り込みであり、覆土には締まりがなく、地山土ブロックを多く含んでいたため、過去の区画整理前までに機能していた近代以降の遺構と考えられた。これ以外には、遺構・遺物は確認されていない。

**G - 4 試掘坑** 西側の段丘崖付近に移動した。耕作土や床土（第 I 層）を除去すると、深度約 0.2 m で暗灰色土層となつた。径 2 ~ 3 mm の炭化粒が若干混じっている。この層以下は自然堆積土層（第 IV 層）と考えられる。深度 0.6 ~ 0.7 m で地山土層（第 VI a 層）となつた。遺構・遺物は確認されていない。

**G - 5 試掘坑** 南側へ移動し、同じく斜面付近に設定した。耕作土層（第 I 层）・盛土層（第 II 層）を除去すると、深度 0.2 ~ 0.3 m で地山土層（第 VI a 層）となつた。遺構や遺物は確認されていない。

**G - 6 試掘坑** 東側（丘陵側）へ移動した。耕作土層（第 I 層）・盛土層（第 II 層）を除去すると、深度 0.2 ~ 0.3 m で自然堆積土層（第 IV 層）、深度約 0.4 m で地山土層（第 VI a 層）となつた。試掘坑の南半に

おいて、およそ南北方向に走る平行した2条の溝状を呈した落ち込みがみられた。しかし、2条とも盛土層（第II層）直下からの掘り込みで、覆土には綺まりがなく、地山土ブロックを含んでいたため、過去の区画整理前に機能していた近代以降の遺構と考えられた。これ以外に遺構や遺物は確認されていない。

**H-7 試掘坑** 次にH地区に移動し、E H沢の北側斜面付近に設定した。耕作土層（第I層）・盛土層（第II層）を除去すると、深度約0.2mで地山土層（第VIa層）となった。地山土層は、これまでとやや異なり、シルト質を帯びていた。遺構や遺物は確認されていない。

**H-1 試掘坑** E H沢を横断してH地区の中央付近へ移動した。耕作土層（第I層）・盛土層（第II層）を除去すると、深度約0.2mで地山土層（第VIa層）となった。遺構や遺物は確認されていない。

**H-2 試掘坑** 南側へ移動し、H地区南東部に設定した。同じく耕作土・床土（第I層）を除去すると、深度0.1~0.2mで地山土層（第VIa層）となった。遺構や遺物は確認されていない。

**H-3 試掘坑** 西側の段丘崖付近に移動した。耕作土層（第I層）を除去すると、深度約0.1mで褐色の自然堆積土層（第IV層）となり、深度約0.2mで地山土層（第VIa層）となった。遺構・遺物は確認されていない。

**H-4 試掘坑** 北東側に移動し、E H沢の南側斜面付近に設定した。

実測式	幅 (m)	延長 (m)	面積 (m <sup>2</sup> )	土 壤	備考
第3次試掘調査					
G-1	1.7	8.8	15.0	I 地山土層 II 黒褐色粘質土層 III 黄褐色粘質土層 IV 黄褐色シルト質粘土層 V 黄褐色土層 VIa 黄褐色粘土層	
G-2	1.7	7.8	13.3	I 黄褐色粘質土層 II 黑褐色粘質土層 III 黄褐色粘質土層 IV 黄褐色粘質土層 V 黄褐色粘土層 VIa 黄褐色粘土層	
G-3	1.7	8.7	9.7	I 黄褐色粘質土層 II 黄褐色粘質土層 III 黄褐色粘質土層 IV 黄褐色粘質土層 V 黄褐色粘土層 VIa 黄褐色粘土層	上部状の落ち込み 馬(近代以降)
G-4	1.7	15.0	26.4	I 黄褐色粘質土層 II 黄褐色粘質土層 III 黄褐色粘質土層 IV 黄褐色粘質土層 V 黄褐色粘土層 VIa 黄褐色粘土層	
G-5	1.7	9.8	9.9	I 地山土層 II 黑褐色粘質土層 III 黄褐色粘質土層 IV 黄褐色粘質土層 V 黄褐色粘土層 VIa 黄褐色粘土層	
G-6	1.7	6.2	10.5	I 黄褐色粘質土層 II 黄褐色粘質土層 III 黄褐色粘質土層 IV 黄褐色粘質土層 V 黄褐色粘土層 VIa 黄褐色粘土層	遺状の落ち込み 馬(近代以降)
H-1	1.7	11.5	19.0	I 黄褐色粘質土層 II 黄褐色粘質土層 III 黄褐色粘質土層 IV 黄褐色粘質土層 V 黄褐色粘土層 VIa 黄褐色粘土層	
H-2	1.7	8.0	13.0	I 黄褐色粘質土層 II 黄褐色粘質土層 III 黄褐色粘質土層 IV 黄褐色粘質土層 V 黄褐色粘土層 VIa 黄褐色粘土層	
H-3	1.7	11.4	19.4	I 黄褐色粘質土層 II 黄褐色粘質土層 III 黄褐色粘質土層 IV 黄褐色粘質土層 V 黄褐色粘土層 VIa 黄褐色粘土層	
H-4	1.7	9.9	16.8	I 黄褐色粘質土層 II 黄褐色粘質土層 III 黄褐色粘質土層 IV 黄褐色粘質土層 V 黄褐色粘土層 VIa 黄褐色粘土層	
H-5	1.7	9.3	15.0	I 黄褐色粘質土層 II 黄褐色粘質土層 III 黄褐色粘質土層 IV 黄褐色粘質土層 V 黄褐色粘土層 VIa 黄褐色粘土層	
H-6	1.7	10.3	17.3	I 黄褐色粘質土層 II 黄褐色粘質土層 III 黄褐色粘質土層 IV 黄褐色粘質土層 V 黄褐色粘土層 VIa 黄褐色粘土層	
H-7	1.7	8.5	14.1	I 黄褐色粘土層 II 黄褐色粘土層 III 黄褐色粘土層 VIa 黄褐色粘土層	
合計			201.3		
第4次試掘調査					
I-1	1.6	3.6	5.8	I 黄褐色粘質土層 II 黄褐色粘質土層 III 黄褐色粘土層 VIa 黄褐色粘土層	第II層から遺構 馬(近代以降)
I-2	1.6	3.0	6.2	I 黄褐色粘質土層 II 黄褐色粘土層 III 黄褐色粘土層 VIa 黄褐色粘土層	
I-3	1.6	3.4	5.4	I 黄褐色粘質土層 II 黄褐色粘土層 VIa 黄褐色粘土層 VIb 黄褐色粘土層 VIc 黄褐色粘土層	
I-4	1.6	3.0	5.1	I 黄褐色粘質土層 II 黄褐色粘土層 III 黄褐色粘土層 VIa 黄褐色粘土層 VIb 黄褐色粘土層 VIc 黄褐色粘土層 VIc-h 黄褐色粘土層 VIc-h 黄褐色粘土層	
I-5	1.6	3.3	5.3	I 黄褐色粘質土層 II 黄褐色粘土層 VIa 黄褐色粘土層 VIb 黄褐色粘土層 VIc 黄褐色粘土層 VIc-h 黄褐色粘土層	
I-6	1.6	4.0	7.7	I 黄褐色粘質土層 II 黄褐色粘土層 VIa 黄褐色粘土層 VIb 黄褐色粘土層 VIc 黄褐色粘土層 VIc-h 黄褐色粘土層	
I-7	1.6	3.3	5.3	I 黄褐色粘質土層 II 黄褐色粘土層 VIa 黄褐色粘土層 VIb 黄褐色粘土層 VIc 黄褐色粘土層 VIc-h 黄褐色粘土層 VIc-h 黄褐色粘土層	
I-8	1.6	3.0	6.2	I 黄褐色粘質土層 II 黄褐色粘土層 VIa 黄褐色粘土層 VIb 黄褐色粘土層 VIc 黄褐色粘土層 VIc-h 黄褐色粘土層	
I-9	1.8	4.5	7.7	I 黄褐色粘質土層 II 黄褐色粘土層 VIa 黄褐色粘土層 VIb 黄褐色粘土層 VIc 黄褐色粘土層 VIc-h 黄褐色粘土層	
I-10	1.8	4.2	7.6	I 黄褐色粘質土層 II 黄褐色粘土層 VIa 黄褐色粘土層 VIb 黄褐色粘土層 VIc 黄褐色粘土層 VIc-h 黄褐色粘土層	
合計			62.3		
第1次試掘調査の結果					
D-1	1.7	3.4	5.8	I 黄褐色粘質土層 II 黄褐色粘土層 III 黄褐色シルト質粘土層 IV 黄褐色土層 VIa 黄褐色粘土層	
D-2	1.7	2.6	4.4	I 黄褐色粘質土層 II 黄褐色粘土層 III 黄褐色粘土層 VIa 黄褐色粘土層 VIb 黄褐色粘土層	
合計			10.2		
総合計			273.8		

第3表 別保地区第3・4次試掘調査 試掘坑一覧表

耕作土層（第I層）・盛土層（第II層）を除去すると、深度0.3～0.4mで褐色の自然堆積土層（第IV層）となった。これは以前の耕作土層と思われる。さらに掘り下げていくと、深度0.4～0.5mで地山土層（第VIa層）となった。遺構・遺物は確認されていない。

**H-5 試掘坑** 東側（丘陵側）へ移動した。耕作土層（第I層）・盛土層（第II層）を除去すると、深度0.2～0.3mで褐色シルト層となつた。これは自然堆積土層（第IV層）である。さらに深度約0.4mで地山土層（第VIa層）となった。地山土層はシルト質を帯びている。遺構・遺物は確認されていない。

**H-6 試掘坑** 最後にやや北側へ移動し、E H沢の南側斜面付近に設定した。耕作土層等（第I層）・盛土層（第II層）を除去すると、深度0.3～0.4mで粘性の強い黄褐色粘土層となつた。これは地山土層（第VIa層）であるが、付近の試掘坑ではみられなかった土層である。確認のために掘り下げると、深度0.4～0.5mで黄白色シルト層となつた。これは他の試掘坑の地山土層（第VIa層）に類似する。遺構・遺物は確認されていない。

### 3) 第4次調査の概要

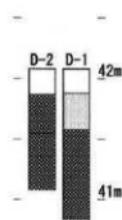
調査は、平成24年11月28日の1日間で実施した。調査員は担当を含む3名である。当日は曇天であったが、一時は晴天となった。発掘した試掘坑は、I地区8か所(47.0mf) + H2地区2か所(15.3mf) = 合計10か所(62.3mf)である。調査対象区域(26,650mf)に占める発掘面積は、I地区(17,580mf)が約0.3%、H2地区(9,070mf)が約0.2%、全体で約0.2%となる。

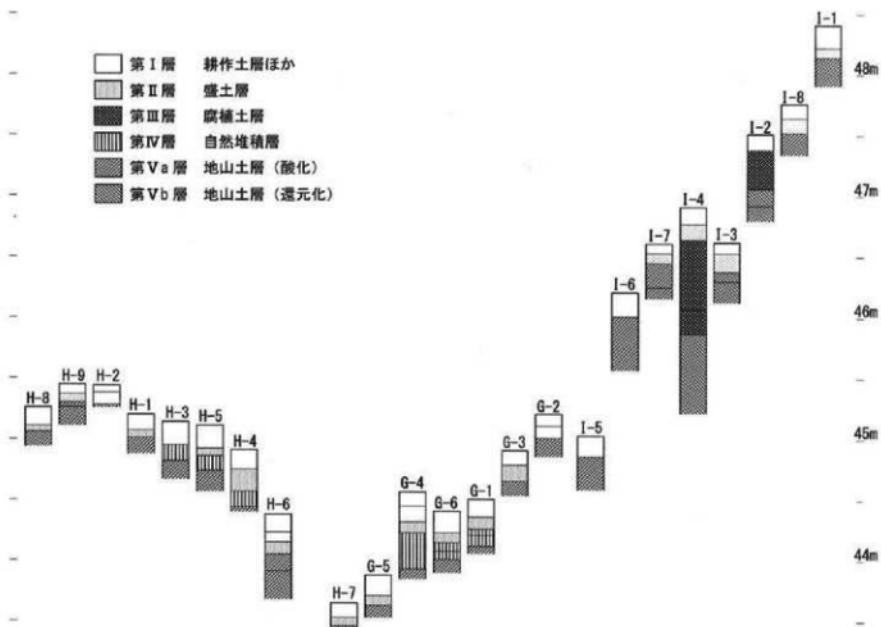
**I-1 試掘坑** I地区的原地形はE H沢へ傾斜する緩斜面が想定されるが、高所側である北東端付近に設定した。耕作土層（第I層）を除去すると、褐色粘土層となつたが、これは盛土層（第II層）と判断された。さらに掘り下げると、深度0.3m付近で黄褐色粘土層となつたが、これが地山土層（第VIa層）と考えられる。第II層から近世磁器片（図版12 q・r-カ）が出土しているが、その他に遺構・遺物は確認されていない。なお、試掘坑の周辺でも近世磁器小片（図版12 q・r-キ）が表面採集された。

**I-2 試掘坑** 水田の列に沿って南西側（斜面下方側）へ移動した。耕作土（第I層）を除去すると、深度約0.1mで腐植土層（第III層）となつた。これを掘り下げると、深度0.4～0.5mで青灰色粘土層（第VIb層）となつた。遺構・遺物は確認されていない。

**I-3 試掘坑** 引き続き南西側へ移動した。耕作土層（第I層）を除去すると、深度0.2m付近で酸化した地山土層（第VIa層）となつた。深度0.3m付近では還元化した地山土層（第VIb層）となつた。遺構や遺物は確認されていない。

**I-4 試掘坑** さらに南西側に移動したが、南側の尾根に近いこともあり、I-3試掘坑付近よりも若干高地となっている。しかし、耕作土や床土（第I層）を除去すると、深度約0.2～0.3mで腐植土層（第III層）となつた。腐植土層は厚く、深度1.0～1.1mまで続いていた。その下位は還元化した地山土層（第VIb層）となっていた。遺構・遺物は確認されていない。





第11図 別保地区第3・4次試掘調査 基本層序柱状模式図

**I-5 試掘坑** 次は北西側へ移動し、I地区平坦面（緩斜面）の西端に設定した。耕作土層（第I層）を除去すると、深度0.1～0.2mで地山土層（第VIa層）となった。遺構や遺物は確認されていない。

**I-6 試掘坑** 北東側へ移動し、I地区北西部に設定した。I-5試掘坑と同様に、耕作土層（第I層）を除去すると、深度0.2m付近で地山土層（第VIa層）となった。遺構や遺物は確認されていない。

**I-7 試掘坑** 南東側の平坦面（緩斜面）中央に設定した。耕作土層（第I層）・盛土層（第II層）を除去すると、深度0.1～0.2mで地山土層（第VIa層）となった。遺構や遺物は確認されていない。

**I-8 試掘坑** 最後に北東側へ戻り、設定した。耕作土層（第I層）・盛土層（第II層）を除去すると、深度0.2m付近で地山土層（第VIa層）となった。遺構や遺物は確認されていない。

**H-8 試掘坑** 次にH-2地区へ移動し、南西部に設定した。耕作土（第I層）・盛土層（第II層）を除去すると、深度0.2m付近で地山土層（第VIa層）となった。遺構や遺物は確認されていない。

**H-9 試掘坑** 南端部に設定した。耕作土（第I層）・盛土層（第II層）を除去すると、深度0.1～0.2mで地山土層（第VIa層）となった。遺構や遺物は確認されていない。

#### 4) 第1次調査の補足の経過と試掘坑の概要

平成22年11月11日、前述のとおり、急きょ試掘調査を実施することとなった。調査員は担当を含む3名であるが、調査は半日間であったため、延べ15名となる。当日は曇天で、一時降雨もみられた。対象区域に2か所の試掘坑を発掘した。

**D-1 試掘坑** 耕作土層（第I層）・盛土層（第II層）を除去すると、深度0.5～0.6mで暗灰色シルト質粘土層となった。腐植物が多く混じる。深度0.7～0.8mになると黒灰色粘土層となった。いずれもEH沢に關係する腐植土層（第III層）と考えられる。黒灰色粘土層は、深度1.0mになっても続いている。遺構や遺物は確認されていない。

**D-2 試掘坑** 東側へ移動した。耕作土層（第I層）を除去すると、深度0.2mでD-1試掘坑と類似する腐植土層（第III層）となった。深度1.1～1.2mになると灰色粘土層となつたが、これも腐植土層（第III層）の一部とみられる。地山土層は検出されなかつた。遺構や遺物は確認されていない。

### 5) 層序の概要

層序については、土層を次のとおり第I～VI層に分類し、第VI層は第VIa層・第VIb層に細分して把握することとした。第I層：耕作土層で、他に水田の床土などを含む。第II層：盛土層で、多様な土砂で構成されるが、一括する。第III層：腐植土層で、沢の堆積土層を中心とする。第IV層：自然堆積土層で、腐植土層や地山土層などを除く。第V層：地山漸移層である。第VIa層：地山土層で、酸化色を呈する。第VIb層：地山土層で、還元色を呈する。

これは、第2次調査の分類をおおむね踏襲したものである〔柏崎市教委2013c〕。さらに、これを第1次調査の結果と対比すると、第IV層＝第1次調査の第II層、第VIa層＝第1次調査の第III層となる〔柏崎市教委2012a〕。また、第3・4次調査では、第V層は確認されなかつた。

G-1・G-4・G-6・H-3・H-4・H-5試掘坑では、地山土層（第VIa層）と盛土層（第II層）との間に自然堆積層がみられたが、他の丘陵側に設定した試掘坑では、耕作土層（第I層）・盛土層（第II層）の直下が地山土層（第VIa層）となつてゐた。過去の区画整理により、すでに削平された状態にあると考えられる。また、EH沢の内部となるD地区では厚い腐植土層（第III層）の堆積が確認された。第2次調査のE・F地区では、古環境の復元を意図して土層堆積パターンによる分類を行つたが〔柏崎市教委2013c〕、D・G～I地区でも同様の試みは可能と思われる。

### 6) 遺 物

試掘坑から出土したのは、I-1試掘坑のか（信楽焼 灯明受皿）のみで、他は表面採集による（図版12qr）。アは土師器の可能性があるが、他は近世以降の陶磁器である。

## 3 調査のまとめ

第2～4次調査では、一定の広がりを持つ段丘面を対象区域としたが、遺跡の痕跡を確認することはできなかつた。別俣盆地には「古別俣湖」が想定され、北東部にみられる段丘地形は、「古別俣湖」の水位低下に伴つて形成されたとする見解がある〔品田1992〕。これによれば、調査対象区域周辺は「段丘状地形IV」に分類され、「段丘状地形II」に立地する縄文中期後半頃の三ツ子沢遺跡が営まれていた時代には不安定な湿地もしくは「古別俣湖」の残存があつた可能性が考えられている〔品田1992〕。これまでの調査では、EH沢付近やI地区の一部で腐植土層（第IV層）といつた湿地の痕跡を示すデータを得ることができたが、「古別俣湖」に關係するものであるかは明らかではない。古環境の復元には更なる検討が必要であるが、今後もデータの蓄積に努めていきたい。

## V 藤井城跡（第5次）

- 石碑移転工事に係る確認調査 -

### 1 これまでの調査と第5次調査に至る経緯

本城跡は、市街地から東へ約4kmの上藤井地区に位置する。地形的には、鯖石川中流域の左岸といえる。1616年（元和2）から1620年（同6）まで存続した藤井藩（福垣氏 2万石）の城と城下（集落）の範囲が周知化されている。

#### これまでの調査 これまでに本城跡を対象とした発掘調査等には次のものがある。

第1・2次：平成11～14年度 市道柏崎10-9号線・10-53号線道路改良工事に係る確認調査【柏崎市教委2000】・工事立会【柏崎市教委2013c】

第3次：平成15年度 市道柏崎10-53号線改良工事に係る確認調査【柏崎市教委2004】

第4次：平成23年度 市道柏崎10-9号線道路改良舗装工事に係る確認調査・工事立会【柏崎市教委2013c】

この他にも携帯電話無線基地局建設工事や個人住宅建築工事に係る工事立会を実施している。前者の場合は対象区域が狭小であること、後者の場合は一定区域の掘削が行われても深度が盛土の範囲内であることなど、遺跡に対する影響はあまり大きくはない。そのため、これらの工事立会については、ひとまず以上の調査次数には加えないこととした。

**第5次調査に至る経緯** 今回の第5次調査を実施する原因となったのは、柏崎市立北鯖石保育園改築工事に伴う石碑移転工事（以下、「原因工事」とする）である。地元の北鯖石コミュニティ振興協議会を事業主体とする。同保育園は市の事業によって改築工事が予定されているが、敷地内には2基の石碑があるため、事前に敷地外へ移設されることになった。石碑は、「日露戦役記念碑」（明治40年、高さ3.2m、幅60cm×奥行30cm、土台幅150cm×奥行130cm）と「御大典記念碑」（大正4年、高さ3.6m、幅35cm×奥行33cm、土台幅90cm×奥行80cm）である。移設先は、藤井城本丸跡の中央部西側（奥側）とされた。移設先では、2.0m×5.0m、深度0.52mが掘削される。施工時期は、平成24年6月である。

市教委では、平成23年9月14日付け事務連絡で府内の関係部署へ土木工事等の状況調査を照会したところ、同保育園改築工事について担当課（教育委員会 子ども課）から回答があったため、原因工事を把握することとなった。担当課へは同年11月17日付け事務連絡で協議が必要であることを伝えた。平成24年5月23日、原因工事の計画が具体化したことにより、埋蔵文化財に関する協議を担当課と行った。周知の埋蔵文化財包蔵地での工事であるため、確認調査を実施することとなったが、工事の期日が迫っている状況であるため、調査着手を5月28日に設定し、早急に準備を進めていくこととなった。

事業主体者からは、同年5月24日付けで文化財保護法第93条等に基づく届出が提出されたので、市教委は同日付け教総第540号の2で県教委へこれを送付した。県教委からは、同年5月30日付け教文第272号で確認調査の実施について通知がなされた。同年5月24日付け教総第541号で同法第99条に基づく発掘調査（確認調査）の着手を報告し、予定どおり5月28日から調査に着手した。

## 2 確認調査の概要

### 1) 調査の目的と方法

今回の調査では、原因工事による遺跡への影響を確認することがおもな目的となる。施工区域である調査対象区域は本丸の一部である。本丸は、「城屋敷」と俗称される範囲と考えられている〔猪爪2000〕。その範囲は東西約100m×南北約80~90mで、北西部が周囲よりも1段高い公園となっている。公園内は奥側（西側）がさらに1段高くなっている、「報教者供養之墓」がある。今回の調査対象区域は、その南側にある。公園内はこのような2段の平坦面となっているが、調査対象区域のすぐ南側には、高さ1~1.5mほどの土壘状の高まりがみられる。本丸の奥側に位置するため、何らかの遺構が分布し、遺物が出土することが考えられた。

調査の方法としては、施工区域が幅5.0m×延長2.0m=面積10m<sup>2</sup>の範囲であるため、全域を発掘することとした。ただし、重機による進入は、現況に影響が生じる可能性があったため、発掘は人力にて行った。また、調査終了後は引き続き工事で掘削するため、事業主体者からは埋め戻しは不要とされた。

### 2) 調査の経過と概要

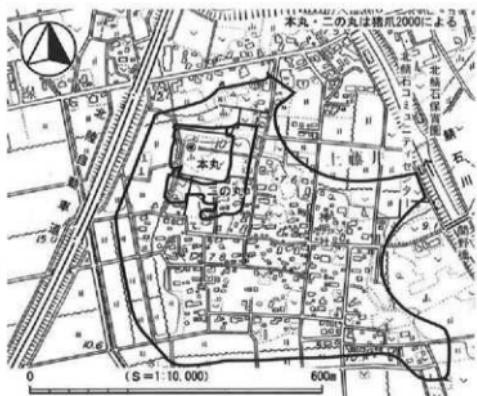
確認調査は、平成24年5月28日・29日に行った。28日は、午前の雨天が回復するのを待ち、午後から調査担当及び調査員2名（延べ15名）にて、一部を試掘的に発掘した。これにより発掘深度や土層の堆積状況がおおむね把握されたので、具体的な調査計画を検討し、翌29日に臨んだ。29日は晴天に恵まれた。担当課からの協力者2名を含む6名で調査し、午前で終了となった。したがって、全体では延べ1.0日間、人員は延べ45人で調査したことになる。

施工区域の暗褐色を呈する表土層（第Ⅰ層）を除去したところ、深度15~20cmで橙色土層（第Ⅱ層）となった。第Ⅱ層は、粘性や縮まりがあまりなく、白色の部分が斑状にみられる。一部を深掘りしたところ、深度約40cmになんでも第Ⅱ層が続いている。上面は木根によって褐色土が入り込んでいる部分が多くあるが、第Ⅱ層は地山土層と判断できた。ただし、上面にて遺構確認を行ったが、遺構は検出されなかつた。また、遺物包含層や地山漸移層なども確認できなかつた。遺物は、第Ⅰ層から土師器小片が1点出土したのみである。器種や詳細な時期は不明である。以上の状況を確認・記録し、調査を終了とした。

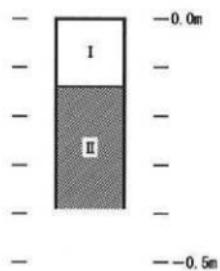
## 3 調査のまとめ

今回の調査対象区域からは遺構や遺物包含層、そして藤井城が営まれていた時期の遺物などは検出されなかつた。地山漸移層がみられなかつたことからも、調査対象区域付近の平坦面は、丘陵の削平によって造成されたと推測される。また、隣接する「報教者供養之墓」が建設された際に何らかの影響があった可能性も考えられる。

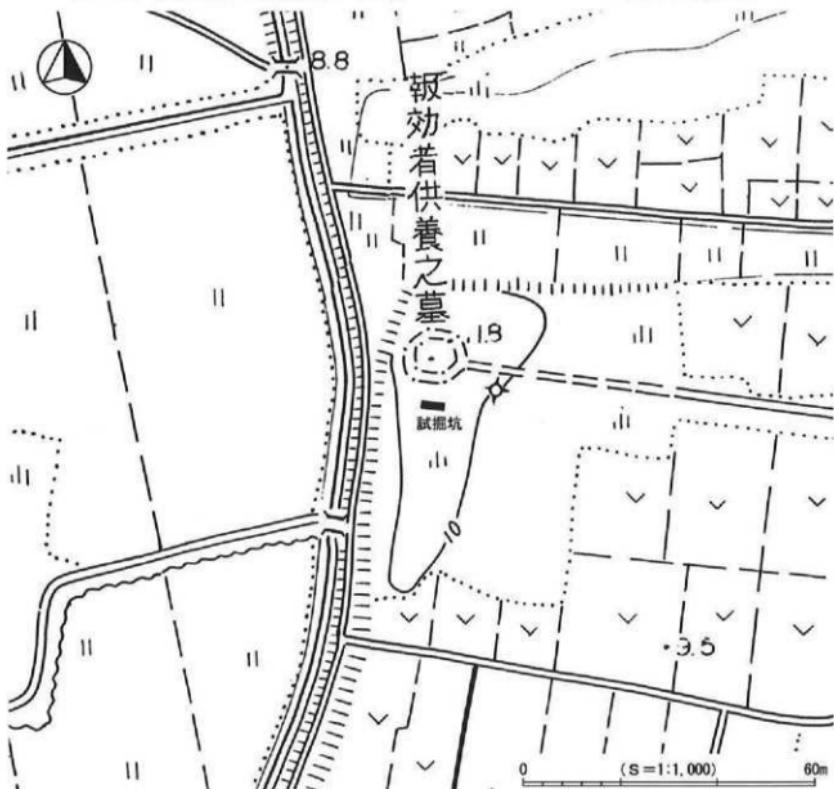
第4次調査までにおいて対象となっていたのは、本城跡でも城下の部分であった。今回の第5次調査では本丸の一部が対象となつたが、調査の規模からも城の様相に迫る資料に遭遇することはなかつた。しかし、近世初頭の短期間に営まれた藤井城は、現在でも城の痕跡を各所にのこす貴重な遺跡である。地域の歴史を物語る資料として、今後も注目していきたい。



【原図】柏崎全國その4 (1:10,000) 柏崎市 1996年  
第12図 藤井城跡第5次確認調査 位置図



第14図 藤井城跡第5次確認調査  
基本層序柱状模式図



【原図】柏崎市街図其11 (1:2,500) 柏崎市 1986年  
第13図 藤井城跡第5次確認調査 試掘坑位置図

## VI 劍・中田地区（第1・2次）

- 二級河川鯖石川改修事業に係る試掘調査 -

### 1 調査に至る経緯

柏崎市鏡・中田地区は、市街地から東へ約4kmの位置となる。下流域に含まれる鯖石川と別山川の合流点よりも700mほど上流に遡った地点となる。現在の鯖石川下流域は緩やかな蛇行を見せているが、その周辺には三日月状となる旧河道の痕跡があちこちに確認することができる。その周辺には自然堤防が形成され、古代・中世に營まれた遺跡が幾つか確認されている。

鏡地区には鯖石川付近に3遺跡が確認されている。最も下流となる別山川との合流点付近には角田遺跡が存在し、平成10年度には宅地造成工事に伴う発掘調査が実施されている。その後、平成14・15年度にも、下水道工事に伴う本発掘調査が実施されている（第2・3次）。これらの本発掘調査から、古墳時代、平安時代、中世、近世に渡って断続的に營まれた集落跡であることが明らかとなっている。上流側の右岸には創下川原遺跡が位置するが本発掘調査については過去に行われていない。ただし、平成12年度に市道改良工事（元治橋新設工事）に伴う確認調査が実施され、事業用地の一部が古代に營まれた遺跡の範囲であることが確認されている。また、平成22年度には東側隣接地で農道改良工事に伴う試掘調査が実施されているが、遺跡の広がりは確認されなかった。その対岸に位置する境川原遺跡は中世の遺跡となり、平成13年度に市道改良工事に伴う確認調査が実施されている。調査では遺跡の痕跡は確認されておらず、その結果を受けて推定範囲を縮小している。

今回実施した試掘調査は、新潟県柏崎地域振興局（地域整備部 治水・港湾課）を事業主体とする二級河川鯖石川広域河川改修事業に伴うものである。改修事業は河川の下流側から進められており、概ね元治橋から北陸自動車道の間となる約1.1kmの右岸側を対象とした拡幅工事が平成24～28年度に計画されている。事業計画範囲内には周知の遺跡は所在しないが、拡幅幅が大きいため、事前に未周知遺跡の有無を確認する必要があると判断された。また、事業用地の北端部分は平成12年度に実施した下川原遺跡を対象とした確認調査の範囲と隣接するものであった。平成23年6月20日に事業計画の概要説明を受けた後、平成24年4月27日付け柏振地第58号で事業主体者から埋蔵文化財の調査が依頼され、具体的な協議が進められていった。調査実施に先立ち、平成24年5月2日に事業計画範囲内の現地踏査を実施している。踏査では1か所の畠地から土器片が採取されており、地形的にも自然堤防と推定されることから、集落遺跡が存在する可能性が考えられた。

試掘調査の対象範囲は、ひとまず全事業計画範囲を対象とするものとした。用地買収は平成24年度も継続中であり工事も複数年要するため、試掘調査も數回に分けて実施することとなった。結果的に、平成24年度は用地買収の進行状況に合わせて2回に分けて試掘調査を実施した（第1・2次調査）。用地買収等の状況に合わせ、第1次調査は平成24年8月に、第2次調査は平成25年2月に実施している。文化財保護法に係る事務手続としては、第1次調査は平成24年8月1日付け教総第565号で、新潟県教育委員会教育長へ文化財保護法第99条の規定による埋蔵文化財発掘調査の報告を行い、同日1日間で実施した。第2次調



第15図 鶴・中田地区第1次・第2次試掘調査 対象区位置図

査は平成 25 年 2 月 5 日付け教総第 637 号で埋蔵文化財発掘調査の報告を行い、同日から 2 月 6 日にかけての 2 日間で試掘調査を実施した。

## 2 第 1 次試掘調査

### 1) 調査の目的と方法

試掘調査の目的は、河川改修事業用地内における未周知遺跡の有無を確認することである。第 1 次試掘調査対象区域は、鯖石川右岸の延長約 230 m であり、対象面積は約 4,400 m<sup>2</sup> となる。標高は 7 m 前後であり、現況は概ね畑地である。地形的には河川の氾濫源となる可能性があるが、鯖石川下流域には微高地に遺跡が分布する特徴があり、この範囲にも未周知の遺跡が発見される可能性があった。試掘調査に先立ち平成 24 年 5 月に現地踏査を実施しているが、調査対象範囲内では遺物等の散布は確認できなかった。

予め試掘坑の位置を設定し、小型のバックホー (0.15m<sup>3</sup>) を使用して発掘した。調査対象区には未買収地も残っていたため、この部分についてはひとまず調査対象から除外する必要があった。また、未買収地への重機の侵入を避ける必要もあり、事業主体者や地元住民との事前打合せを経て試掘坑の位置を決定している。限られた条件のため、試掘坑の大きさが約 2 m 四方と小規模なものも含まれる。なお、重機の進入ルートが限られるため、当初予定した順番での試掘坑の発掘とはならなかった。

### 2) 調査の経過と試掘坑の概要

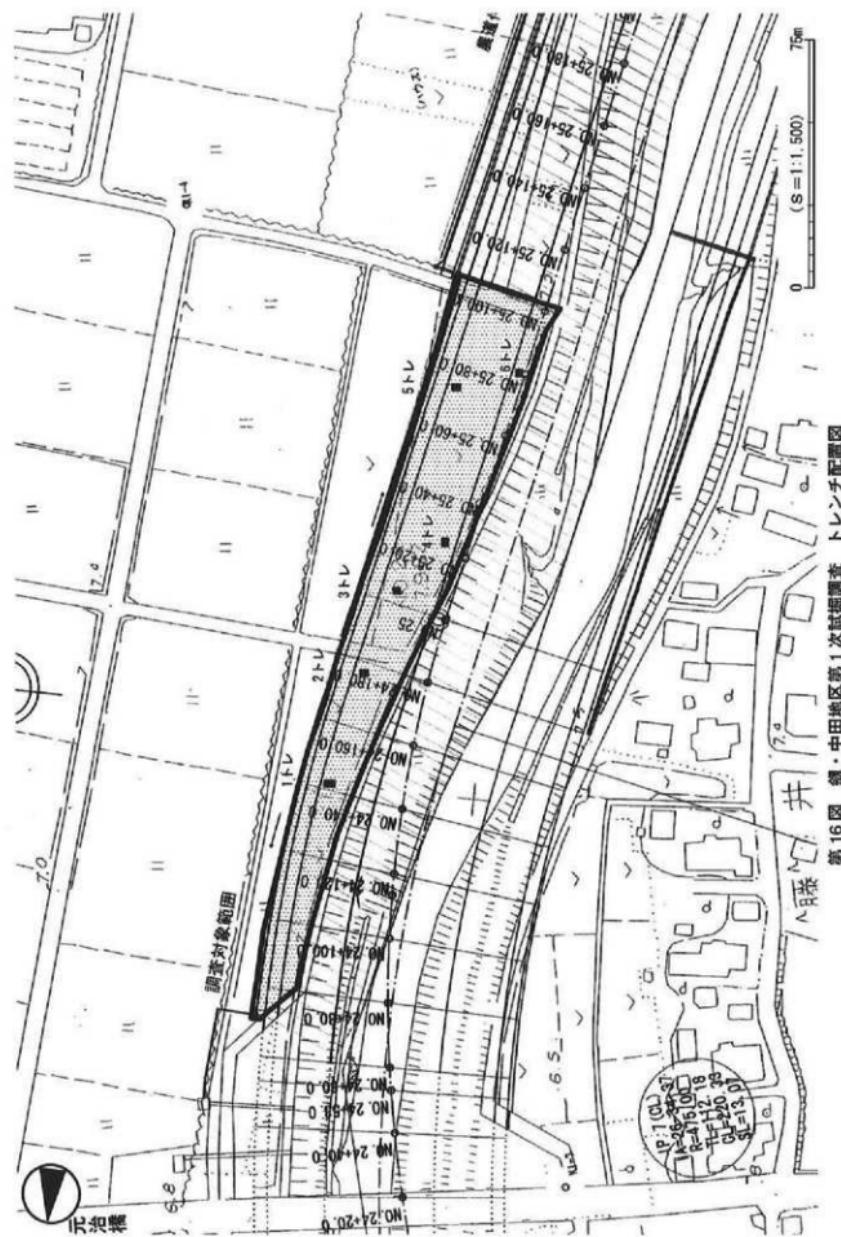
第 1 次試掘調査は、平成 24 年 8 月 1 日の 1 日間で実施した。調査員は担当職員を含む 4 名である。当日の天候は晴天であり真夏日の中での作業となった。設定・発掘した試掘坑は計 6 か所となり、第 1 ~ 6 トレンチと呼称するものとする。発掘面積は 6 つのトレンチを合わせて約 28.4 m<sup>2</sup> となる。調査対象範囲の面積が約 4,400 m<sup>2</sup> となり、発掘面積の比率（発掘率）は、約 0.6% となる。

**第 1 トレンチ** 調査対象区域の北端部分に設定した。トレンチの規模は幅約 2.0 m、延長約 3.1 m、面積約 6.2 m<sup>2</sup> である。畑の耕作土となる表土の下には約 1.2 m の厚みで盛土整地層（第 IV 層）が堆積していた。色調はまだらであり、盛土内部からはビニール片が発見され近年の盛土と考えられる。深度約 1.3 m で黄褐色シルト（第 V 層）が発見された。混入物をほとんど含まない繊維のある土層であり、当初は調査区周辺にみられる地山土と判断した。しかしながら、第 5 トレンチ等で混入物を含まず繊維の強い灰黄色粘土層（第 VI 層）が検出され、こちらが地山土と判断することとした。遺構・遺物は検出されなかった。

**第 2 トレンチ** 第 1 トレンチの約 30 m 南側に位置する。規模は幅約 2.0 m、延長約 2.5 m、面積約 5.0 m<sup>2</sup> である。深度約 40 cm で暗色となる旧表土（第 III 層）が検出され、それ以下は第 1 トレンチとほぼ同様の堆積状況であった。深度約 1.2 m で黄褐色シルトが検出された。地下の堆積状況は第 1 トレンチと類似するものであった。遺構・遺物とともに検出されなかった。

**第 3 トレンチ** 第 2 トレンチの約 25 m 南側に位置する。トレンチの規模は幅約 2.0 m、延長約 2.1 m、面積は約 4.2 m<sup>2</sup> である。表土以下にはこれまで同様に厚く盛土が堆積しており、深度約 1.0 m で黄褐色シルトが検出された。遺構・遺物とともに検出されなかった。

**第 4 トレンチ** 第 3 トレンチの約 11 m 南西に位置する。大きさは幅約 2.0 m、延長約 2.2 m、面積約 4.4 m<sup>2</sup> である。現在の堤防に近接するものとなる。地下の状況は他のトレンチの地下の状況と類似し、深度約 60 cm でやや還元化したシルト層が検出された。深度約 1.2 m まで掘削したが層の変化は確認できなかった。



第16図 鎌・中田地区第1次試掘調査 レンチ配置図

遺構・遺物は確認されていない。

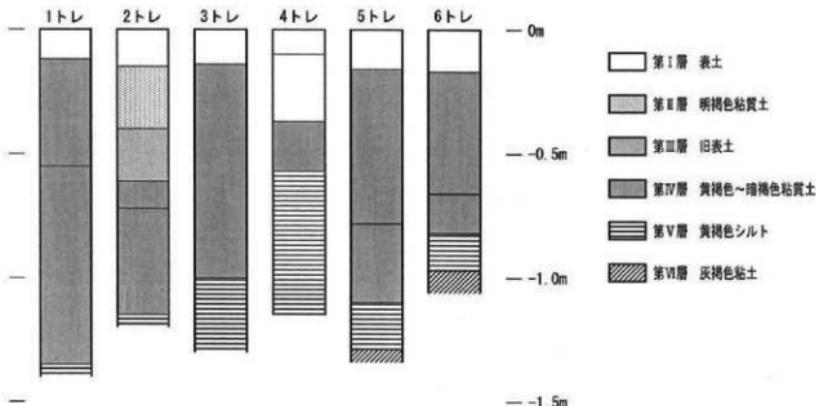
**第5トレンチ** 第4トレンチの約40m南側に設定した。トレンチの規模は幅約2.0m、延長約2.4m、面積約4.4m<sup>2</sup>である。表土、盛土の下、深度約70cmから黄褐色シルトが検出された。そしてさらに下層に混入物を含まず縦りのある灰黄色粘土（第VI層）が検出された。1~4トレンチでは検出されなかったが、本層が当該地の地山であると判断されるに至った。ジョレンがけにより丁寧に遺構確認を行ったが遺構は確認できなかった。また、遺物も出土していない。

**第6トレンチ** 第5トレンチの約15m南西側に位置する。付近に立木があったため、大きさは幅約2.0m、延長約1.9m、面積約3.8m<sup>2</sup>と小規模となる。地下の堆積状況は第5トレンチの状況に類似するものであった。盛土は厚く堆積しており、深度約1.1mまで及んでいた。深度約1.3mで地山土が検出された。遺構・遺物は検出されなかった。

### 3) 層序の概要

第1次試掘調査で検出された土層は以下の6層に分類した。

第I層は表土であり、概ね畠地の耕作土となる。第II層は明褐色粘質土であり、明色となる粘土ブロックを含む盛土である。締まりはやや弱く、第2トレンチで検出されている。第III層は炭化物を含む暗灰褐色土である。粘性・締まりはやや弱い。第2トレンチのみで検出されており、第II層が盛土される以前の旧表土と考えられる。第IV層は調査対象区全体に堆積する盛土整地層である。色調がまだらとなる特徴をもつ。ビニール片が混入していることから、近年盛土された土層と考えられる。色調の相違等により、さらに2つに分層した。上層となる第IVa層は黄褐色粘質土である。明るい色調であり、粘性・締まりはやや弱い。第IVb層はやや暗色となる暗褐色粘質土である。粘性はあるが、締まりはやや弱い。第V層は黄褐色シルトである。僅かに炭化物を含む沖積層であり、調査区全体に堆積する層である。第4トレンチではラミナ



第17図 鶴・中田地区第1次試掘調査 対象区基本層序柱状模式図 (S = 1 : 20)

状に発達した堆積を示していた。第VI層は灰褐色粘土である。炭化物等の混入物を含まず、当該地周辺にみられる、やや還元化した地山土と判断される。粘性はやや強く、締まりもある。本層の上面で遺構確認を行ったが、遺構は検出されなかった。

### 3 第2次試掘調査

#### 1) 調査の目的と方法

試掘調査の目的は、第1次試掘調査と同様に河川改修事業用地内における未周知遺跡の有無を確認することである。第2次試掘調査対象区域は、第1次調査の南側となる靖石川右岸の延長約360mであり、対象面積は約9,617m<sup>2</sup>となる。標高は7.5m前後であり、現況は概ね畑地である。部分的に未買収地が残り、この部分についてはひとまず調査対象から除外した。試掘調査に先立ち平成24年5月に現地踏査を実施しているが、今回の調査対象範囲内では遺物等の散布は確認できなかった。

第1次調査と同じく、予め試掘坑の位置を決定し、バックホー(0.25m<sup>3</sup>)を使用して発掘した。事業主体者を介し、地元住民の事前了解を得て試掘坑の位置を設定した。

#### 2) 調査の経過と試掘坑の概要

第2次試掘調査は、平成25年2月5日から2月6日の2日間で実施した。調査員は担当職員を含む延べ8名である。平成24年度の冬は小雪であり、真冬となる2月でも市街地周辺は断続的にしか積雪がみられなかった。1日目の天候は曇りであり、スムーズに作業を進めることができた。一方、2日目は朝方から雪が降り続き、降雪の中の作業となった。2日間で発掘した試掘坑は計13か所となり、第1～13トレンチと呼称するものとする。発掘面積は13のトレンチを合計すると約80.4m<sup>2</sup>となる。調査対象範囲の面積が約9,617m<sup>2</sup>となり、発掘面積の比率(発掘率)は、約0.8%となる。1日目には第1トレンチから第8トレンチを発掘し、2日目は第9トレンチから第13トレンチを発掘した。

**第1トレンチ** 調査対象区域の北端部分に設定した。トレンチの規模は幅約2.0m、延長約2.91m、面積約5.8m<sup>2</sup>である。地下の状況は隣接する第1次調査で発掘した試掘坑と概ね類似するものであった。表土の下には盛土(第II層)と旧表土(第III層)が確認された。その下には厚さ約40cmの黄灰色粘質土(第IV層)が深度約1.0mまで堆積していた。層全体が攪拌を受けており、盛土整地層ととらえられる。これらは、第1次調査の堆積状況と共通するものとなる。さらに下には炭化物を含み暗色を呈するシルト層がみられた(第V層)。層の乱れもなく自然堆積層と判断される。その下深度約1.2mで、やや明るい色調の黄褐色シルトが検出された(第VI層)。炭化物等の混入物を含まず、当該地周辺に堆積する地山土と判断された。この層の上部を遺構確認面として調査を進めることとした。トレンチ内からは、遺物・遺構とともに発見されなかった。

**第2トレンチ** 第1トレンチの約15m南側に位置する。規模は幅約2.0m、延長約3.1m、面積約6.2m<sup>2</sup>となる。地下の状況は第1トレンチに類似するものであった。盛土整地層の堆積が厚くなく、地山土は深度約80cmと比較的高い位置から検出されている。遺構・遺物とともに検出されなかった。

**第3トレンチ** 第2トレンチから南側に約35mと、やや距離を隔てる。大きさは、幅約2.0m、延長約3.2m、面積約6.4m<sup>2</sup>である。地山土は深度約1.0mで検出されており、やや砂質が強いものであった。遺構・遺物とともに検出されなかった。

**第4トレンチ** 第3トレンチの約20m南に位置する。幅約2.0m、延長約2.2m、面積約4.4m<sup>2</sup>となる。ここでは旧表土（第Ⅲ層）は確認されず、整地層（第Ⅳ層）の堆積が薄い状況が確認された。地山土は深度約90cmで検出されており、粘性・締まりはやや強いものであり、色調の違いから2層に分層している。遺構・遺物は発見されていない。

**第5トレンチ** 第4トレンチの約22m南側に設定した。幅約2.0m、延長約3.8m、面積は約7.6m<sup>2</sup>である。旧表土は検出されなかつた。盛土整地層（第Ⅳ層）は色調の違いから2層に細分した。何れも斑模様となる特徴を示すものであった。地山土は深度約90cmで検出されている。遺構・遺物とともに発見されていない。

**第6トレンチ** 第5トレンチの約14m南側に位置する。大きさは、幅約2.0m、延長約3.2m、面積は約6.4m<sup>2</sup>である。地下の堆積状況は第5トレンチの状況に類似するものであった。旧表土以下に約50cmの盛土整地層（第Ⅳ層）が堆積しており、第5トレンチと同様に色調から2層に細分可能であった。地山土は深度約1.0mで検出された。さらに40cm程度深掘りを行ったところ、シルトと砂の互層となる堆積状況が地下から確認されている。地山以下はこのような互層が深くまでおよぶ可能性を示すものととらえられる。本トレンチからも遺構・遺物は検出されなかつた。

**第7トレンチ** 第6トレンチの約21m南側に設定した。幅約2.0m、延長約2.6m、面積約5.2m<sup>2</sup>である。土層堆積状況は第6トレンチとほぼ同様となる。地山土は深度約1.0mで検出され、上部がシルト質～砂質で、下部は粘性の強いシルト質であった。地山土（第Ⅵ層）以下は沖積層となる粘土・シルト・砂層が堆積するが、薄い層となって堆積を示すことから、今回の調査ではとくに細かい分層は行わないものとした。遺構・遺物ともに検出されなかつた。

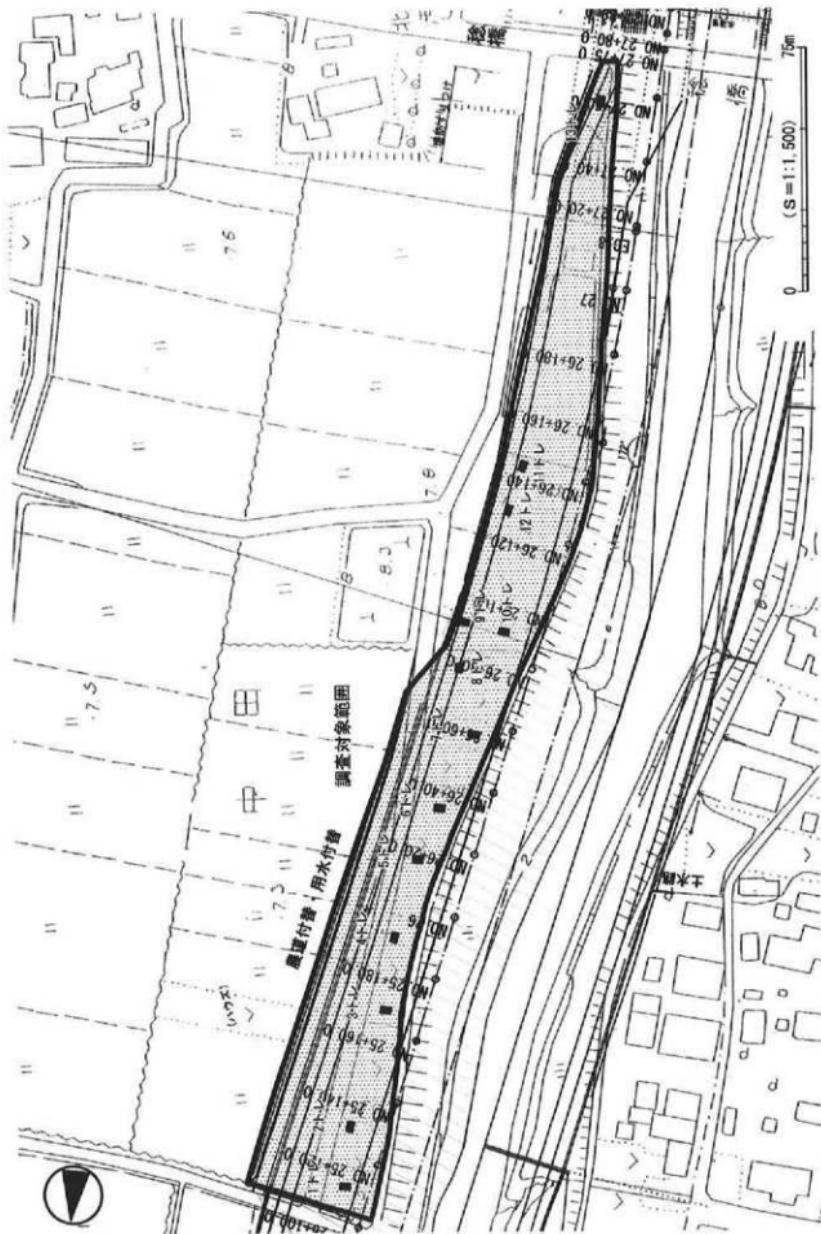
**第8トレンチ** 第7トレンチから南東側に約18mに位置する。幅約2.0m、延長約3.0m、面積は約6.0m<sup>2</sup>である。南半部の地下には近年の擾乱がよんどおり、コンクリートや杭等が混入していた。深度約1.3mで炭化物や腐植物を含み暗色となる灰色粘土層（第Ⅳc層）が発見された。地山土は深度約1.4mと周囲よりも低い位置で検出され、色調も還元化しており土質も砂質が強いものであった。堆積状況から、周囲よりも湿地性の強い環境を示すものととらえられる。遺構・遺物ともに検出されなかつた。

**第9トレンチ** 第8トレンチの約12m南の位置となる。規模は幅約2.0m、延長約3.0m、面積約6.0m<sup>2</sup>である。近接する第8トレンチのような擾乱はみられなかつた。地下約90cmで遺構確認面が検出された。地山土は概ね黄褐色を呈する粘土であるが、灰色砂が薄い層として水平方向に貫入するものであった。遺構・遺物は発見されていない。

**第10トレンチ** 第9トレンチの約9m西側に近接する。幅約2.0m、延長約3.0m、面積は約6.0m<sup>2</sup>である。地山土は深度約70cmと比較的高い位置で検出された。やや還元色を示しており、粘性・締まりとともにやや強いものであった。トレンチ内の端を30cm程度深掘りを行つたが、土層の大きな変化はみられなかつた。ただし、下位になるとシルトから砂質へと変化する状況がみられた。遺物・遺構とともに確認されなかつた。

**第11トレンチ** 第10トレンチの約49m南側の距離に位置する。大きさは幅約2.0m、延長約3.0m、面積は約6.0m<sup>2</sup>である。地下約75cmと比較的高い深度で地山土が検出され、粘性・締まりが強い特徴がみられた。遺構・遺物ともに検出されなかつた。

**第12トレンチ** 第11トレンチの北側約10mに位置する。幅約2.0m、延長約3.0m、面積は約6.0m<sup>2</sup>である。第10トレンチと第11トレンチの間隔が広いため、その間に追加して発掘したものである。深度



第18図 館・中田地区第2次試掘調査 トレンチ配置図

44cm以下に第7トレンチなどでみられた褐色砂（第IV b層）の堆積がみられた。深度70cmで検出された地山土は、やや還元化しており灰色を示すものであり、第11トレンチ同様に粘性・締まりが強いものであった。遺物と遺構は検出されていない。

**第13トレンチ** 調査区の南端に相当し、付近には砂橋が存在する位置となる。トレンチの規模は幅約2.0m、延長約3.0m、面積約6.0m<sup>2</sup>である。最も近い第11トレンチの南側は未買収地が続いていたため、約110mと距離を隔てる地点となる。間の未買収地については、第11トレンチの結果により、必要であれば後日追加発掘するものとした。深度約65cmまで近年の盛土がおよんでおり、地山土は深度約90cmで検出された。盛土（第II層）と地山の間には褐色粘質土のみが約30cmの厚さで堆積していた。南側に道路が近接しトレンチ周辺は窪地状となっているためか、トレンチ内では激しい湧水がみられた。短時間で遺構確認を行ったが、遺構は検出されなかった。遺物についても発見されなかった。

### 3) 層序の概要

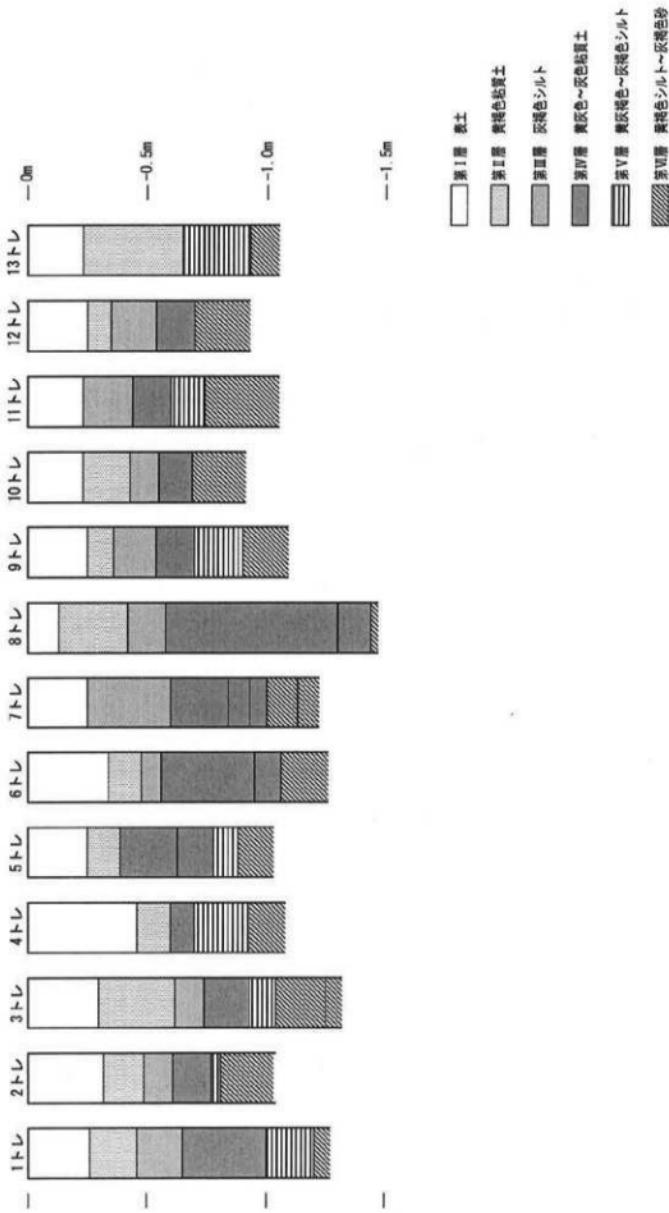
第2次試掘調査で検出された土層は以下の6層に分類した。概ね第1次調査に類似する土層堆積状況といえるものであった。

第I層は表土であり、概ね畑地の耕作土となる。第II層は黄褐色粘質土であり、明色の粘土ブロックを含む盛土である。第III層は炭化物を多く含み、やや暗色となる灰褐色シルトであり、第II層が盛土される以前の旧表土と考えられる。調査区北側の第1・2トレンチで確認された。第IV層は黄灰色～灰色を呈する粘質土であり、層全体が攪拌された盛土整地層ととらえられる。第5～第8トレンチの間ではさらに3層に細分可能であったため、上から第IV a層、第IV b層、第IV c層とした。第IV a層は黄褐色を呈するシルト～砂である。砂の粒子は細かく色調も明色である。第IV b層は灰褐色～灰色の砂であり、砂の粒子は比較的粗い特徴をもち締まりに乏しい。第IV c層は炭化物や腐植物を含み暗色となる灰色粘土である。第V層は黄灰褐色～灰褐色を呈するシルトである。粘性・締まりはやや強い。僅かに炭化物を含む冲積層であり、未検出のトレンチもあるが、ほぼ調査区全体に堆積している。第VI層は黄褐色シルト～灰褐色砂である。概ね粘性・締まりがあり炭化物等の混入物を含まず、当該地の地山土と判断される。弱酸化した色調となる地点が多いが、第12トレンチでは還元色を呈していた。本層の上面を遺構確認面とした。本層シルトと砂のラミナ状堆積を示す地点もあり細分可能となる地点もあったが、大きく1つの土層としてとらえることとした。

## 4 調査のまとめ

今回実施した第1次試掘調査および第2次試掘調査は、鯖石川下流域右岸の延長約600mを対象として実施したものである。調査の結果は、何れの調査対象区域内にも遺跡の痕跡を確認することはできなかつた。地下の状況は、平成13年度に隣接地で実施した下川原遺跡確認調査の状況に概ね類似するものであり、今回の調査でも河川改修や耕地整理等に伴う1m以上の盛土の堆積が多くみられ、その下に鯖石川による侵食や冠水による想定される土層の堆積状況が確認された。下部に砂層が堆積することから、鯖石川の氾濫源であったと想定され、遺跡が立地する可能性は否定的ととらえられる。一方、現標高はやや高く、地山の検出標高も高いこと、地山の色調がやや酸化している状況が確認された。今後も同原因事業に係る試掘調査の継続が予定されており、鯖石川下流域における遺跡の分布等について明らかにしていきたい。

第19図 銀・中田地区第2次試掘調査 対象区基本順序柱状模式図 (S = 1 : 20)



## VII 上沢田遺跡 隣接地

- 携帯電話無線中継所（P L B 柏崎西山坂田無線基地局）建設事業に係る工事立会 -

### 1 調査に至る経緯

本遺跡は、柏崎の中心市街地から北東へ約13kmの西山町坂田地区にある。地形的には、別山川（鯖石川支流）支流の坂田川流域における丘陵裾の沖積地といえる。平成16年度に県営は場整備事業に係る試掘調査によって発見された。土師器・須恵器・珠洲焼・木製品などが出土しており、土坑・溝・ピットなども確認されている（新潟県埋蔵文化財包蔵地カードによる）。平成17年度には一部を対象とした発掘調査も実施されており、手工業生産を行っていた中世の集落跡が調査されている〔柏崎市教委2007a〕。

このたび、本遺跡の隣接地で工事立会を実施することとなったが、その原因となったのは民間企業を事業主体とする携帯電話無線中継所（P L B 柏崎西山坂田無線基地局）建設事業（以下、「原因事業」とする）である。原因事業の用地は $8\text{m} \times 10\text{m} = 80\text{m}^2$ であるが、このうち $6\text{m} \times 6\text{m} = 36\text{m}^2$ の範囲が全面的に掘削を受ける計画である。

市教委が原因事業を把握したのは、平成23年12月22日である。この日、市教委は事業主体者側から埋蔵文化財包蔵地の所在確認を依頼された。事業用地は周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲とはなっていないが、県道を隔てた西側は本遺跡の推定範囲となっていた。平成16年度の試掘調査も含め、事業用地はこれまでに埋蔵文化財の調査が行われていなかった区域であることから、事業用地に遺跡の範囲が及んでいる可能性も否定できなかった。そのため、埋蔵文化財に関する法的な手続は不要であるが、工事立会の実施について、事業主体者側からの協力を得ることで協議した。その後、8月下旬に施工予定であるとの連絡があったので、対応することになった。

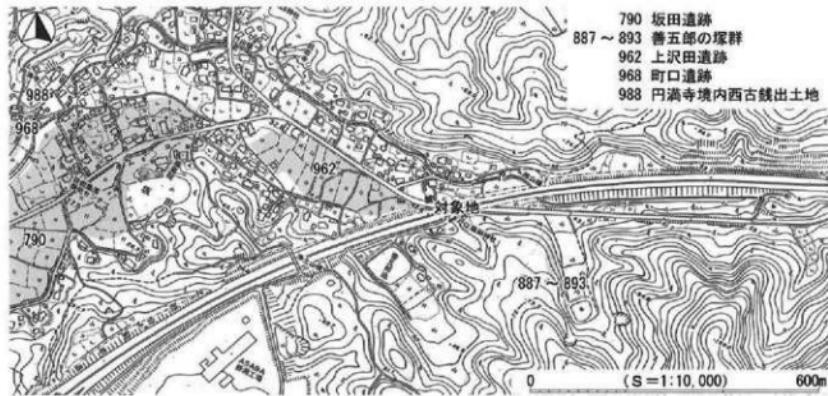
### 2 工事立会の概要

#### 1) 目的と方法

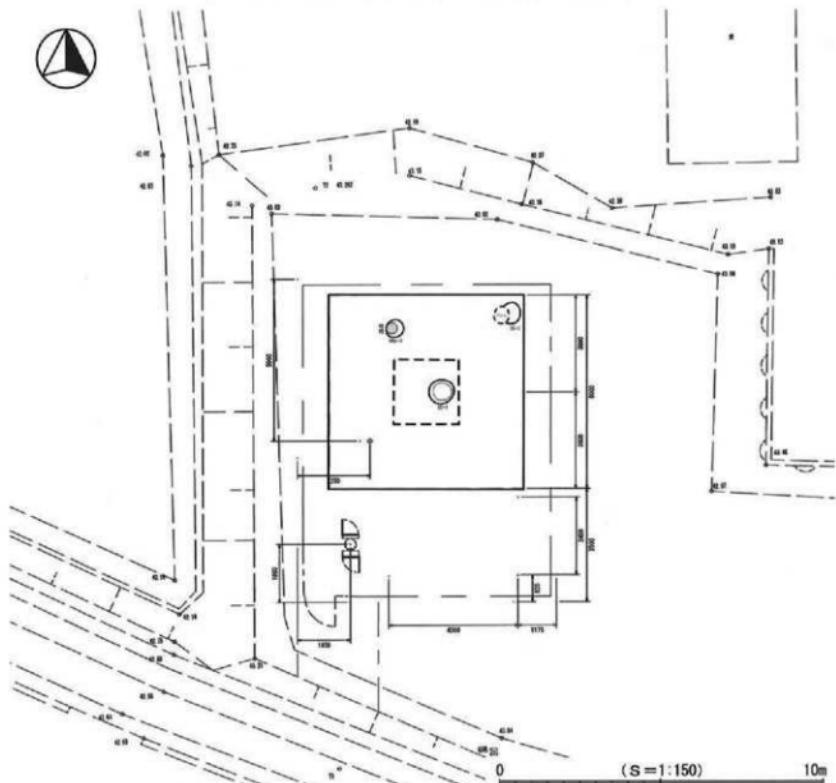
今回実施した工事立会の目的は、施工区域における遺跡の有無を確認することである。また、遺跡が存在した場合は、工事によって影響を受ける部分について、記録作業を行う必要がある。

工事立会の対象となるのは、掘削を伴う工程である。工事では、まず①中央のコンクリート柱埋設部分について、 $2\text{m} \times 2\text{m}$ の範囲を深度1.5mまでバックホーで掘削する。そして、②中央付近をオーガ（穴掘運柱車）で径0.8m、深度5mを掘削する。次に、③その周辺 $6\text{m} \times 6\text{m}$ の範囲を1.4~1.9mの間隔で径0.4mの碎石パイプを設ける。深度は5mで、これについてもオーガで掘削する。そして、④全体( $6\text{m} \times 6\text{m}$ )を深度1.2mまでバックホーで掘削する。掘削を伴う工程は、以上の①~④である。

工事立会では、各工程において施工側と打ち合わせをしながら実施した。特に、①・④では遺構が検出される可能性もあったことから、必要な段階で遺構確認を行い、検出された場合は発掘して記録した。また、掘削断面を観察し、基本層序を確認した。



第20図 上沢田遺跡隣接地工事立会の位置と周辺の遺跡



第21図 上沢田遺跡隣接地工事立会 概要図

## 2) 調査の経過と層序・遺構の概要

工事立会は、原因事業における前述の工程に基づいて行った。実施したのは、平成24年8月28日～同年9月3日の延べ20日間である。担当を含む調査員は、延べ30人を要した。対象面積は、 $6\text{m} \times 6\text{m} = 36\text{m}^2$ である。

8月28日、①が開始された。埋設部分の表土層（第I層）・盛土層（第II層）を掘削すると、青灰色シルトが混じる黒灰色粘土層（第III層）となり、深度1mほどで青灰色シルト質粘土層（第IV b層）となった。この層が地山土層と判断される。上面付近で掘削を一時中断し、遺構確認をしたところ、黒色粘土を覆土とした円形の遺構（SE-1）が1基検出された。形状から、井戸跡と考えられる。②によって一部が掘削を受けてしまうので、遺構を発掘することとした。覆土は黒褐色粘土層で、粘性があり、締まりがやや弱い。細かい木くずが混じっていたが、遺物は出土しなかった。径0.75m、深度0.68mを測る。完掘・記録の後、工事掘削深度である1.5mまで掘り下がり、第IV b層が続くのみであった。

第22図

上沢田遺跡隣接地工事立会 基本層序柱状模式図

以上の他に①・②による遺跡への影響はないとの判断し、当日の工事立会は終了とした。8月30日、③が行われた。作業内容を確認し、工事立会を終了とした。

9月1日、④に着手された。掘削を始めたところ、深度0.6m付近で黄褐色粘土層（第IV a層）となった。第IV a層は地山土層と考えられ、第IV b層が酸化したものとみられる。第III層と思われる直上の土層から近世の磁器片1点（図版22 f・g-A）が出土した。第IV a層上面を精査したところ、若干の遺構が確認された。ただし、平面の形態が不整形で、覆土の締まりが弱いものもあったので、これらは攪乱と判断した。これらを除くと、確認された遺構は円形の井戸状遺構（SE-2）とやはり円形の柱穴（SKp-3）の2基である。SE-2は、覆土が黒褐色粘土で、③の一部が重複していた。遺構を発掘していくが、工事掘削深度（1.5m）になども底部に至らなかったので、中断した。遺構深度は0.9m以上となる。SKp-3は、径0.48m、深度0.8mを測る。覆土は暗褐色を呈する、黒色土と地山土との混合土であった。柱根（図版22 h-I）が出土した。9月3日、掘削が終了した状況を確認し、以上で工事立会を終了とした。

## 3) 遺 物

出土した遺物は2点（ア・イ）のみである。アは、肥前磁器の皿である。口縁部の破片であるが、詳細な時期等は不明となった。第III層から出土した。イは、木製の柱根である。径30cm、長さ90cmを測る大型品である。下半の一部に、高さ12～15cm×幅8cmの方形の孔が貫孔状に穿たれている。その反対側は、高さ6cmほど横方向に抉られているが、穿孔だった可能性もある。いずれも用途は明らかではない。また、下端部は平坦だが、角は面取りされている。SKp-3から出土した。

## 3 まとめ

工事立会の結果、遺構・遺物が確認された。しかし、唯一時期を特定できた遺物（ア）から、遺構の時期は近世の可能性がある。中世以前の資料が得られていないため、今回は本遺跡の範囲は現状のままとしておくが、西山町坂田地区は遺跡の密度が高い地域であることから、今後も注意していただきたい。



## VIII 野田地区（第1次）

- 二級河川鵜川広域河川改修事業に係る試掘調査 -

### 1 調査に至る経緯

柏崎市野田地区は、市街地から南へ約11kmの位置にある。鵜川の中流域に形成された狭小な沖積地と、合流する田屋川及び払川を周辺に形成された扇状地が複合した地形となる。この扇状地には、現在、保育園や小学校（平成24年3月閉校）、公民館などが集中し、周辺地域の生活拠点となっている。一方、この地には、繩文時代の野田正免遺跡と川東遺跡が所在し、古くから人々の生活が営まれた地区といえる。

同地区では、新潟県柏崎地域振興局（地域整備部 治水・港湾課）を事業主体とする二級河川広域河川改修事業が進行しており、田屋川合流部付近（③工区）の改修工事が延長約1kmの間で工事が計画されている。事業計画範囲内やその付近に周知の遺跡は所在しないが、拡幅幅が10mを超える地点もあるため、事前に未周知遺跡の有無を確認する必要があると判断された。

平成23年6月20日に事業計画の説明を受けた後、平成24年4月27日付け柏振地第59号で事業主体者から埋蔵文化財の調査が依頼され、具体的な協議が進められていった。試掘調査の対象範囲は、ひとまず拡幅幅の大きな地点を対象とするものとした。用地買収は平成24年度にも継続しており、同年8月に用地買収が完了する見込みとなる右岸側を第1次試掘調査の対象とした。右岸側は河岸段丘もみられ、遺跡が立地する可能性も考えられた。ただし、水田部分は既に作付けされており、調査可能な地点は右岸でも下流側に限定された。平成24年度に調査不可能な地点（右岸水田部分、左岸側）については平成25年度以降に実施するものとし、第1次試掘調査として調査の準備を進めていった。

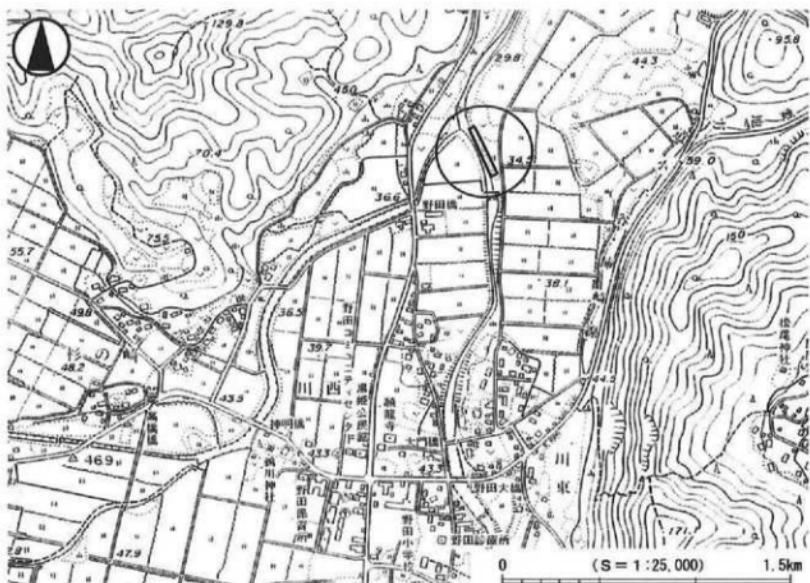
平成24年9月3日付け教総第577号で、新潟県教育委員会教育長へ文化財保護法第99条の規定による埋蔵文化財発掘調査の報告を行い、同月3日に実施した。

### 2 調査の概要

#### 1) 調査の目的と方法

今回実施した試掘調査の目的は、河川改修事業用地内における未周知遺跡の有無を確認することである。先行して平成24年5月2日に現地確認を実施したが、地表面での遺物の散布等は確認されなかった。

第一次試掘調査対象区域は、現況は畑地であり、対象面積は約1,500m<sup>2</sup>となる。標高は約33mである。試掘坑は任意の位置に設定し、バックホー(0.25m<sup>3</sup>)で発掘した。調査対象区域は、河川改修用地であることから河川方向（南北）に長い形態となる。このため、試掘坑も南北方向に任意の間隔で設定した。南側の段丘面となる水田部分より2m程度標高が下がるが、微高地状を呈している。調査対象区の位置する鵜川と田屋川の合流点は、河川の蛇行等で形成される冲積地がほとんどみられず、以前から合流点がほとんど移動していないと考えられる。このことから、冠水を繰り返す河道域ではないと判断されるため、遺跡の存在することも想定された。



第23図 野田地区第1次試掘調査 対象区位置図

## 2) 調査の経過と試掘坑の概要

第1次試掘調査は、平成24年9月3日の1日間で実施した。調査員は担当職員を含む4名である。天候は晴れで真夏と同様の強い日差しであった。試掘坑は計4か所となり、第1～第4トレンチと呼称するものとした。発掘面積は4つのトレンチを合わせ約268m<sup>2</sup>となる。調査対象区域の面積は約1,500m<sup>2</sup>となり、発掘面積の比率（発掘率）は、約18%となる。

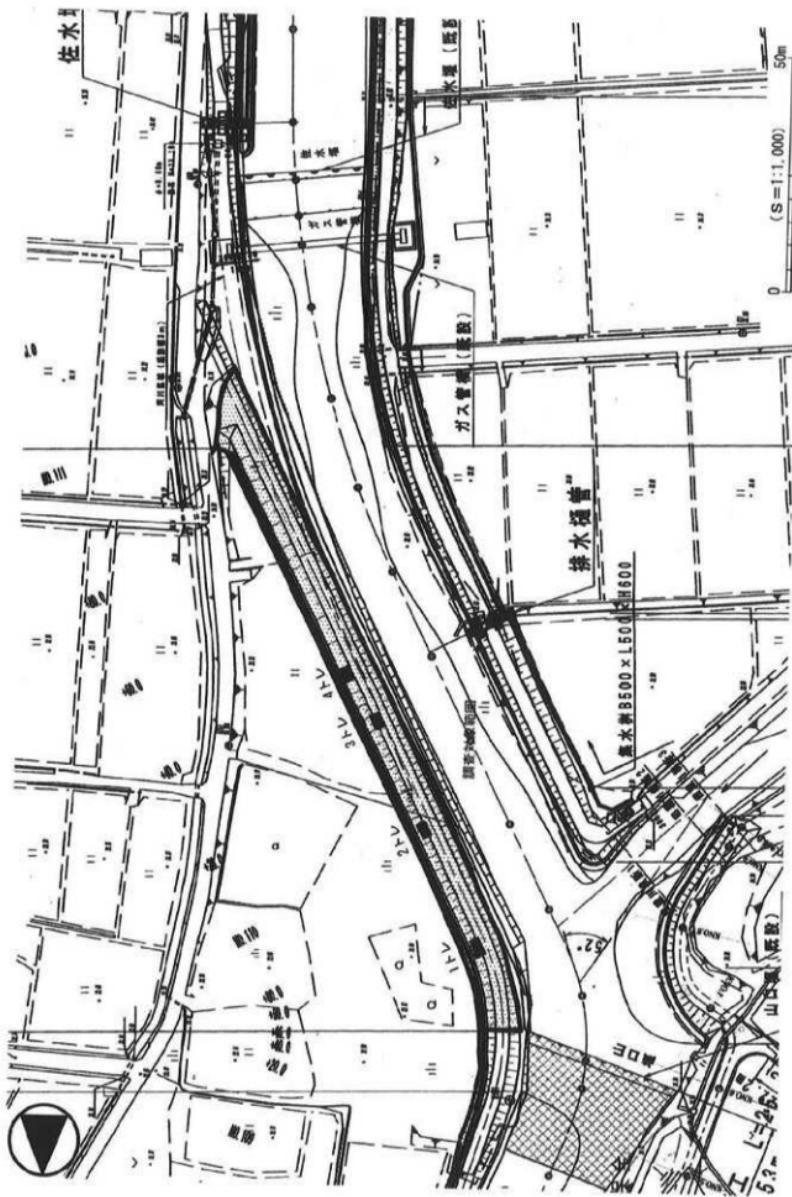
**第1トレンチ** 調査対象区域の北端部分に設定した。湧水が激しく詳細な分層は行うことができなかつたが、表土（第I層）を除去すると、灰褐色を示す砂礫層（径50cm以下）が深度約1.1mまで堆積していた。その下には地下約1.7mまで褐色砂（第II層）が堆積していた。さらに、その下に腐植物を含む砂礫層（第III層）が堆積していた。深度約2.1mまで変化は見られなかった。遺構・遺物は確認されていない。

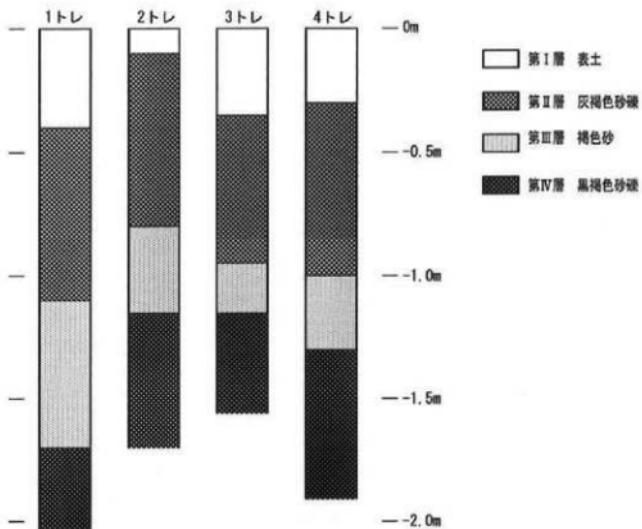
**第2トレンチ** 第1トレンチの約25m南側に位置する。地下の堆積状況は第1トレンチと類似するものであった。第III層は深度約1.1m、第IV層は深度約1.2mと比較的高い位置で検出された。河川や土石流に係る堆積が深くまで続く状況であった。遺構・遺物は確認されなかった。

**第3トレンチ** 第2トレンチの約22m南側に位置する。第III層は深度約1.0mで検出され、堆積が約20cmと薄いものであった。第IV層は深度約1.2mで検出された。遺構や遺物は確認されていない。

**第4トレンチ** 第3トレンチの約8m南側に近接して位置する。他のトレンチの地下の状況と類似するものであり、深度約0.3mで第II層が、深度約1.0mで第III層が検出されている。第IV層は深度約1.3mで検出され、深度約1.9mまで掘削したが変化はみられなかった。遺構・遺物は確認されていない。

第24図 野田地区第1次試掘調査 トレーン配置図





第25図 野田地区第1次試掘調査 対象区基本層序柱状模式図 (S = 1 : 20)

### 3) 層序の概要

第1次試掘調査では、検出された土層を以下の4層に分類した。トレンチ内に入ることが不可能であったため詳細な分層までは行えなかったが、目視により大まかに分層を行った。

第I層は表土となり、暗褐色を呈する砂層である。近年の河川改修等に伴う整地により盛土された層と考えられる。第II層は灰褐色砂礫層であり、径50cm以下の礫の混入が顕著に認められる。第III層は褐色砂層である。粒子の細かい砂が主体であるが、小礫も少量混入する。第IV層は黒褐色を呈する砂礫層である。第II層と同様に径50cm以下の礫が混入するが、礫は小さいものが主体となる傾向がみられる。土を主体とする土層はみられず、河川に係る層のみが確認された。堆積状況から長期に渡り河川による影響をうけたいた地点と判断される。また、土石流の痕跡を示す堆積状況の可能性も考えられる。

### 3 調査のまとめ

今回実施した第1次試掘調査は、鶴川中流域の右岸を対象区域としたものである。調査の結果は、調査対象区域内に遺跡の痕跡を確認することはできなかった。地下の状況は大小の転石が厚く堆積しており、旧河川跡もしくは河川付近で発生した土石流の痕跡と推定される。野田周辺は鶴川支流の払川が形成する小規模な扇状地がみられ、米山山系の土砂が地下堆積物を構成していると考えられる。こうした土石流の影響は現在の鶴川付近にまで及んでいることが今回の調査から確認された。また、砂礫層の上位には、肥沃な黒色土が覆い、水はけが良い土壤となっている。こうした地形上に縄文遺跡の野田正免遺跡が確認されているため、今後の調査で礫層の上位に遺跡が存在するなどについて明らかにしていきたい。

## IX 桜木町遺跡（第2次）

- 店舗開発事業に係る確認調査 -

### 1 調査に至る経緯

本遺跡は、柏崎市桜木町に所在する。市の中心市街地から北東へ約1.5kmの位置である。地形的にみると、鈴石川の河口に近い左岸の柏崎砂丘にあるが、周知化されている範囲は砂丘西側（海岸側）の低地である。本遺跡は、昭和58年度の県教委による分布調査によって中世土師器（第29図6～11）などが採集されたため、周知化されるに至った。しかし、その後は調査される機会もなく、実態は明らかではなかった。平成7年度、宅地開発事業に係り、南側の隣接地を対象とした試掘調査（第1次調査）を実施したが、遺跡の痕跡は確認されなかつた〔柏崎市教委1996〕。現況は、おもに畠地となっている。

このたび、確認調査（第2次調査）を実施する原因となったのは、民間企業を事業主体とする店舗開発事業（以下、「原因事業」とする）である。約1.3haの用地に盛土を行い、店舗となる鉄骨建物2棟を建設するが、その他に駐車場・進入路なども設ける。掘削を伴う工事としては、建物の基礎部分と一部の進入路部分がある。ただし、調査を実施した段階では、建物の配置などはまだ確定されてはいなかつた。

埋蔵文化財について協議が開始されたのは、平成24年度からである。7月27日、事業主体者側から埋蔵文化財包蔵地の所在確認が依頼された。8月3日にも協議を行い、事業地が周知の遺跡範囲にあるため、埋蔵文化財に関する手続や調査が必要であることをお互いに確認した。8月6日、現地確認を行い、素焼きの土器小片や鐵貨（第29図5）を探査した。

8月20日付けで事業主体者から文化財保護法第93条第1項等に基づく埋蔵文化財発掘の届出が提出されたので、同月23日付け教総第574号の2で市教委は確認調査が必要である旨の意見を付し、これを県教委へ送付した。県教委からは、同月30日付け教文第596号で確認調査実施の通知がなされた。確認調査については、9月5日付け教総第578号で文化財保護法第99条第1項に基づく発掘調査の着手を県教委へ報告し、同月11～12日に行った。ただし、現地では耕作が行われていたため、この確認調査では耕作に影響が生じない区域を対象とせざるを得なかつた。また、原因事業は設計がまだ確定していないことから、県教委においても取扱いを決定することができないため、まずは確認調査の結果をもって事業主体者と協議することとなった。調査後の同月14日、調査の結果を事業主体者へ報告したところ、おもに東部の耕作中であった区域についても調査を求められた。同月21日、事業主体者側からは地元との連絡調整について協力してもらい、10月前半に再び確認調査を行うこととなつた。

### 2 調査の概要

#### 1) 調査の目的と方法

確認調査では、調査対象区域における実際の遺跡の有無を確認することが調査のおもな目的となる。さらに、遺跡の存在が判明した場合は、その時期や範囲といった内容、そして工事による影響を把握し、取



第26図 桜木町遺跡第2次確認調査 位置図

扱いについての協議資料を得ることが必要になる。

調査は、事業用地全体を対象区域とし、任意の試掘坑を設定してバックホー(0.45m<sup>3</sup>/秒)で発掘していく。調査対象区域は砂丘にあるため、試掘坑の深度や湧水の状況によっては崩落の危険性がある。そのため、まずは表土層や搅乱層を除去した段階で遺構確認を行い、深度1m以内でひとまず土層を観察し、記録作業をする。その後、さらに深く掘り下げていき、観察や記録をしていくこととした。試掘坑の名称は「TP-○」とする。

## 2) 調査の経過

確認調査は、平成24年9月12～13日の延べ15日間及び10月2～4日の延べ20日間の合計35日間で実施した。調査担当を含む調査員及び調査補助員は、延べ10.5人を要している。

9月12日、終日晴天に恵まれた。実際に試掘坑を設定できる位置は、耕作中の畠地を除く必要があった。そのため、調査対象区域のうち、市道の西側は南部を除く大半を対象とことができたが、東側は市道付近に限られた。まず、東側の北端付近にTP-1を発掘し、次に南側へと進んでTP-2～TP-4を発掘した。終了後、西側へ移動して北側からTP-5を発掘した。午後は西側へと進み、TP-6・TP-7を調査して南側へ進んでTP-8～TP-10、さらにTP-11・TP-12を発掘した。以上で試掘坑の発掘を終了とした。各試掘坑は、記録作業が終了した後、その都度埋め戻しをしていた。

翌13日、測量作業の補足を行う。午前のみで終了した。その後、資料を整理して事業主体者へ報告したが、前述のとおり、調査できなかった東部の区域についても試掘坑を発掘することとなった。

10月2日、同じく終日晴天となった。進入路となる調査対象区域の北東部にTP-13・TP-14を発掘した。TP-14において焼土層が確認されたため、観察や記録作業に若干の時間を要した。その後、TP-15へ移動する。午後からはTP-16に着手したが、その後は南側へと進み、TP-17～TP-20を発掘した。以上で試掘坑の発掘を終了とした。同様に、各試掘坑は記録作業が終了した後に埋め戻していた。

第27図 桜木町道路第2次確認調査 試掘坑配置図



翌3・4日、測量作業の補足を行った。いずれも午前半日の作業となった。以上で、南部以外を実際の対象とする第2次確認調査が終了となった。

### 3) 試掘坑の概要と基本層序

確認調査では、調査対象区域である事業用地 12,980m<sup>2</sup>に対し、20か所の試掘坑を発掘した。面積は合計約 287.7m<sup>2</sup>であるが、これは調査対象区域の約 2.2% にあたる。

**試掘坑の概要** 調査対象区域は、砂丘の西側に位置しており、北東部の一部 (TP-13・TP-14) が砂丘上となっている以外は、すべて低地部分となる。

TP-1 は全体的に擾乱を受けていたが、それ以外の試掘坑では、表土層等（後述の第 I・II 層）を除去すると、褐色砂層（第 III a 層）となった。これは、東側の砂丘を形成している砂層の一部とみられる。上面にて遺構確認を行ったが、遺構は検出されなかった。さらに、第 III a 層を徐々に掘り下げ、深度 2m 前後まで土層を確認したが、遺物包含層といった遺跡の痕跡を得ることはできなかった。結果的に、明確な遺構は確認されず、近世以降の陶磁器が出土したもの、中世以前の遺物は発見されなかった。

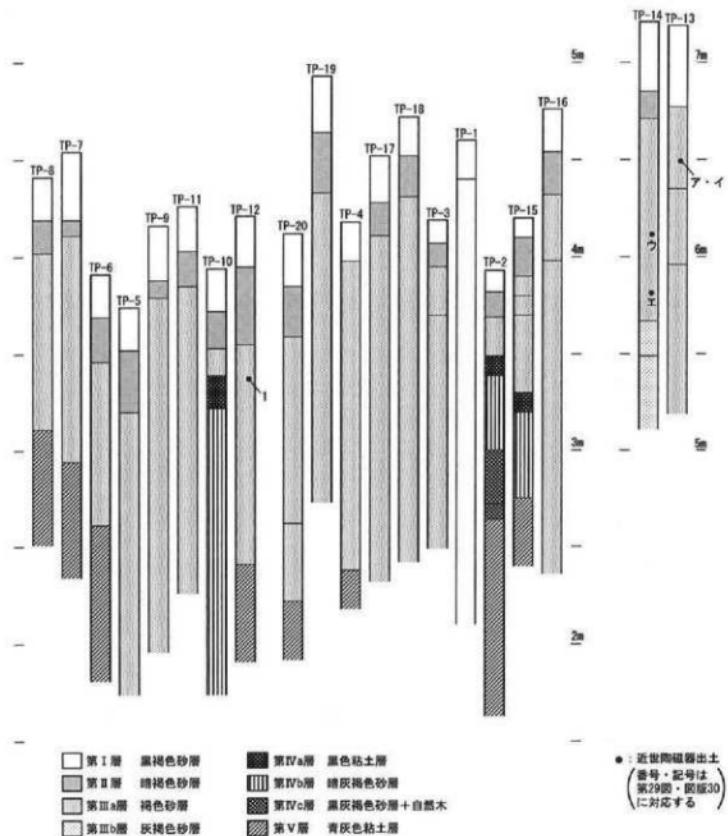
ただし、砂丘上に位置する TP-14 では、第 III a 層の下位に位置する第 III b 層の上面において、厚さ 18cm ほどの焼土層がみられた。ただし、試掘坑の壁面で土層を観察したが、明確な掘り込みなどはみられなかったため、遺構に伴うものとは考えにくかった。また、遺物も出土しなかったことから、時期や性格などを検討することもできなかった。後述するように、第 III a 層の形成は近世の可能性があることから、その下位に位置する焼土層の時期は中世以前にさかのばる可能性も考えられる。しかし、焼土層を含む第 III b 層の直上に第 III a 層が堆積しているのであり、両層の間には遺物包含層に相当するような土層は確認できなかった。そのため、周辺が遺跡範囲となる可能性は低いと思われる。

**基本層序** 各試掘坑は、特に壁面が脆弱でない場合は、できるだけ深度 2m 以上を確認している。土層観察によって得られたデータは、褐色砂層（第 III a 層）を中心に、調査対象区域全体では大きく異なるものではなかった。基本層序はおおむね第 I 層から第 V 層に整理される。

第 I 層は、おもに黒褐色砂層である。表土層であり、TP-13・TP-14 以外は現況をなす畠地の（旧）耕作土層となっている。第 II 層は、暗褐色砂層である。次の第 III a 層と同じ土層とみられるが、耕作などの擾拌を受けたものと考えられる。

第 III 層は、おもに褐色を呈する、縮まりがあまりない砂層で、全体的にみられる。おそらく、現在宅地となっている調査対象区域東側に形成された砂丘の末端付近に堆積したものと考えられる。色調によって第 III a 層：褐色砂層、第 III b 層：灰褐色砂層に細分した。第 III a 層は、褐色を呈しており、調査対象区域全体で確認された。第 III b 層は、若干暗色気味であり、確認されたのは TP-14 の下位のみに限られた。第 III a 層からは近世の陶磁器が出土しているので、形成された時期は近世と考えられる。また、前述のとおり、第 III b 層上面では、厚さ 18cm ほどの焼土層がみられた。

第 IV 層は、黒色粘土層とその下位に堆積する暗灰褐色砂層である。土質や色調などによって第 IV a 層：黒色粘土層、第 IV b 層：暗灰褐色砂層、第 IV c 層：黒灰褐色砂層に細分した。第 IV a 層は、粘性・縮まりがあり、やや砂質である。腐植物がやや多く含まれている。第 IV b 層は、縮まりがややある。微細な木片がやや多く含まれる。特に、TP-10 では 1.5 m 以上も厚く堆積していた。黒灰色粘土が混じっているが、これはヨシやアシなどの根痕で、かつて植物が繁茂していた痕跡と考えられる。また、第 IV c 層は、TP-2 のみで確認されたが、縮まりがややあり、太さ約 30cm の自然木も横たわっていた。第 IV 層は湿地性の環境が



第28図 桜木町遺跡第2次確認調査 基本層序柱状模式図

長らく続いていた痕跡と推測される。

第V層は、青灰色粘土層である。粘性・締まりがあり、やや砂質を帯びている。還元化状態の地山粘土層と考えられる。

**古環境の検討** 全体的に擾乱を受けていたTP-1以外の各試掘坑について、得られた基本層序を堆積パターンによって分類すると、次のA類・B類に分類される。すなわち、A類：第Ⅲa層が厚く堆積する試掘坑、B類：第Ⅲa層がやや薄く、標高3.0～3.5m以下で第IV層が確認される試掘坑、である。さらにA類は、A1類：第V層が確認される試掘坑、A2類：第V層が確認されない試掘坑、A3類：第Ⅲb層が確認される試掘坑、に細分される。

A1類とA2類は、試掘坑の掘削深度となった約2m前後までにおいて第V層が検出されるか否かの違いである。したがって、A2類とした試掘坑もさらに掘り下げればA1類となる可能性は十分にある。ここでは、A2類が調査対象区域の中央付近にあり、その周縁にA2類が分布していることを確認しておきたい。これにより、調査対象区域は中央付近が低地となる櫛鉢状の地形であったことが推測される。そして、B類とした試掘坑は、中央付近の一部において、北東-南西方向に直線的に分布しているが、この付近では湿地性の環境にあったと想定される。第IIIa層が近世に形成されたものであれば、これは砂丘砂で覆われる中世以前の状況と考えられる<sup>1)</sup>。

#### 4) 遺物 (第29図・図版30)

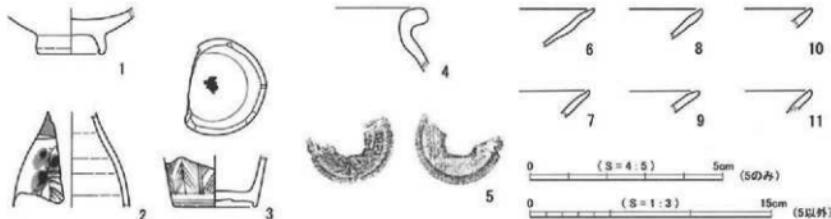
遺物は、試掘坑から若干出土している。また、事前の現地踏査でも陶磁器片などが表面採集されている。しかし、周知化の根拠となった昭和58年度の採集遺物も含めると、得られているのは小破片のみである。図化できた遺物は限られるが、おもな遺物について報告しておきたい。

**試掘坑出土遺物 (1・2・アーケ)** 陶磁器の破片が10点出土した。TP-12・TP-13・TP-14の第IIIa層から合計5点、TP-19の第I層から1点、TP-1の擾乱層から4点の出土である。すべて近世(以降)の陶磁器小片である。2点を図化した。

1は、肥前陶器の碗である。口縁部～胴部上半を欠損するが、具器手形(具器手碗)となる可能性がある。高台の内外における器厚はほぼ同じである。高台径は4.4cmを測る。焼成は良好で、釉薬は浅黄色(2.5Y7/4)、胎土は灰黄色(2.5Y7/2)を呈する。TP-12第IIIa層から出土した。肥前Ⅲ～Ⅳ期(1650～1780年代)の製品と考えられる[盛2000]。2は、肥前磁器の瓶である。頸部下半～胴部上半の破片で、ロクロ成形、内面は無釉である。外面は頸部が鉄釉であるが、胴部はその上から染付が掛け分けられており、染付部分には草花文が描かれる。焼成は良好で、釉薬は灰白色(2.5GY8/1)、胎土は灰白色(N8/1)を呈する。TP-1擾乱層から出土した。時期は、17世紀と考えられる<sup>2)</sup>。その他、アーケも近世の陶磁器である。特に、アーケは1と同様に第IIIa層から出土している。

**平成24年度表面採集遺物 (3～5)** 事前の現地踏査によって素焼きの土器小片が5点、陶磁器片40点以上、銭貨1点が表面採集された。土器以外はすべて近世以降のものである。3点を図化した。

3は、肥前磁器の猪口である。胴部下半～底部のみが遺存する。底部は蛇の目凹形高台となっている。



第29図 桜木町遺跡出土・採集遺物

試掘坑	幅 (m)	延長 (m)	面積 (m <sup>2</sup> )	剖面図	土 色 色調等	分類	遺物	備考
TP- 1	3.3	5.4	17.8	I II III IV V	暗褐色砂層 黒褐色砂層 褐色砂層 黑色粘土層 暗灰褐色砂層 青灰色粘土層	-	肥前鉢器 (2・カーラー)	遺物はすべて複数層から出土した。
TP- 2	3.3	4.0	13.2	I II III IV V	暗褐色砂層 黒褐色砂層 褐色砂層 黑色粘土層 暗灰褐色砂層 木片が多く混じる	B		全体的に緑色がかる。
TP- 3	2.9	4.0	11.6	I II III IV V	暗褐色砂層 黒褐色砂層 褐色砂層 白色粘土が混じる	A 2		
TP- 4	3.6	5.7	21.7	I II III IV V	暗褐色砂層 褐色砂層 黑色粘土層 暗褐色砂層 褐色砂層	A 1		
TP- 5	3.6	4.6	16.6	I II III IV V	暗褐色砂層 褐色砂層 黑色粘土層 青灰色粘土層	A 2		
TP- 6	3.9	4.3	16.8	I II III IV V	黑色粘土層 暗灰褐色砂層 灰褐色砂層 青灰色粘土層 上面に青灰色砂が堆積する	A 1		
TP- 7	3.6	4.0	14.4	I II III IV V	黑色砂層 暗褐色砂層 褐色砂層 下部は赤褐色を呈する 青灰色粘土層	A 1		
TP- 8	3.5	3.5	12.3	I II III IV V	黑色砂層 暗褐色砂層 褐色砂層 青灰色粘土層	A 1		
TP- 9	3.5	3.7	13.0	I II III IV V	黑色砂層 暗灰褐色砂層 褐色砂層	A 2		
TP-10	3.6	3.7	13.3	I II III IV V VI	黑色砂層 暗灰褐色砂層 褐色砂層 黑色粘土層 (褐色) 暗褐色砂層 黑色粘土層が混じる	B		
TP-11	3.6	3.3	11.9	I II III IV V	黑色砂層 暗灰褐色砂層 褐色砂層	A 2		
TP-12	3.4	4.1	13.9	I II III IV V	黑色砂層 褐色砂層 暗褐色砂層 青灰色粘土層	A 1	肥前陶器 (1)	遺物は第Ⅲ n 層から出土した。
TP-13	3.8	4.0	15.2	I II III IV V	泥炭 黑色砂層 暗褐色砂層 黒褐色砂層 明灰褐色砂層	A 2	肥前鉢器 (ア・イ)	遺物はすべて第Ⅲ n 層から出土した。
TP-14	3.4	4.3	14.6	I II III IV V VI	黑色砂層 暗褐色砂層 暗灰褐色砂層 暗灰褐色砂層 明灰褐色砂層 橙色燒土が混じる	A 3	肥前陶器 (ウ・エ)	遺物はすべて第Ⅲ n 層から出土した。
TP-15	3.3	4.1	13.5	I II III IV V VI	黑色砂層 暗褐色砂層 暗灰褐色砂層 褐色砂層 黑色粘土層 黑色粘土層	B		
TP-16	3.2	3.8	12.2	I II III IV V VI	黑色砂層 暗褐色砂層 灰褐色砂層 暗褐色砂層 褐色砂層	A 2		
TP-17	4.3	4.2	18.1	I II III IV V	黑色砂層 暗褐色砂層 褐色砂層 (褐色) 褐色砂層 下部では黑色粘土が混じる	A 2		
TP-18	3.3	3.8	12.5	I II III IV V	黑色砂層 暗褐色砂層 褐色砂層 黑色粘土層 下部では黑色粘土が混じる	A 2		
TP-19	3.8	3.1	11.8	I II III IV V	黑色砂層 暗褐色砂層 灰褐色砂層 明灰褐色砂層 青灰色粘土層	A 2	肥前鉢器 (オ)	遺物は第Ⅰ 層から出土した。
TP-20	3.2	4.2	13.4	I II III IV V	黑色砂層 暗褐色砂層 灰褐色砂層 明灰褐色砂層 青灰色粘土層	A 1		
合計			287.7					

\* 遺物の番号、記号は第29回・図版30を参照のこと。

第4表 桜木町遺跡第2次確認調査 試掘坑一覧表

外面は胴部に矢羽根文、底部に二重圓線が描かれ、底部内面（見込）には一重圓線に囲まれた文様がある。焼成は良好で、釉薬は灰白色（2.5GY8/1）、胎土は灰白色（N8/1）を呈する。形態や文様から、肥前V期（1780～1860年代）の製品とみられる〔大橋2000〕。4は、石見焼系の甕と考えられる。焼成は良好で、釉薬はにぶい赤褐色（5YR4/4）、胎土は灰黄褐色（10YR6/2）を呈する。時期は明らかにできなかった。5は、錢貨である。正面の左側に「通」、下側に「永」が読めることから、寛永通寶（1636年初鋤）とみられる。字体（太さ）からは3期（1697年初鋤）の可能性も考えられるが〔永井1998〕、断定はできなかった。

昭和58年度表面採集遺物（6～11） 素焼きの土器小片が約10点あり、この中に中世土器が含まれている。6点を図化した。

6～11は、手づくね成形による中世土器の皿で、いずれも口縁部の小片である。口径の復元ができるものはなかった。6は口縁部と底部との境界に強いナデが施されるものである。7～9は口縁端部の内側が上方にややつまみあげられるものである。10・11は口縁部がやや肥厚しているものである。焼成はすべて良好である。胎土はおむね精良であるが、6・11が灰白色（10YR8/2）、8～10が浅黄橙色（7.5YR8/3）の白～黄色系であるのに対し、7のみはにぶい橙色（5YR7/4）となっている。5点とも京都系第2波に由来するものであるため、時期は15世紀中葉～16世紀の範囲に考えられる〔水澤2005〕。

### 3 調査のまとめ

調査の結果、対象区域から中世以前における遺跡の痕跡を得ることはできなかった。試掘坑からの出土遺物から、対象区域が砂丘砂層（第IIIa層）で覆われるのが近世と考えられるため、それ以前は一部に湿地性の環境（第IV層）となっていたと推測される。ただし、北東部の砂丘上については、TP-14において焼土層が検出されている。今のところ、遺跡の範囲である可能性が高いとはいえないが、念のために工事立会によって確認することとしたい。また、調査対象区域の南部については、今回は試掘坑を発掘することができなかったため、今後も対応が必要である<sup>3)</sup>。

なお、今回の調査対象区域は、周知化されている遺跡範囲の大半の部分に相当している。今回の調査結果をもとにした遺跡範囲の見直しが必要である<sup>4)</sup>。

#### 【註】

- 1) 平成7年度に実施された第1次試掘調査は、今回の調査対象区域の南側を対象としている。A1類に相当する試掘坑（A-1・A-2）が北東側、A2類（A-1・A-2以外）がその他の区域に分布している。
- 2) 相羽重徳氏の御教示による。
- 3) 事業主体者側との協議により、平成26年2月に南部を対象とした第3次確認調査を実施した。結果的には、やはり遺跡の痕跡は確認されず、届序も第2次確認調査の結果につながる内容であった。
- 4) その場合、昭和58年度に表面採集された中世土器（6～11）の由来が壁塗となる。客土に含まれていた可能性などが考えられるが、確認調査では特に盛土の痕跡等はみられなかった。また、地元住民からの聞き取りにおいても、これまでに大きな土砂の移動はなかったとのことである。

対象区域の北東にある悪田地区では、銚石川の「悪田の渡し」が知られている。「刈羽郡旧蹟志」には天正14年（1586）8月の「悪田渡守文書」があるが〔山田1973〕、これに関係する遺跡が付近に所在する可能性が考えられる。採集された中世土器は、これに関するものであろうか。

## X 長崎新田地区等

- 二級河川別山川河川改修事業に係る試掘調査 -

### 1 調査に至る経緯

二級河川別山川は、西山町別山地区を源とする鯖石川第一の支流である。近年、河川改修事業が進むに伴い、埋蔵文化財に関する協議や調査も行われている。

調査の原因事業である二級河川別山川河川改修事業は、新潟県地域振興局（担当：地域整備部 治水・港湾課）を事業主体とする。市教委では、平成16～18年度に鯖石川合流点から吉井川合流点までを対象とした試掘調査を行い【柏崎市教委2006・同2007b】、発見された下境井遺跡の本発掘調査も実施してきた【柏崎市教委2013e】。今回は、吉井川合流点から新屋敷大橋までの延長約2.9kmが計画されているが、新田堰までの延長約1.32kmを対象とした河川の拡幅工事が優先的に行われる。事業地は、下流側から1区間（延長約450m）・2区間（延長約270m）・3区間（延長約330m）となっており、1・3区間は左岸（柏崎市）側、2区間は右岸（刈羽郡刈羽村）側へ拡幅する。堤防や付替農道を含めた拡幅用地の幅は5～10mである。なお、事業地の現況は水田で、柏崎市側における地籍は長崎新田・花田・曾地新田である。

平成23年3月15日、市教委は事業主体者から事業の概要について説明を受け、現地確認を行うこととなっていた。平成24年3月9日、改めて事業主体者から説明を受けたが、市村境を跨ぐ事業であることから、県教委・刈羽村教委も交えた協議を行うこととなった。同年4月16日、事業主体者・県教委・刈羽村教委と4者による協議を行った。その結果、耕作前に現地確認を行い、収穫・用地買収後に試掘調査を行うこととなった。同年4月17～20日、周辺を含めた現地確認を行ったところ、近世（以降）の陶磁器や銭貨などが採集されたが、明確に中世以前の遺跡が存在する資料は得られなかった。同年7月2日、事業主体者と具体的な試掘調査の時期などについて協議し、その後の連絡から9月下旬に実施することで準備を進めていった。

事業主体者からは、平成24年4月16日付け柏振地第49号で事業主体者から埋蔵文化財の調査について依頼された。市教委では、同年9月21日付け教総第585号で文化財保護法第99条に基づく調査の着手を県教委へ報告した。調査は同月25～27日に実施した。結果については、同年10月3日付け教総第585号の2で県教委へ、同日付け教総第514号の2で事業主体者へそれぞれ報告した。

### 2 試掘調査

#### 1) 調査の目的と方法

調査では、事業地における遺跡の有無の確認がおもな目的となる。さらに、遺跡の存在が判明した場合は、その時期や範囲といった内容、そして工事による影響などを把握し、取扱いについての協議資料を得ることが必要になってくる。

調査は、施工区域を対象区域とし、任意の試掘坑を設定して重機（バックホー 0.25m<sup>3</sup>）で発掘してい

く。遺跡の有無を判断した段階で発掘を止め、写真撮影や土層断面の観察といった記録作業を行ったが、必要により深掘りを行った試掘坑もある。試掘坑の名称については調査順に2桁の算用数字を用い、「TP-01」などとした。

## 2) 調査の経過

試掘調査は、平成24年9月25日から27日までの延べ25日間、調査担当及び調査員は延べ50人、調査補助員は延べ50人を要した。

9月25日、1区間の南側（下流側）から着手し、北側（上流側）へ進めた。特に遺跡の痕跡は得られなかつたことから、おおむね40mの間隔で試掘坑を設定していき、TP-01～TP-08を発掘することができた。TP-07とTP-08については、重機の乗入の都合から順番を逆にした。26日、1区間を継続し、西側（上流側）においてTP-09～TP-11を調査したが、南西側（下流側）と同様に遺跡の痕跡はみられなかつた。

その後、3区間に移動し、東側（上流側）から西側（下流側）へ向かって調査を進め、TP-12～TP-15を発掘した。27日、西側（下流側）で残っていた部分について、TP-16・TP-17を発掘したが、遺跡の痕跡は得られなかつた。復旧や撤収も含め、午前で現場業務を終了することができた。

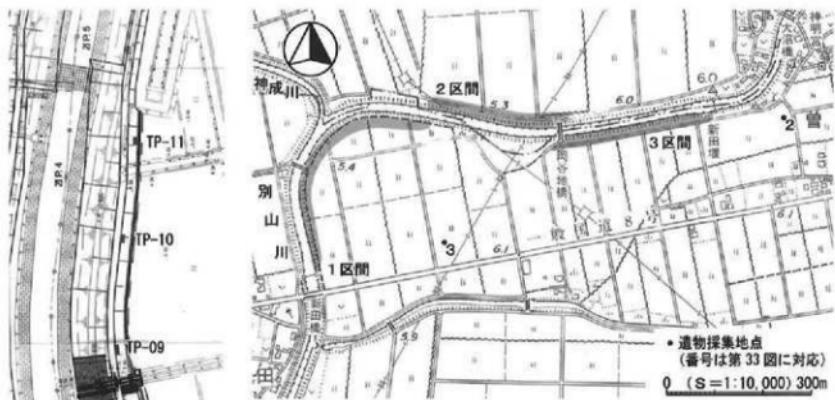
## 3) 試掘坑の概要

調査対象区域約6,020.2m<sup>2</sup>に対し、17か所の試掘坑、合計約90.4m<sup>2</sup>を発掘した。これは、調査対象区域の約1.5%にあたる。調査の結果、中世以前の遺構・遺物は確認されなかつた。また、1区間と3区間にでは、基本層位に大きな差異は認められず、おおむね一連の地形・環境にあったとみられる。以下、概要を述べたい。

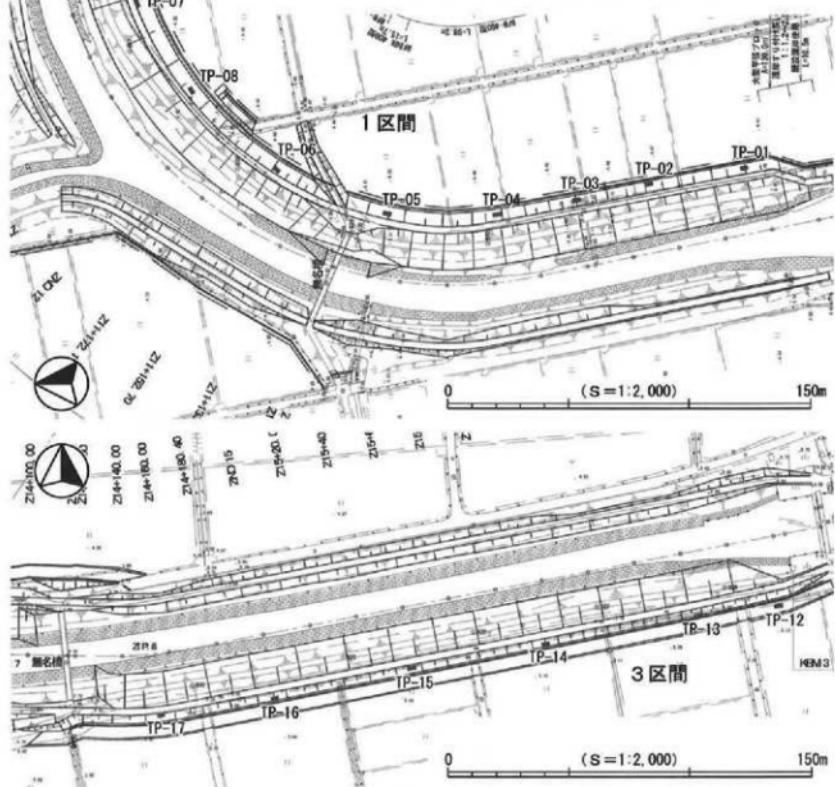
耕作土層（第Ⅰ層）を除去すると、TP-08以東の標高4.6～5.0mでは、灰色～灰褐色粘質土層（第Ⅱ層）がみられた。河川の氾濫に伴う堆

試掘坑	幅 (m)	延長 (m)	面積 (m <sup>2</sup> )	土 層	備考
TP-01	1.6	3.1	5.0	I 黄褐色粘質土 II 黑褐色粘質土 III 灰褐色粘質土 IVa 黄褐色シルト質粘土 IVb 明黄色シルト質粘土 V 黄褐色粘土 VIa 黑褐色粘土 VIb 黑褐色腐植土	
TP-02	1.6	3.1	5.0	I 黄褐色粘質土 II 黑褐色粘土 III 黄褐色粘土 IVa 黑褐色粘土 IVb 黑褐色腐植土 V 黑褐色粘土 VIa 黑褐色腐植土 VIb 黑褐色粘土	
TP-03	1.6	3.4	5.4	I 黄褐色粘質土 II 黑褐色粘土 III 黄褐色粘土 IVa 黑褐色粘土 IVb 黑褐色腐植土 V 黄褐色粘土 VIa 黑褐色腐植土 VIb 黄褐色粘土	
TP-04	1.6	3.5	5.6	I 黄褐色粘質土 II 黑褐色粘土 III 黄褐色粘土 IVa 黑褐色粘土 IVb 黑褐色腐植土 V 黄褐色粘土	
TP-05	1.6	3.4	5.4	I 黄褐色粘質土 II 黑褐色粘土 III 黄褐色粘土 IVa 黑褐色粘土 IVb 黑褐色腐植土 V 黄褐色粘土	
TP-06	1.6	3.1	5.0	I 黄褐色粘質土 II 黑褐色粘土 III 黄褐色粘土 IVa 黑褐色粘土 IVb 黑褐色腐植土 V 黄褐色粘土	
TP-07	1.6	3.4	5.4	I 黄褐色粘質土 II 黑褐色粘土 III 黄褐色粘土 IVa 黑褐色粘土 IVb 黑褐色腐植土 V 黄褐色粘土	
TP-08	1.6	3.2	5.1	I 黄褐色粘質土 II 黑褐色粘土 III 黄褐色粘土 IVa 黑褐色粘土 IVb 黑褐色腐植土 V 黄褐色粘土	
TP-09	1.6	3.5	5.6	I 黄褐色粘質土 II 黑褐色粘土 III 黄褐色粘土 IVa 黑褐色粘土 IVb 黑褐色腐植土 V 黄褐色粘土	
TP-10	1.6	3.6	5.8	I 黄褐色粘質土 II 黑褐色粘土 III 黄褐色粘土 IVa 黑褐色粘土 IVb 黑褐色腐植土 V 黄褐色粘土	
TP-11	1.6	3.5	5.6	I 黄褐色粘質土 II 黑褐色粘土 III 黄褐色粘土 IVa 黑褐色粘土 IVb 黑褐色腐植土 V 黄褐色粘土	
TP-12	1.6	3.3	5.3	I 黄褐色粘質土 II 黑褐色粘土 III 黄褐色粘土 IVa 黑褐色粘土 IVb 黄褐色粘土 V 黄褐色粘土	試掘坑から近接陶器出土
TP-13	1.6	3.3	5.3	I 黄褐色粘質土 II 黑褐色粘土 III 黄褐色粘土 IVa 黑褐色粘土 IVb 黄褐色粘土 V 黄褐色粘土	
TP-14	1.6	3.3	5.3	I 黄褐色粘質土 II 黑褐色粘土 III 黄褐色粘土 IVa 黑褐色粘土 IVb 黄褐色粘土 V 黄褐色粘土	
TP-15	1.6	3.5	5.6	I 黄褐色粘質土 II 黑褐色粘土 III 黄褐色粘土 IVa 黑褐色粘土 IVb 黄褐色粘土 V 黄褐色粘土	
TP-16	1.6	3.3	5.3	I 黄褐色粘質土 II 黑褐色粘土 III 黄褐色粘土 IVa 黑褐色粘土 IVb 黄褐色粘土 V 黄褐色粘土	
TP-17	1.6	3.0	4.8	I 黄褐色粘質土 II 黑褐色粘土 III 黄褐色粘土 IVa 黑褐色粘土 IVb 黄褐色粘土 V 黄褐色粘土	
合計				90.4	

第5表 長崎新田地区等試掘調査 試掘坑一覧表



第30図 長崎新田地区等試掘調査 対象区域



第31図 長崎新田地区等試掘調査 試掘坑配置図

積層とみられる。また、TP-17以東の3区間では、標高4.3～4.7mにおいて青灰色や灰褐色を呈した砂層（第Ⅲ層）がみられた。過去の流路の痕跡とみられる。そして、その下は厚い粘土層（第Ⅳ層）が堆積していた。第Ⅳ層は、締まりがあり、きめが細かい。試掘坑や深度によって色調が若干異なるが、TP-10以南では上半が酸化色を呈していることがあり、その場合は明褐色となっている（第Ⅳa層）。下半や3区間では、還元色の青灰色を呈している（第Ⅳb層）。第Ⅳ層上面を遺構確認面として各試掘坑で精査したが、遺構は確認できなかった。また、遺物包含層もみられない。

第Ⅳ層上面を確認した後、深掘りにより下層を確認した。TP-09～TP-11では、標高3.7m以下において青灰色砂層（第Ⅴ層）が堆積していた。同じく砂層の第Ⅲ層とは、第Ⅳ層による断絶があることから、異なる時期に形成されたことは明らかである。また、TP-05以降及びTP-17以西では、標高3.5m以下に腐植土層（第Ⅵ層）の堆積がみられた。黒灰色腐植土層（第Ⅵa層）とその下に堆積する腐植土が混じった灰褐色粘土層（第Ⅵb層）に分類される。ただし、両区間の第Ⅵ層が同一のものかは不明である。

調査対象区域は、別山川の流路（第Ⅲ層・第Ⅴ層）や湿地（第Ⅵ層）の一部となっていた時期もあったが、長らくは氾濫原（第Ⅱ層・第Ⅳ層）となっていたと考えられる。TP-12第Ⅱ層から17世紀後半の遺物（第33図1）が出土しているので、第Ⅳ層とした厚い粘土層は、古代・中世に堆積したと推測される。

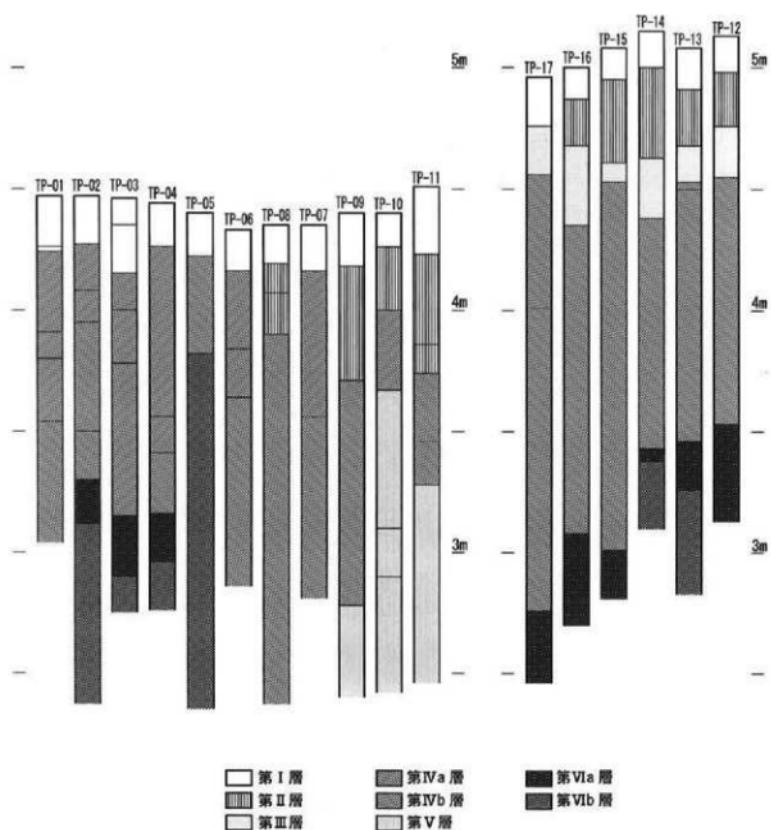
#### 4) 遺 物

試掘調査において遺物が1点出土しており、事前の現地踏査によって周辺から26点が表面採集されている。大半が近世のもので、図化が可能だったのは3点のみとなった。

1は、肥前陶器の鉢の底部片である。試掘坑から唯一出土した遺物である。TP-12深度30cm（第Ⅱ層）から出土した。外面に鉄釉、内面に灰釉を掛け分ける。高台径は10.2cmを測る。焼成は良好で、外面は灰褐色、内面はにぶい黄褐色、胎土は橙色を呈する。高台の器形から、Ⅲ期（1650～1690年）の製品と考えられる〔家田2000〕。2は、肥前陶器の擂鉢の胴部片である。3区間付近の水田から採集した。口縁部に鉄釉などが施されている可能性があるが、本破片は内外面無釉で、色調は灰褐色を呈する。口クロ整形で、内面の擂目は密である。このような特徴から、Ⅲ期（1650～1690年）の製品と考えられる〔家田2000〕。3は、銭貨で寛永通寶である。1区間付近の水田から表面採集された。銅一文錢で、背面に文字がなく、「寶」がいわゆる「ハ貝寶」であることから、新寛永の3期（1697～1781年鑄造）に分類される〔永井1998〕。その他は、陶磁器（23点）と素焼き製品（1点）の小破片である。大半が肥前系陶磁器であるが、1～3よりも古いものは明確ではなく、近世後半～近代の所産といえる。

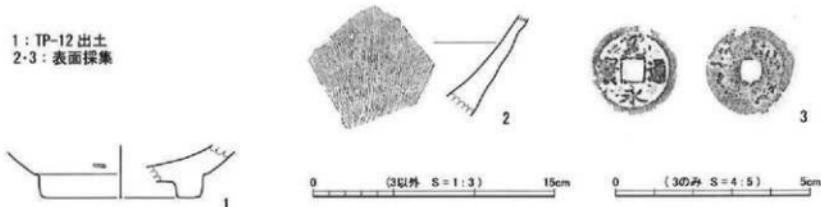
#### 3 調査のまとめ

今回の試掘調査では、中世以前の遺構・遺物を確認することはできなかった。出土あるいは採集された遺物は、17世紀後半以降のものである。調査対象区域は、第Ⅳ層が厚く堆積していたことから、長らく別山川の氾濫原となっており、集落などは營まれてはいなかったようである。遺物が出土した第Ⅱ層が17世紀後半に堆積したものとすれば、18世紀以降に開発が進められ、現在のような水田になったと考察される。長崎新田地区では、水不足の一方で、豪雨の際には洪水の被害があったことが伝えられている〔西中通のあゆみ編さん委嘱1995〕。厚い粘土層の堆積からは、このような水害が想起されるが、自然の影響を受けながら進められた開発の歴史をうかがうことができよう。



第32図 長崎新田地区等試掘調査 基本層序柱状模式図

1: TP-12出土  
2-3: 表面採集



第33図 長崎新田地区等試掘調査 出土・採集遺物

# X I 総 括

第23期となった平成25年度の柏崎市内遺跡発掘調査事業では、試掘調査等の現場業務のほかに、平成24年度に実施した調査について整理業務を継続した。このうち本書に掲載したのは、おもに前半期に実施した10件と工事立会1件である。他については、別書にて報告するものとしたい。

試掘調査・確認調査等で得られる資料は、ほとんどが小規模なものである。しかし、埋蔵文化財の保護には欠かせない資料であり、調査の成果は地域の歴史を理解するための足掛かりとなるものである。調査件数が増加傾向にあることからも、本事業が果たす役割は大きいといえよう。

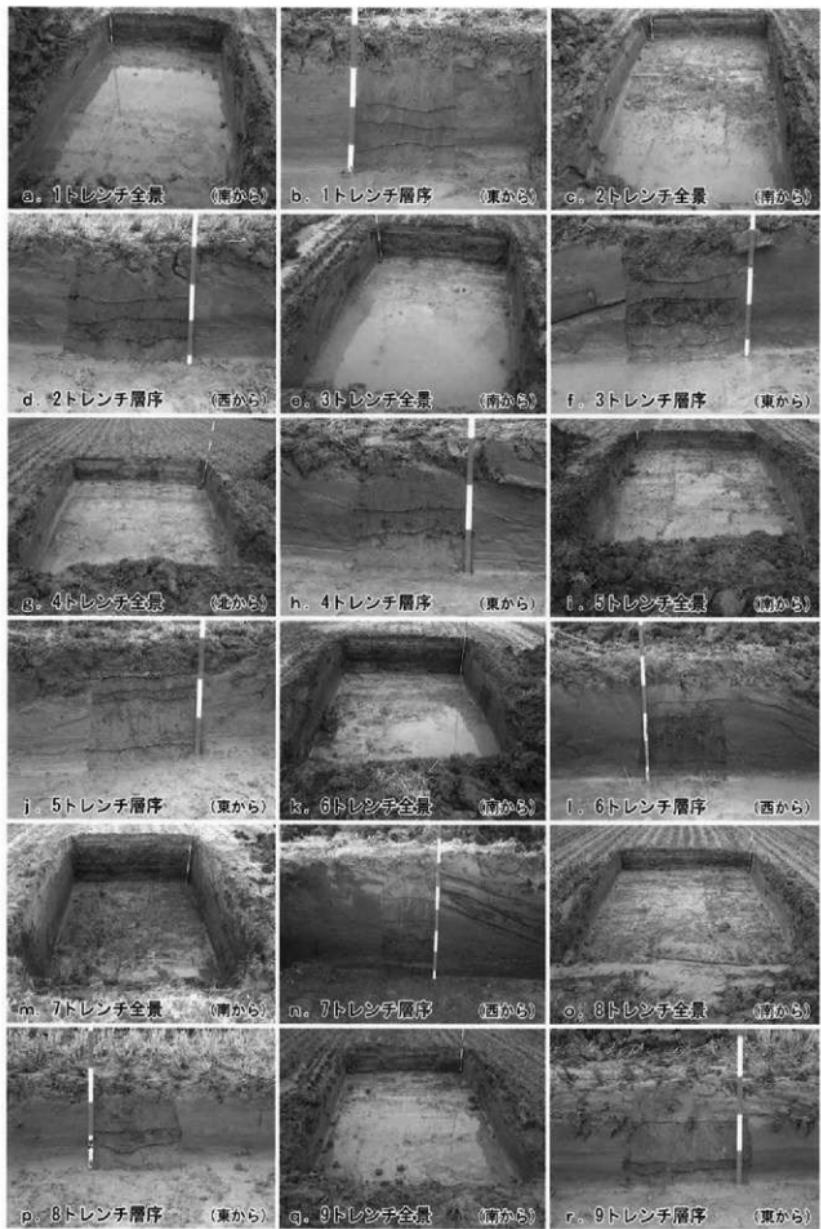
## ◀ 引用・参考文献 ▶

- 家田淳一 2000 「陶器の編年 掘鉢・鉢・片口・水指・茶入・土瓶・水注・灯火具」『九州陶磁の編年－九州近世陶磁学会10周年記念－』 九州近世陶磁学会
- 猪爪一郎 2000 「藤井城の沿革と現状」柏崎市教育委員会2000所収
- 植木昭吾 1997 「最後の地名 その由来を探る」中越編（私家版）
- 大橋康二 2000 「陶器の編年（色絵以外）鉢・猪口・蓋付鉢・合子・水指・蓋置・薬壺」『九州陶磁の編年－九州近世陶磁学会10周年記念－』 九州近世陶磁学会
- 柏崎市教育委員会 1996 「柏崎市の遺跡V」（柏崎市埋蔵文化財調査報告書第25集）
- 柏崎市教育委員会 2000 「柏崎市の遺跡VI」（柏崎市埋蔵文化財調査報告書第33集）
- 柏崎市教育委員会 2004 「柏崎市の遺跡XIII」（柏崎市埋蔵文化財調査報告書第43集）
- 柏崎市教育委員会 2006 「柏崎市の遺跡XV」（柏崎市埋蔵文化財調査報告書第49集）
- 柏崎市教育委員会 2007 a 「坂田遺跡群I」（柏崎市埋蔵文化財調査報告書第50集）
- 柏崎市教育委員会 2007 b 「柏崎市の遺跡XVI」（柏崎市埋蔵文化財調査報告書第51集）
- 柏崎市教育委員会 2012 a 「柏崎市の遺跡21」（柏崎市埋蔵文化財調査報告書第66集）
- 柏崎市教育委員会 2012 b 「音無漸I」（柏崎市埋蔵文化財調査報告書第68集）
- 柏崎市教育委員会 2013 a 「天皇峰」（柏崎市埋蔵文化財調査報告書第69集）
- 柏崎市教育委員会 2013 b 「柏崎市の遺跡別冊I」（柏崎市埋蔵文化財調査報告書第70集）
- 柏崎市教育委員会 2013 c 「柏崎市の遺跡22」（柏崎市埋蔵文化財調査報告書第71集）
- 柏崎市教育委員会 2013 d 「音無漸II」（柏崎市埋蔵文化財調査報告書第72集）
- 柏崎市教育委員会 2013 e 「下境井」（柏崎市埋蔵文化財調査報告書第73集）
- 柏崎市教育委員会 2014 a 「黒都古屋敷」（柏崎市埋蔵文化財調査報告書第74集）
- 柏崎市教育委員会 2014 b 「坂田II・上加納」（柏崎市埋蔵文化財調査報告書第76集）
- 品田高志 1992 「別保盆地と久米遺跡群－まとめにかえて－」『柏崎市の遺跡I』（柏崎市埋蔵文化財調査報告書第16） 柏崎市教育委員会
- 永井久美男 1998 「寛永通寶」同編「近世の出土銭II 分類図版篇」 兵庫埋蔵銭調査会
- 西中通のあゆみ編さん委員会編 1995 「西中通コミュニティ開館二十周年記念 西中通のあゆみ 増補改訂版」 柏崎市西中通公民館
- 水澤幸一 2005 「越後の中世土器」『新潟考古』第16号 新潟県考古学会
- 盛 峰雄 2000 「陶器の編年 碗・皿」『九州陶磁の編年－九州近世陶磁学会10周年記念－』 九州近世陶磁学会
- 山田八十八郎編 1973 「刈羽郡旧蹟史」全 名著出版

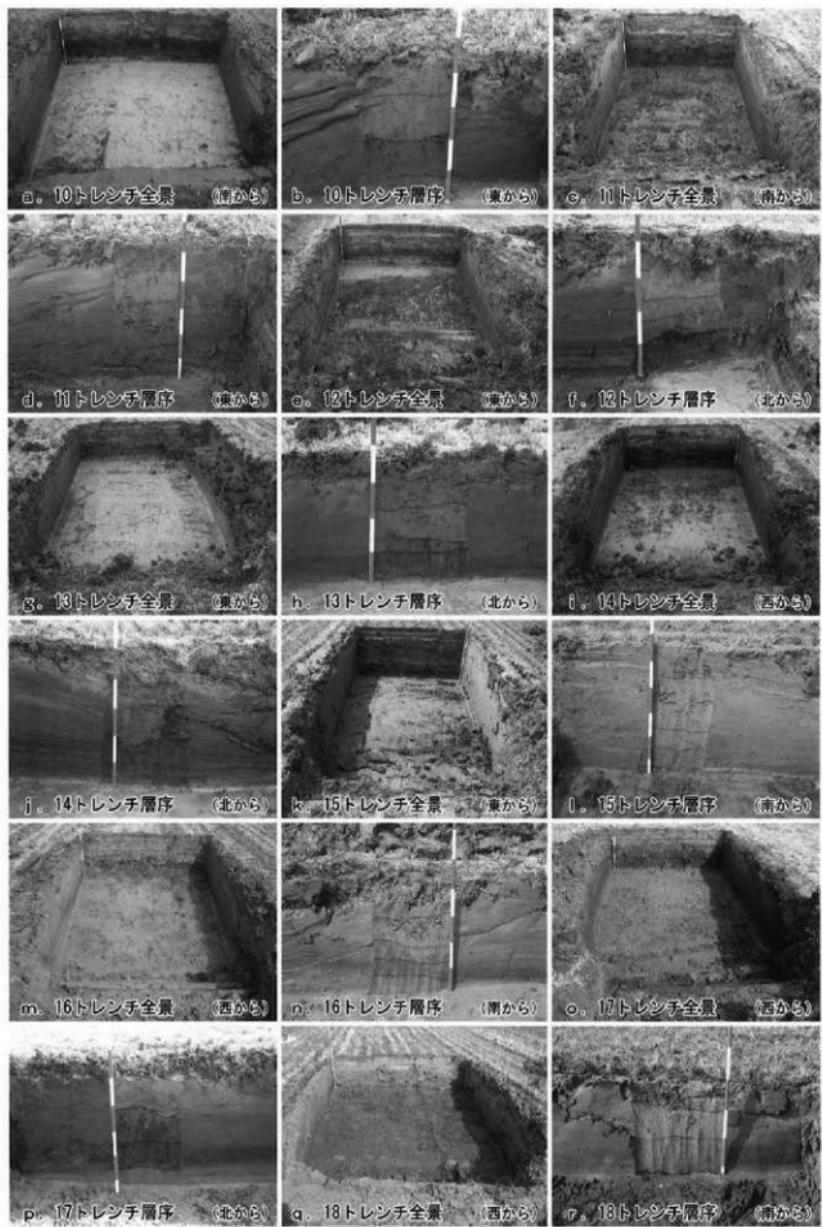
II 高田北部地区（第1次） 1



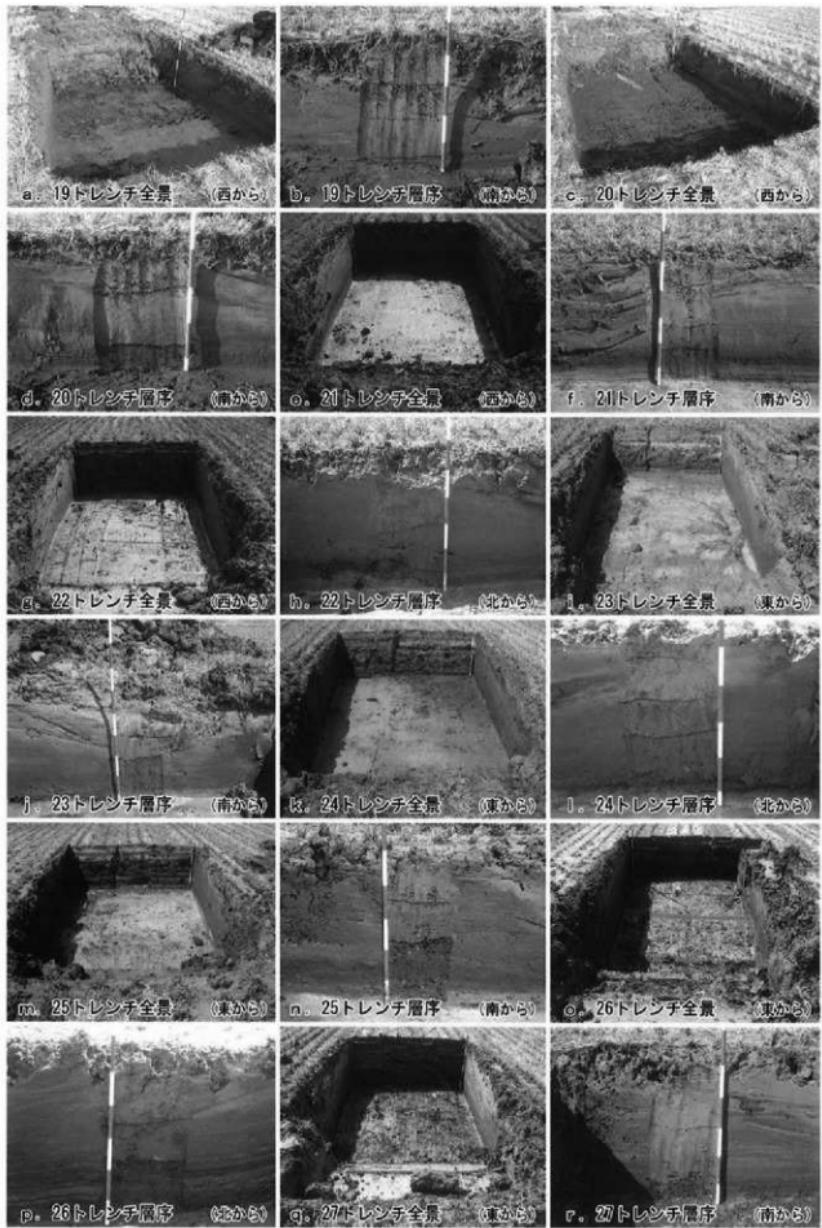
## II 高田北部地区（第1次） 2



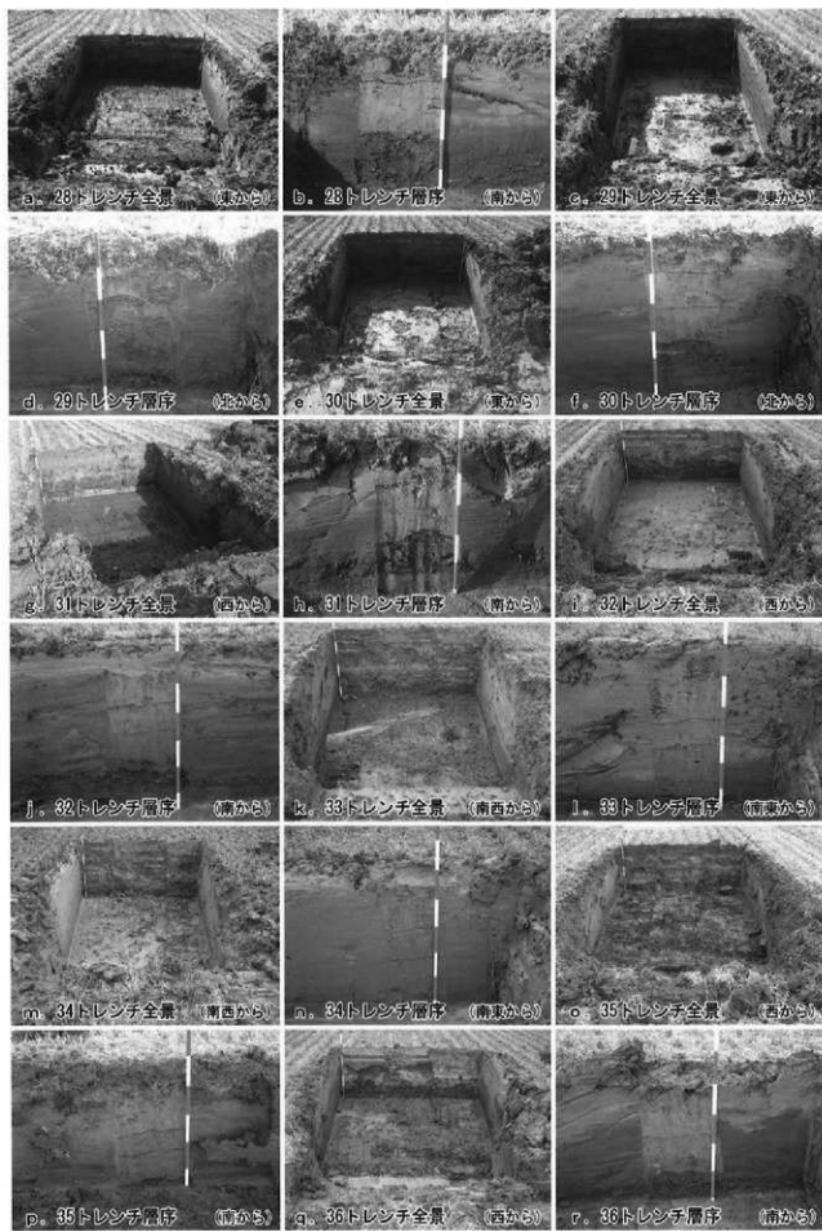
## II 高田北部地区（第1次） 3

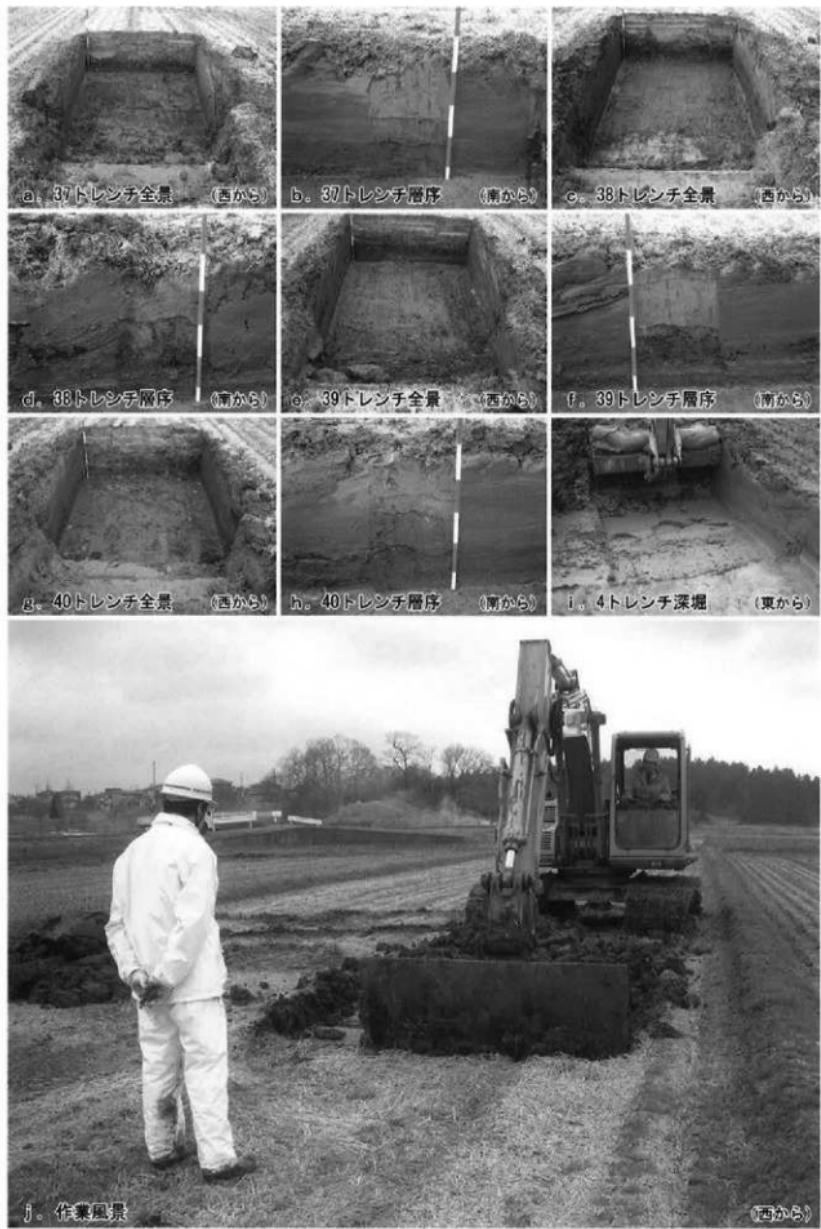


## II 高田北部地区（第1次） 4



## II 高田北部地区（第1次） 5





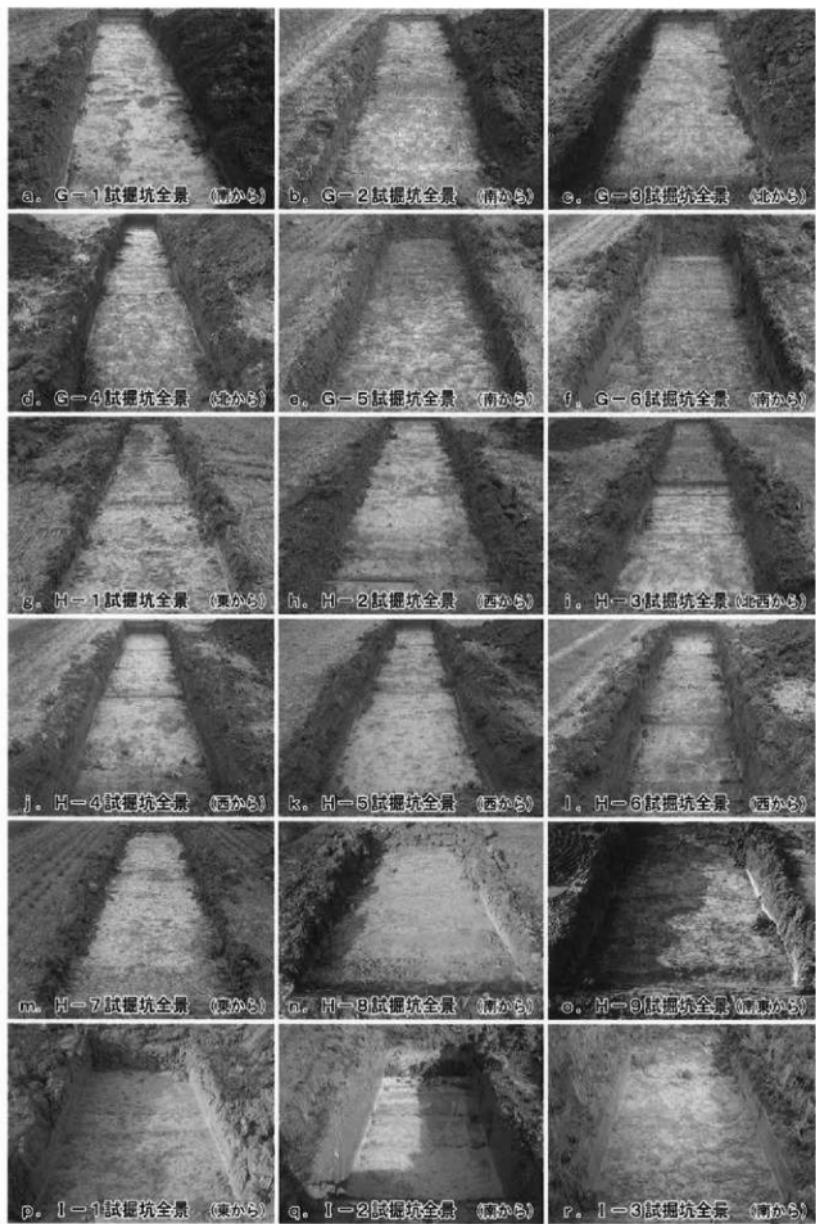
## III 内郷地区（第2次）



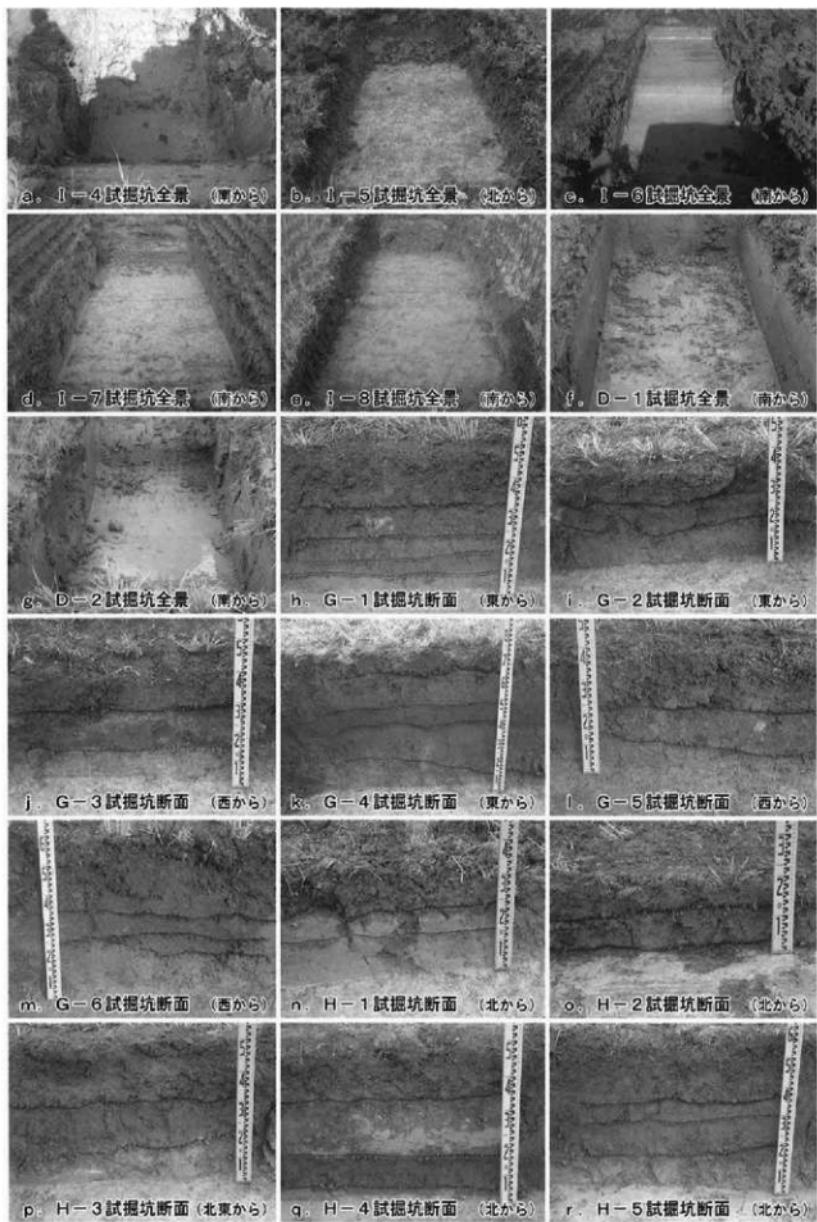


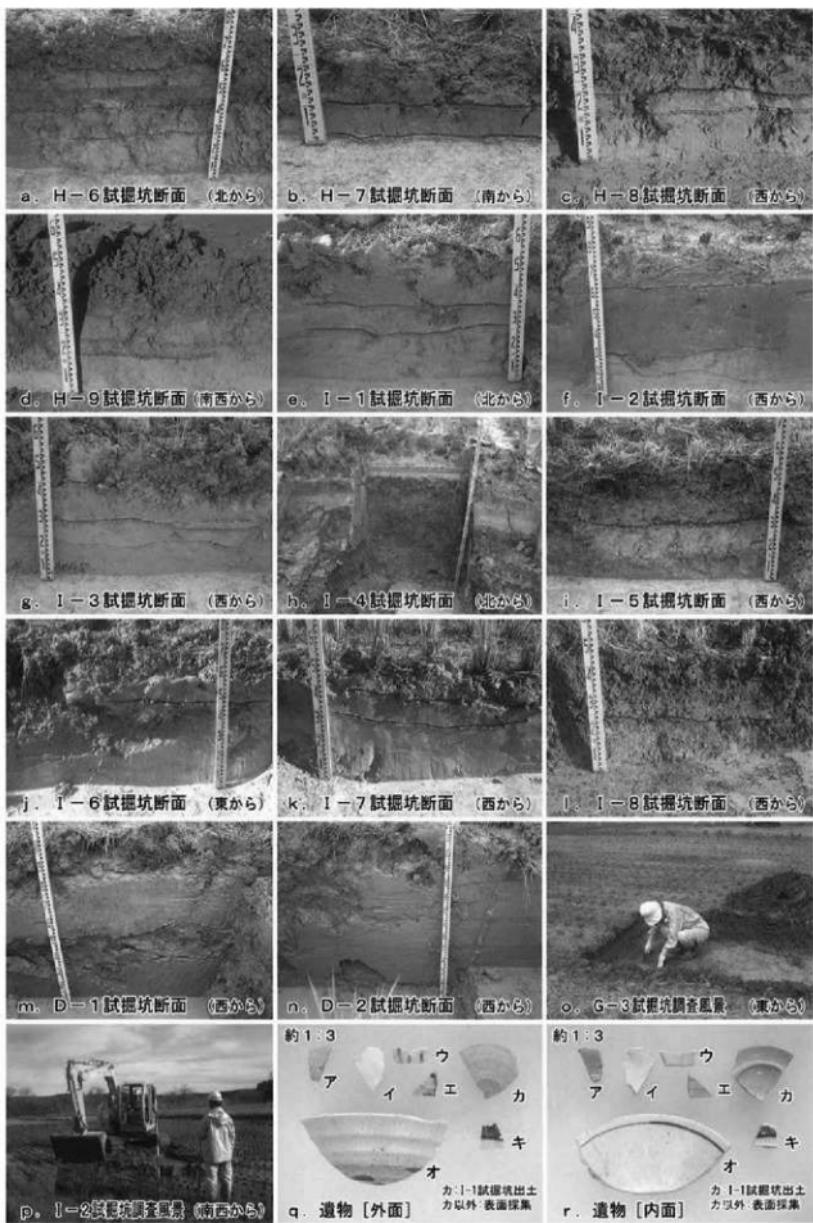
## IV 別俣地区（第3・4次） 2



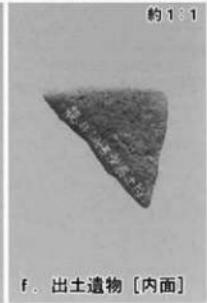
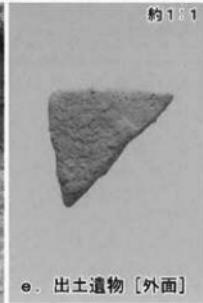


## IV 別俣地区（第3・4次） 4





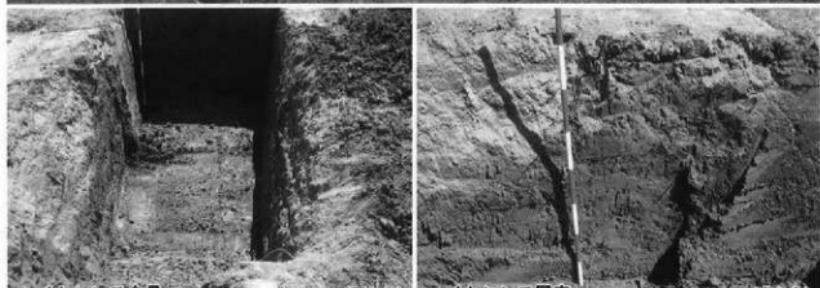
## V 藤井城跡（第5次） 1

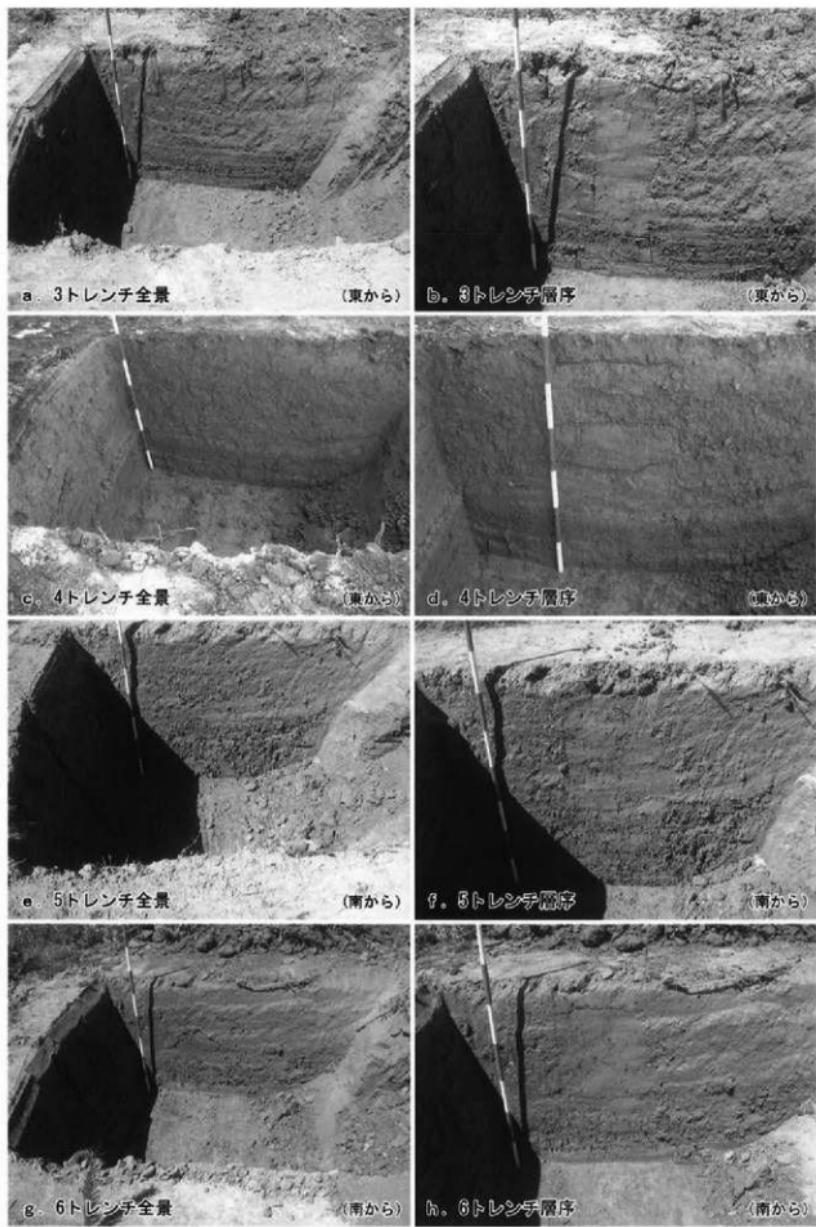


V 藤井城跡（第5次） 2



## VI 築・中田地区（第1次） 1





## VI 獅・中田地区（第2次） 1



a. 調査区全景

(北から)



b. 1トレンチ全景

(東から)



c. 1トレンチ層序

(南から)



d. 2トレンチ全景

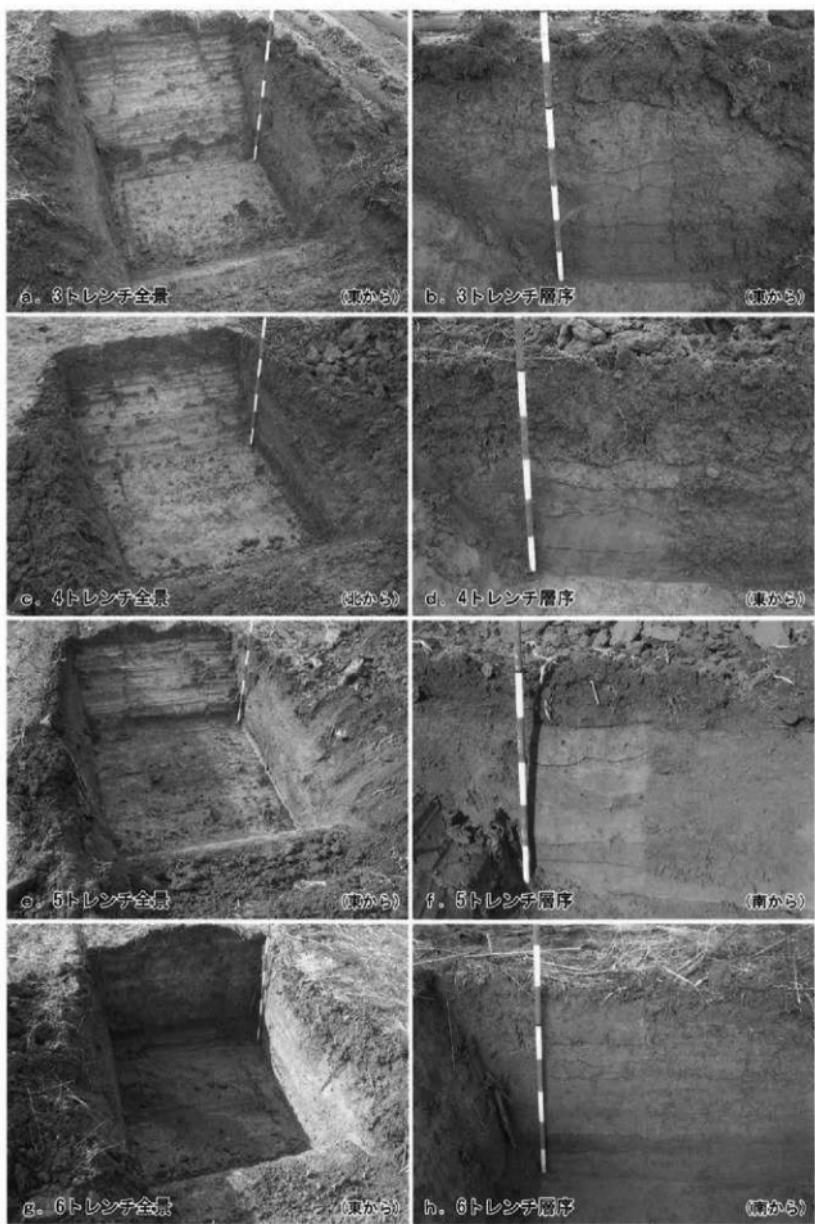
(北から)



e. 2トレンチ層序

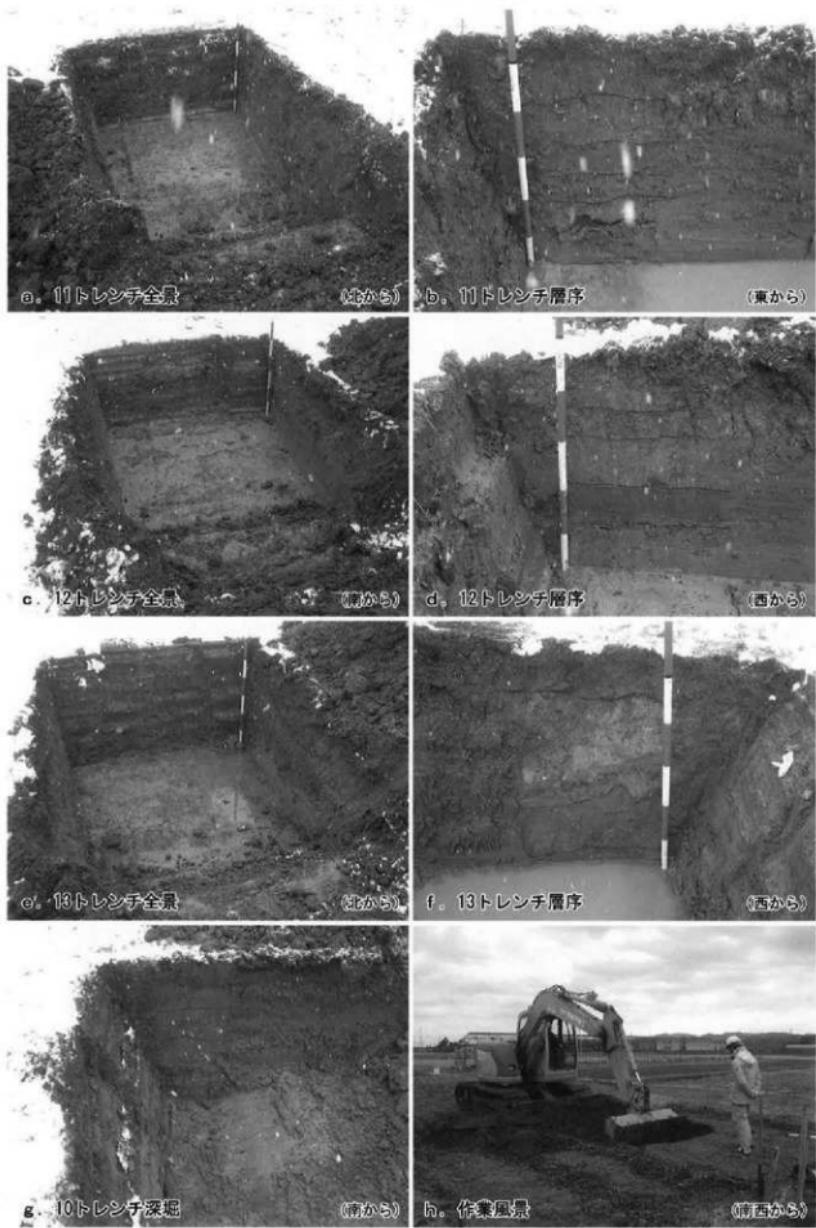
(東から)

## VI 劍・中田地区（第2次） 2



## VI 烏・中田地区（第2次） 3

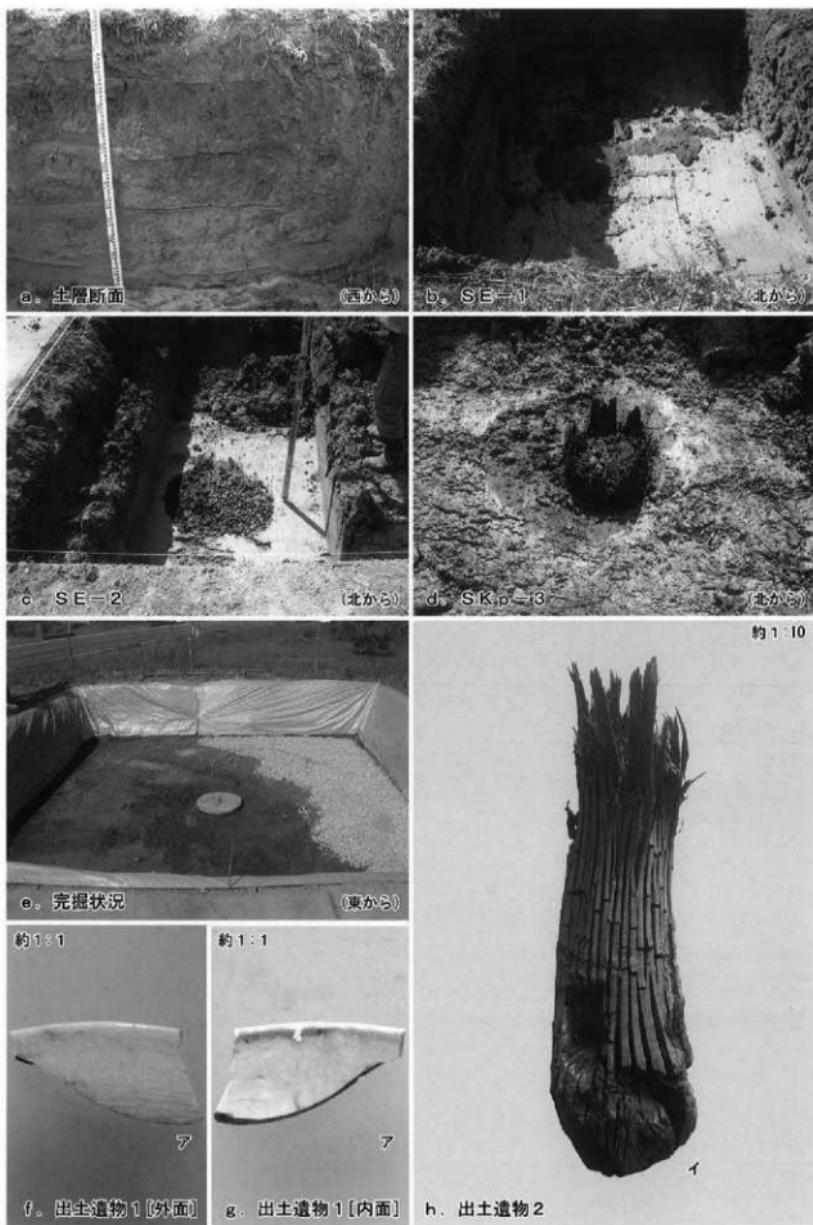




VII 上沢田遺跡 隣接地 1

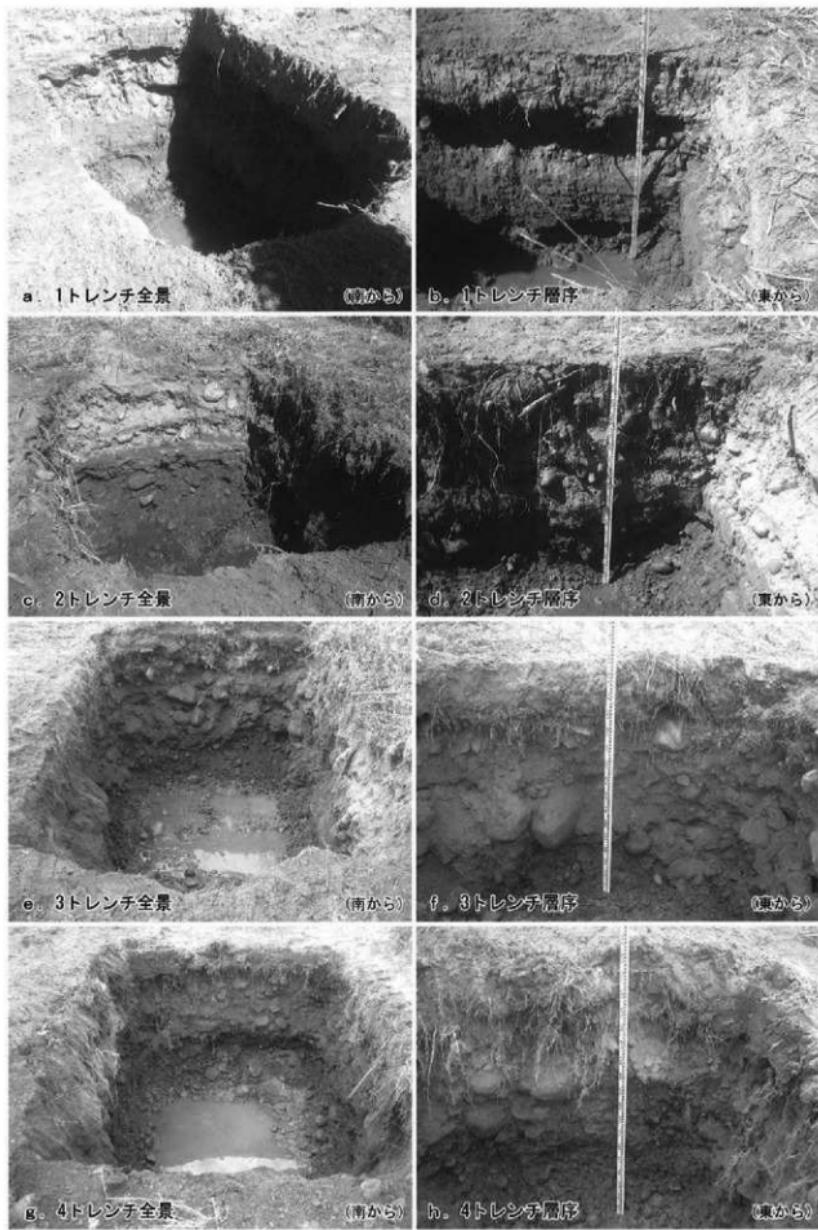


## VII 上沢田遺跡 隣接地 2



VII 野田地区（第1次） 1



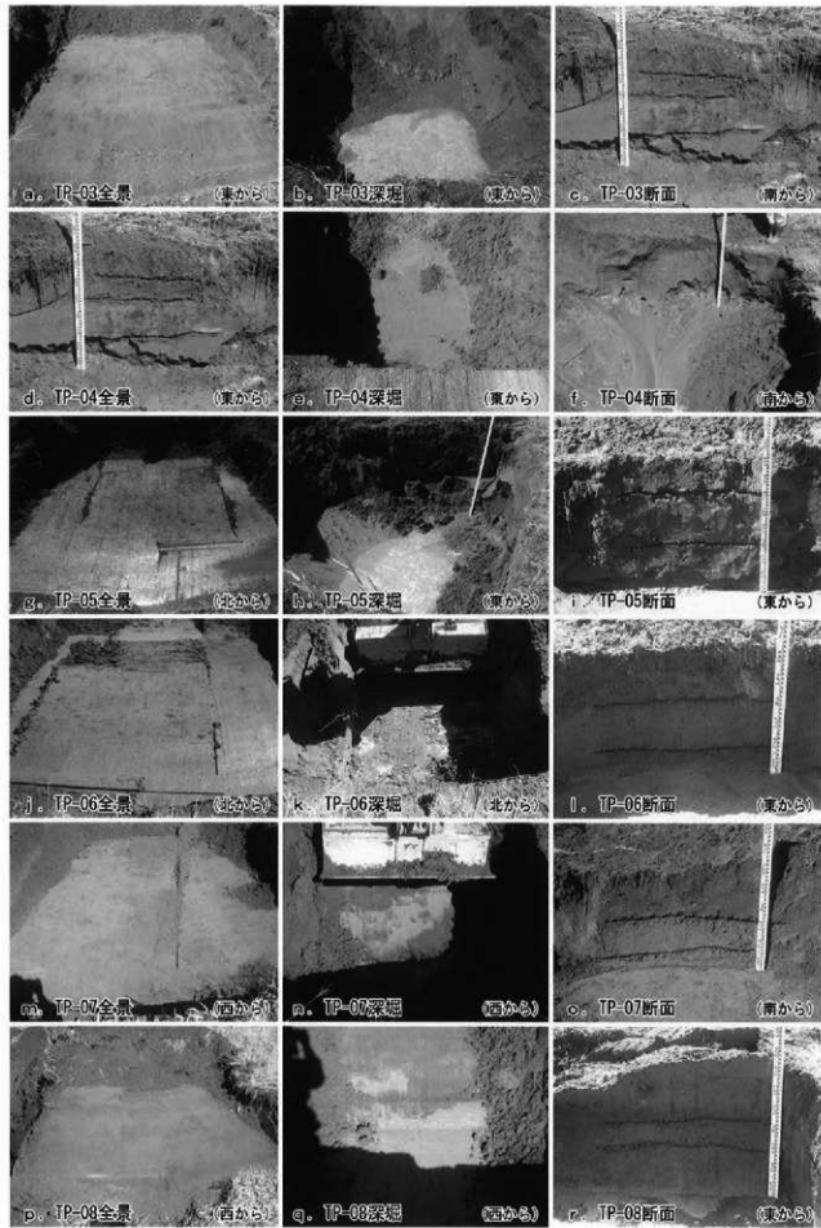


## IX 桜木町遺跡（第2次） 1

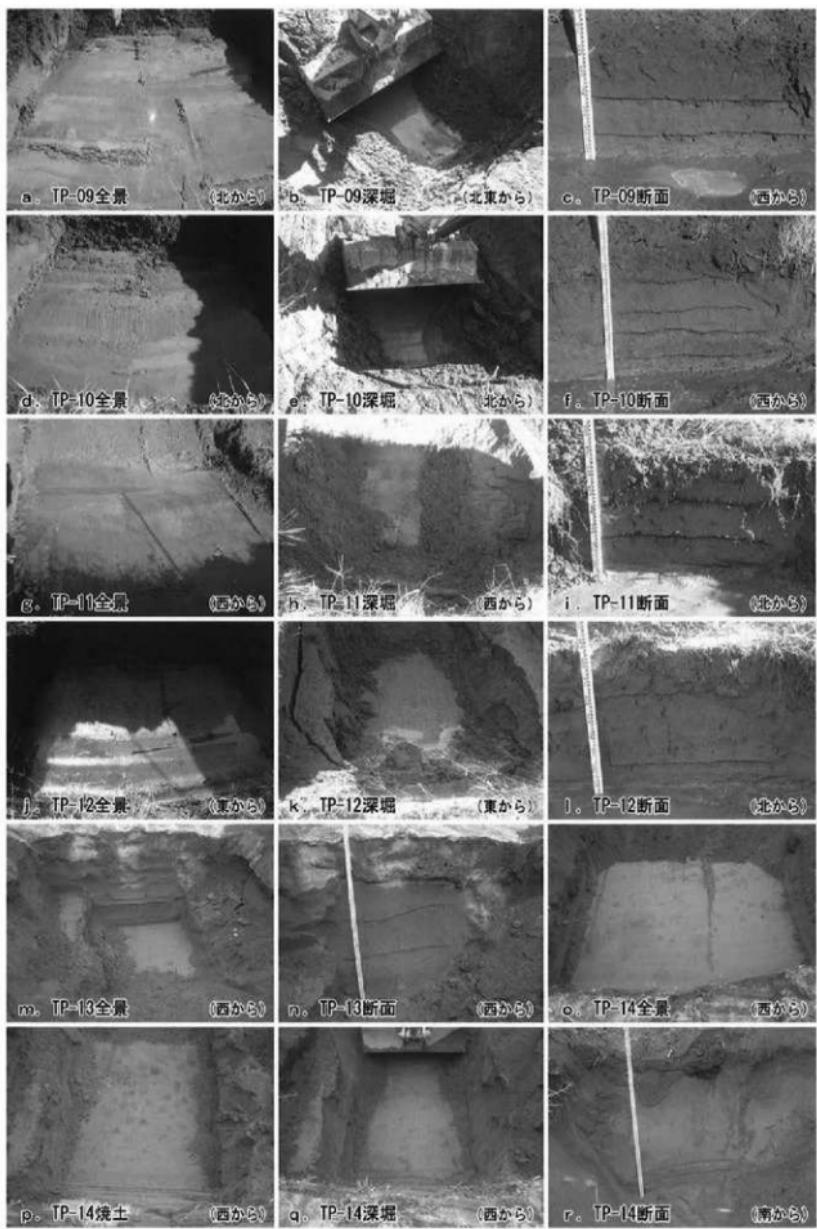




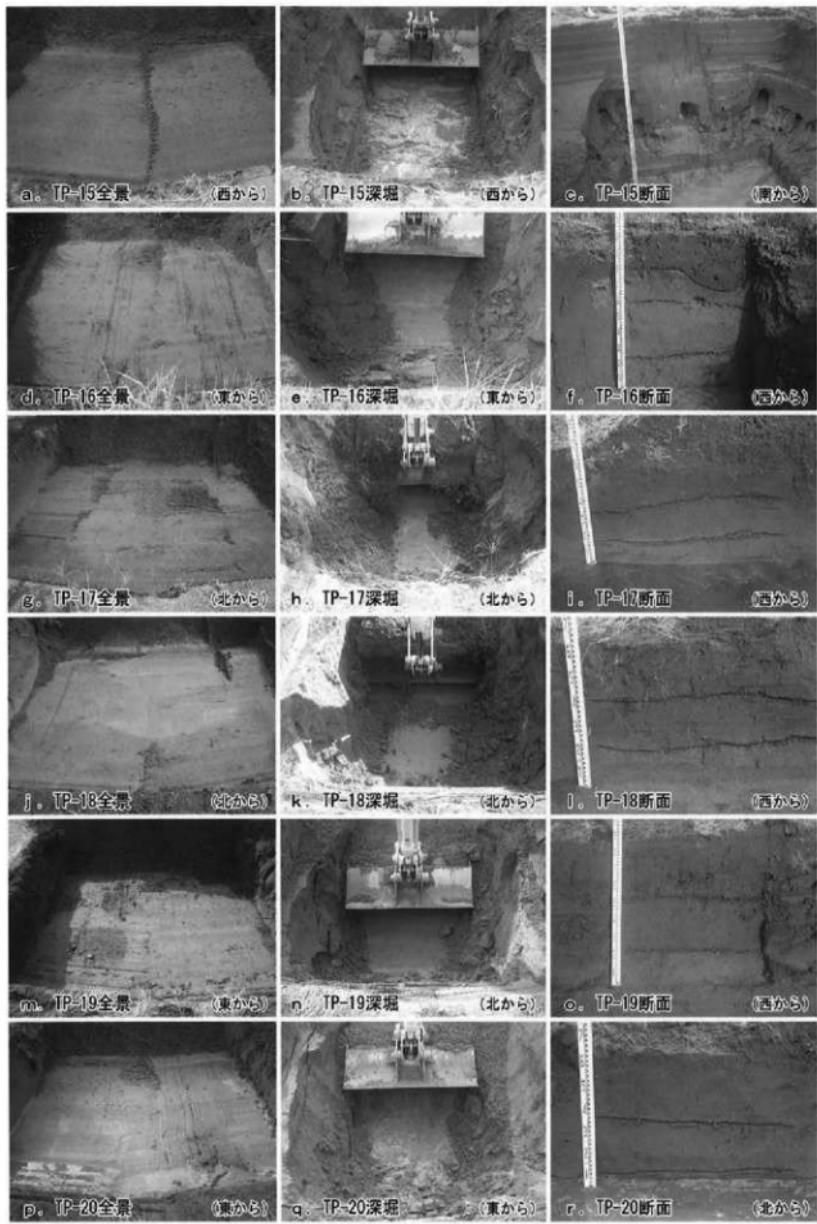
## IX 桜木町遺跡（第2次） 3

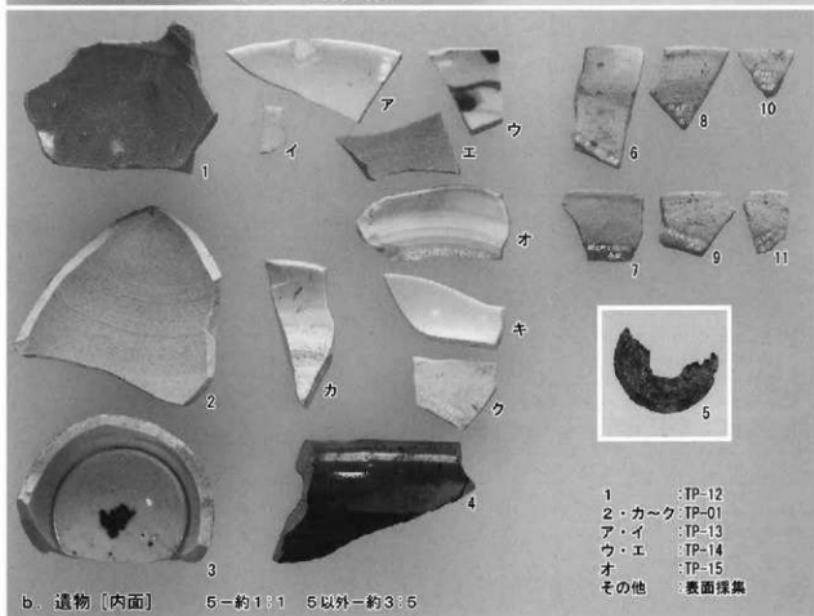
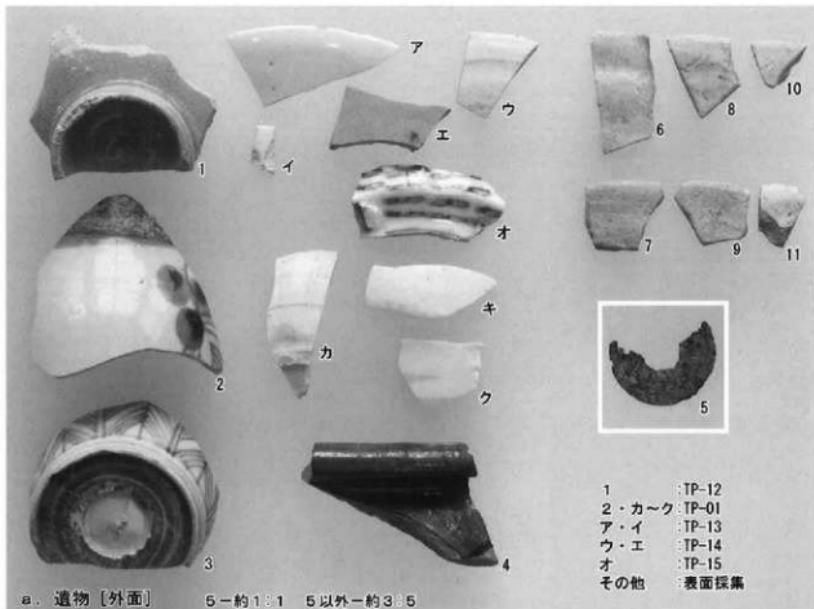


## IX 桜木町遺跡（第2次） 4

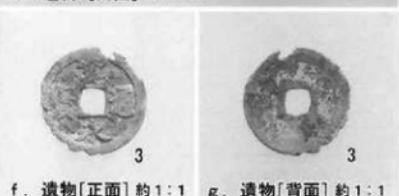
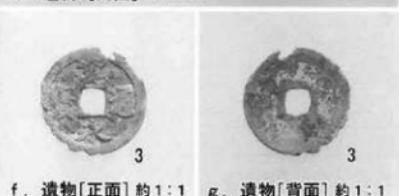
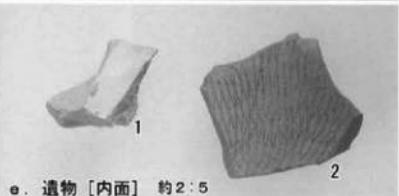
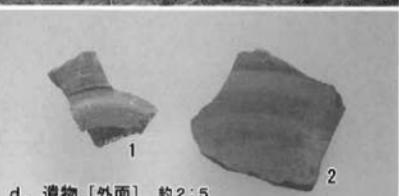


## IX 桜木町遺跡（第2次） 5

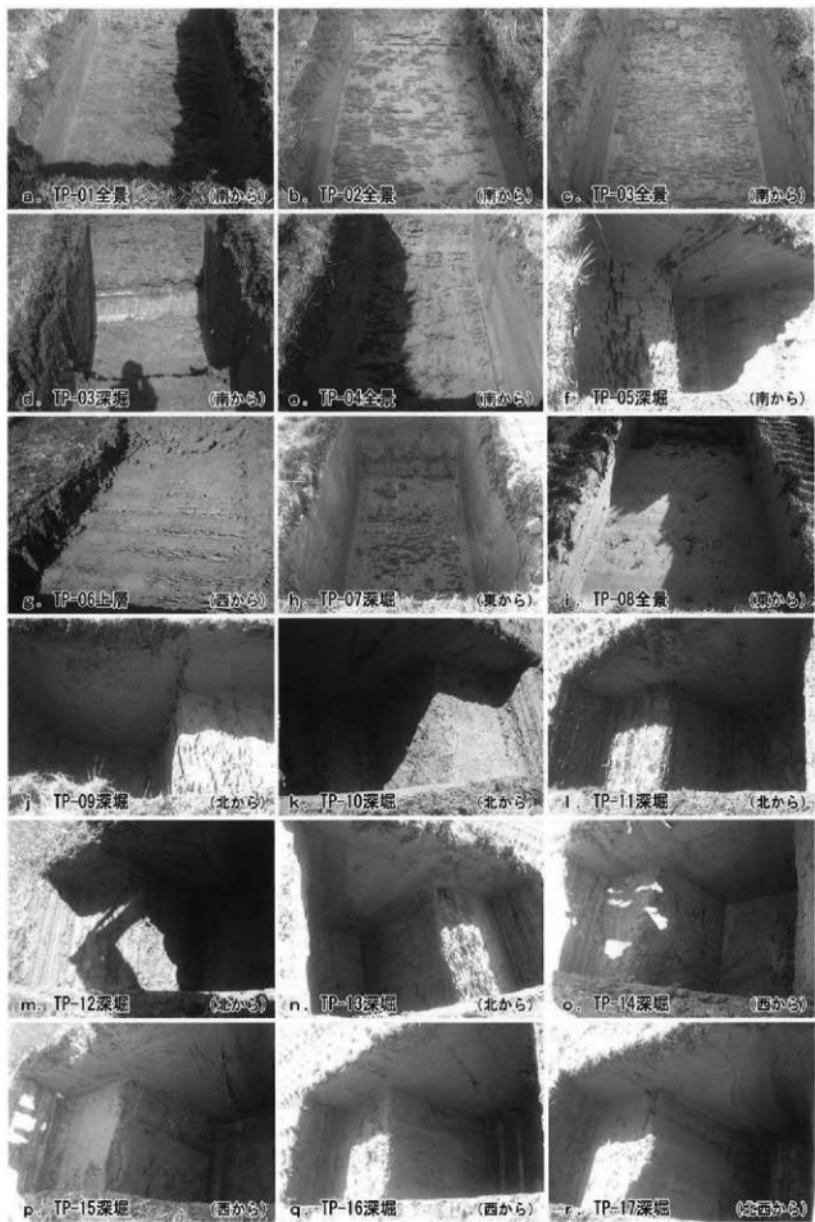




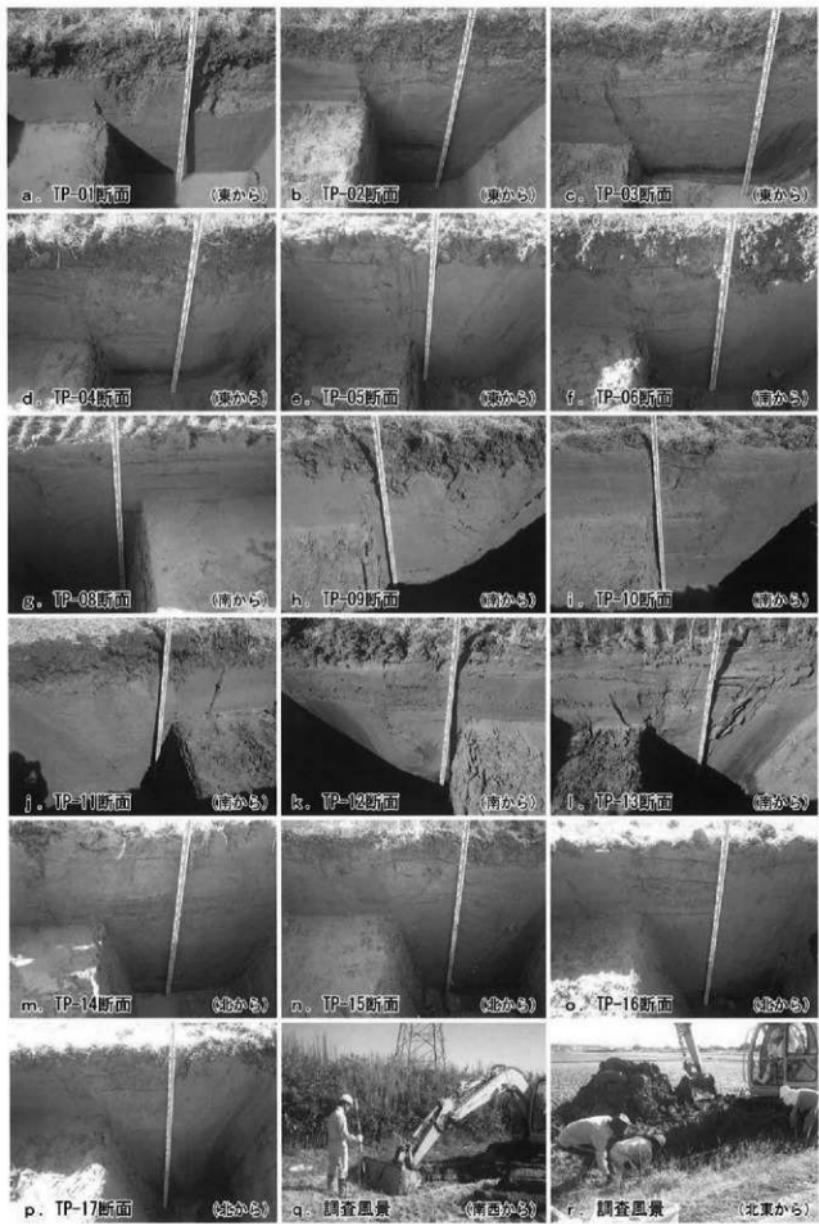
## X 長崎新田地区等 1



## X 長崎新田地区等 2



## X 長崎新田地区等 3



## 報告書抄録

ふりがな	かしわざきしのいせき							
書名	柏崎市の遺跡23							
副書名	新潟県柏崎市内遺跡 平成24年度前半期試掘調査等報告書							
シリーズ名	柏崎市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第75集							
編著者名	伊藤啓雄(編) 平次 靖 中島義人							
編集機関	柏崎市教育委員会							
所在地	〒945-8511 新潟県柏崎市中央町5番50号 TEL 0257-23-5111							
発行年月日	2014年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間 西暦年月日	発掘 面積 m <sup>2</sup>	発掘 原因
		市町村	遺跡 番号					
たかだほくべくちく 高田北部地区(第1次)	新潟県柏崎市 ふじいけん はくさきし 藤橋・横山	15205		37° 20' 29"	138° 34' 21"	20120417 ~ 20120420	359.8	試掘・確 認調査
ないとうちく 内郷地区(第2次)	新潟県柏崎市 にしあがね はくさきし 西山町伊毛	15205		37° 28' 21"	138° 40' 11"	20120424 ~ 20120425	72.0	試掘・確 認調査
べいほくちく 別俣地区(第3次)	新潟県柏崎市 にしあがね はくさきし 大字久米	15205		37° 17' 33"	138° 35' 28"	20120509	201.3	試掘・確 認調査
べいほくちく 別俣地区(第4次)	新潟県柏崎市 にしあがね はくさきし 大字久米	15205		37° 17' 39"	138° 35' 36"	20121128	62.3	試掘・確 認調査
ふじいじょうせき 藤井城跡(第5次)	新潟県柏崎市 ふじい じょうせき 藤井	15205	59	37° 22' 14"	138° 36' 11"	20110609 ~ 20110611	10.0	試掘・確 認調査
つるぎなかたちく 鶴・中田地区(第1次)	新潟県柏崎市 つるぎ なかた 鶴・中田	15205		37° 23' 00"	138° 36' 07"	20120801	28.4	試掘・確 認調査
つるぎなかたちく 鶴・中田地区(第2次)	新潟県柏崎市 つるぎ なかた 鶴・中田	15205		37° 22' 50"	138° 36' 04"	20130205 ~ 20130206	80.4	試掘・確 認調査
かみさとじ 上沢田遺跡	新潟県柏崎市 じゅうさわだ はくさきし 西山町坂田	15205	962	37° 26' 46"	138° 40' 08"	20120828 ~ 20120901	36.0	工事立 会
のきたちく 野田地区	新潟県柏崎市 のいた はくさきし 大字野田	15205		37° 17' 06"	138° 34' 02"	20120903	26.8	試掘・確 認調査
さくらぎじょうせい 桜木町遺跡	新潟県柏崎市 さくらぎ じょうせい 桜木町	15205	346	37° 22' 59"	138° 34' 02"	20120912 ~ 20121002	287.7	試掘・確 認調査



柏崎市埋蔵文化財調査報告書第 75 集

## 柏崎市の遺跡 23

—新潟県柏崎市内遺跡 平成 24 年度前半期試掘調査等報告書—

平成 26 年 3 月 20 日 印 刷

平成 26 年 3 月 31 日 発 行

発 行 柏崎市教育委員会

〒945-8511 新潟県柏崎市中央町 5 番 50 号

印 刷 株式会社 小 田

〒945-1352 新潟県柏崎市安田 4153 番地 1